

711-58



1200501584921

711

58

國民精神文化文獻 五 別冊附錄

河村氏家學拾說

國民精神文化研究所

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



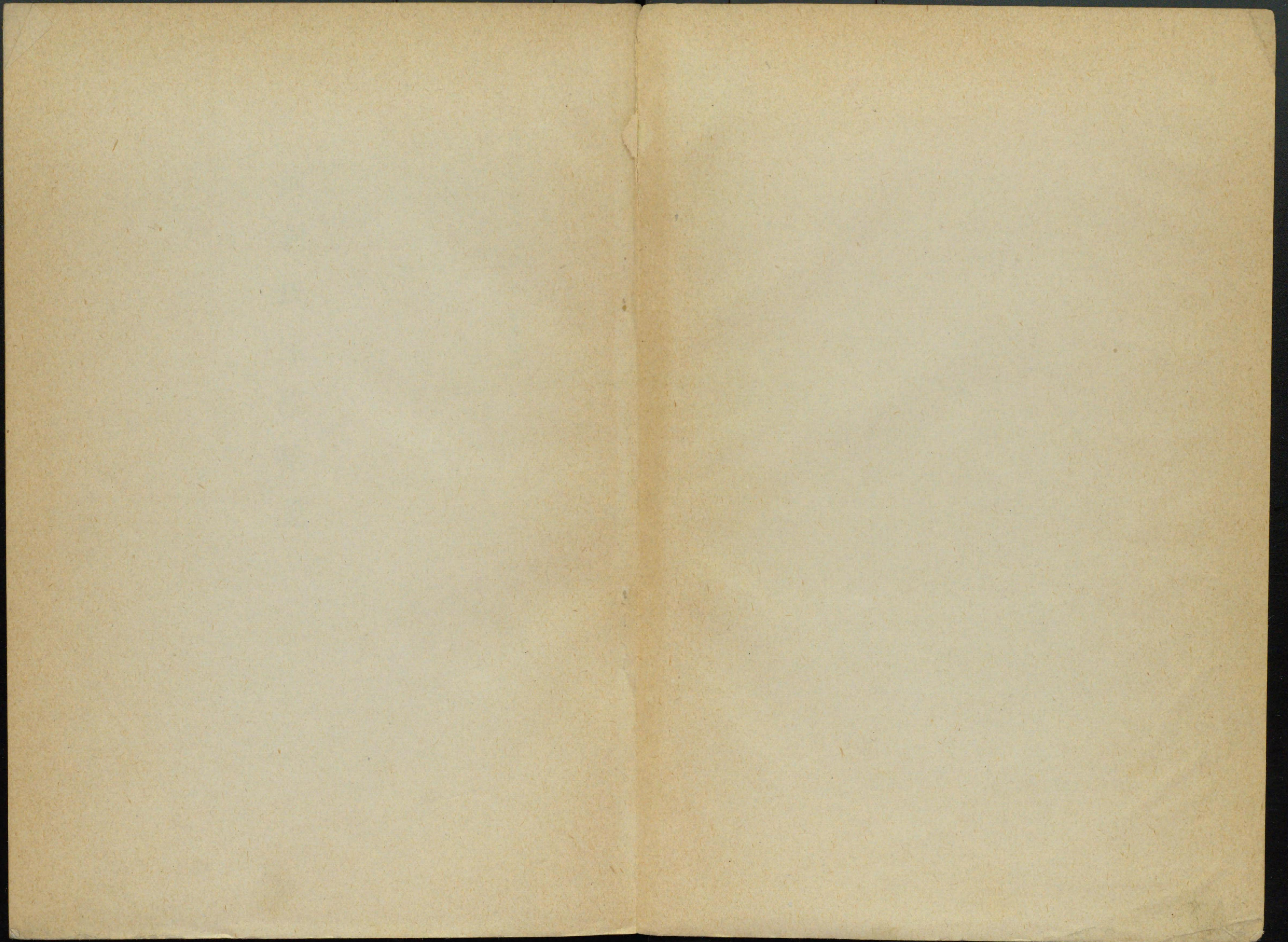
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



711
58

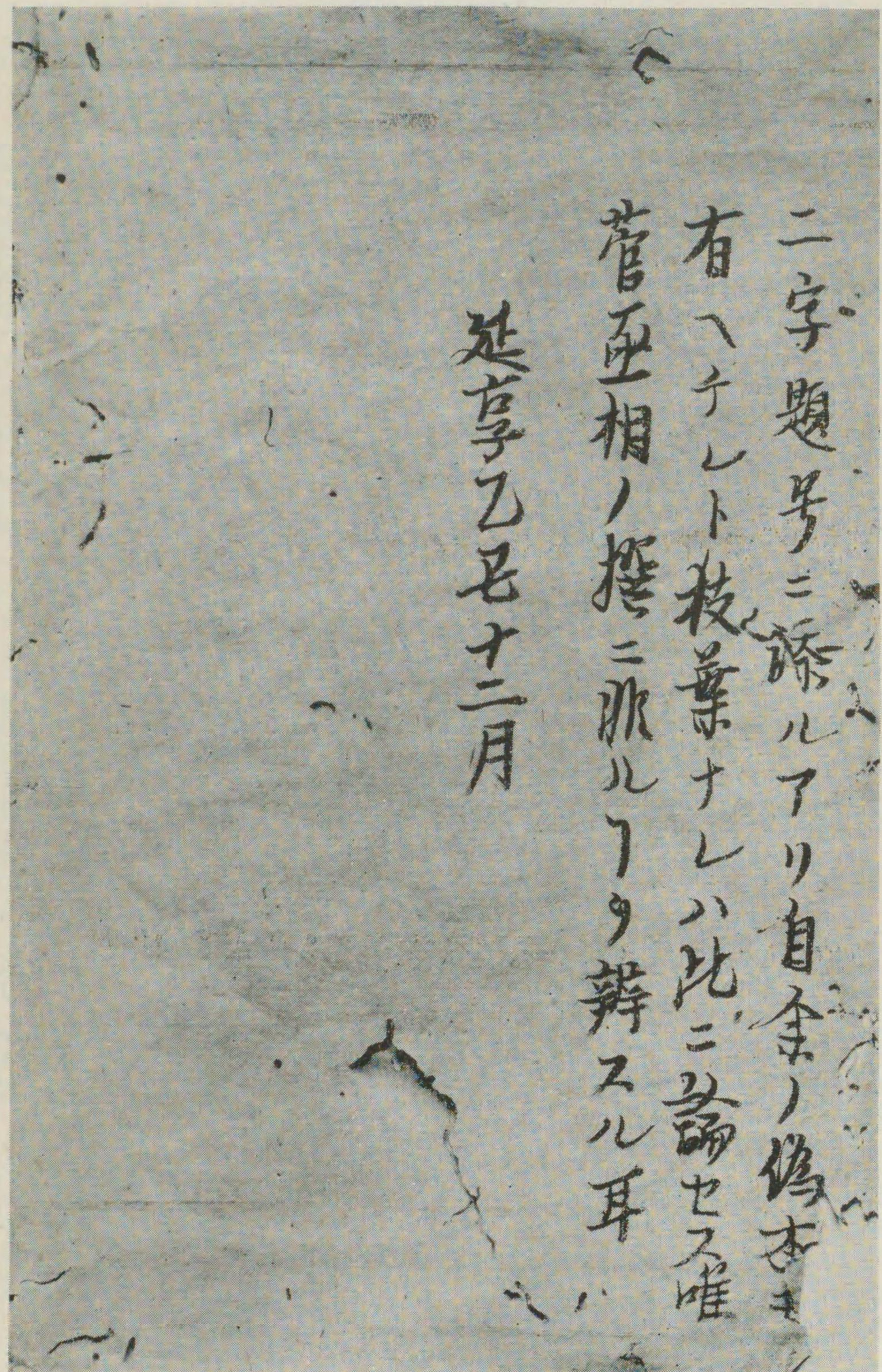
國民精神文化文獻 五 別冊附錄



河村
氏家學拾說

國民精神文化研究所





圖版一 撰類聚國史考 初稿本

無窮會神習文庫藏

撰類聚國史考

尾張河村復太郎秀根藏

桃率榮葉曰類聚國史管家令撰之給也

拾芥抄曰類聚國史二百卷天神御鈔自日本紀至
實錄部類也

仁和寺書目曰類聚國史二百卷管家御撰云云

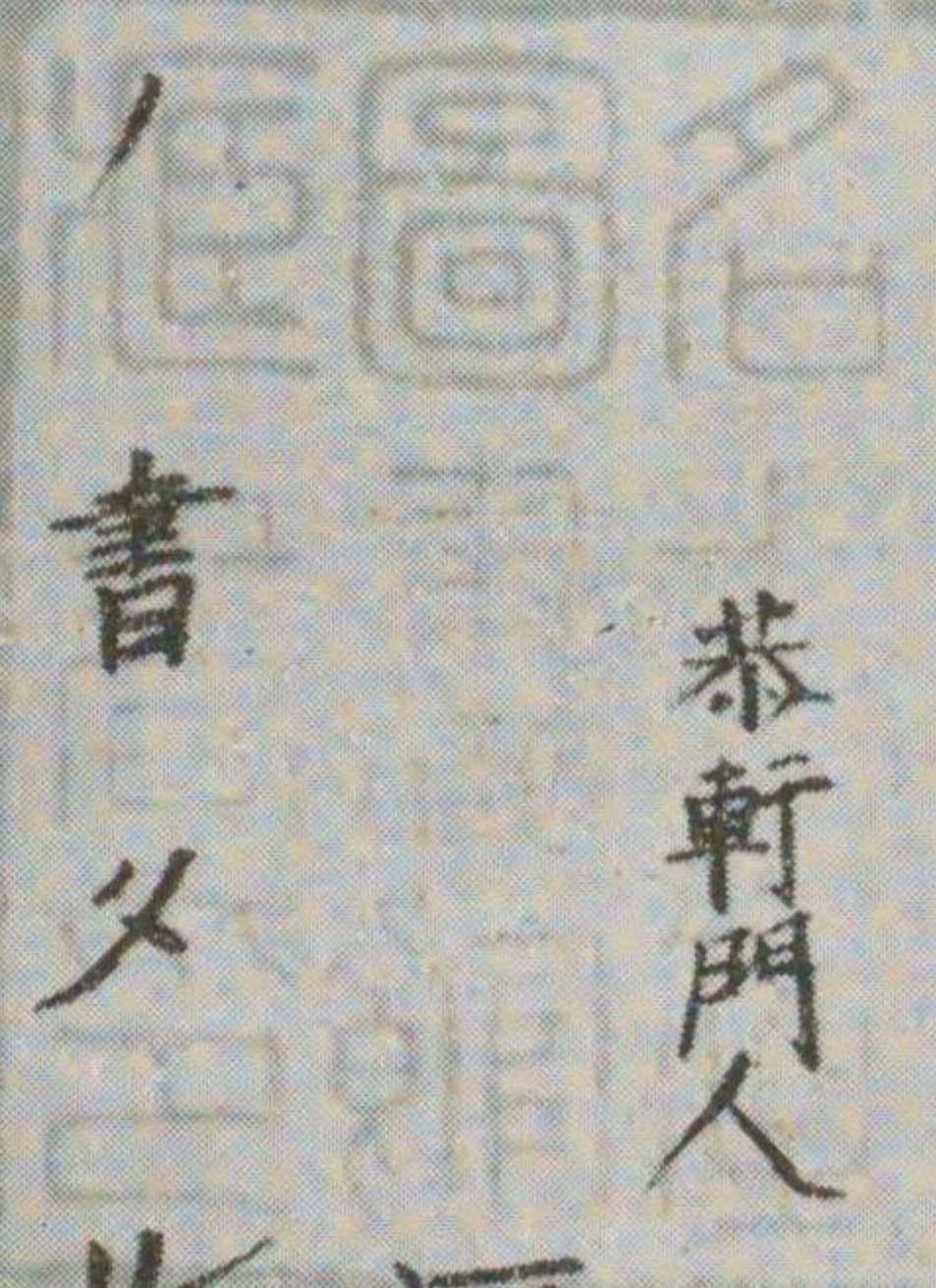
謹テ按二管公類聚國史ノ撰夕儿了斯ノ如シ
其書上神代二起リ下仁和四年二盡リ章々六

國史日本書紀續日本紀日本後紀續ノ全文十
日本後紀文德實錄三代實錄

リ延喜元年八月二日三代實錄ヲ奉進ス初メ
能有卿已下五人勅ヲ奉テ撰之管公預レリ尋

日本書紀撰者考

按ニ日本書紀
史ノ寂ニシテ
此書十カツセ
シトセンヤ帝
模範此書ニ據
孰玉ノ勅撰タ
ル然正題号ノ
下其名ヲ注セ
其皆コレヲ知
ハ何ヲ以カシ
統紀歴史ノ
ヲサレシ舍人
ラサル十シ舍
王ノ統紀歴史
ノ寂ニシテ
神代ノ久遠
ハ何ヲ以カシ
統紀歴史ノ
ヲサレシ舍人
ラサル十シ舍



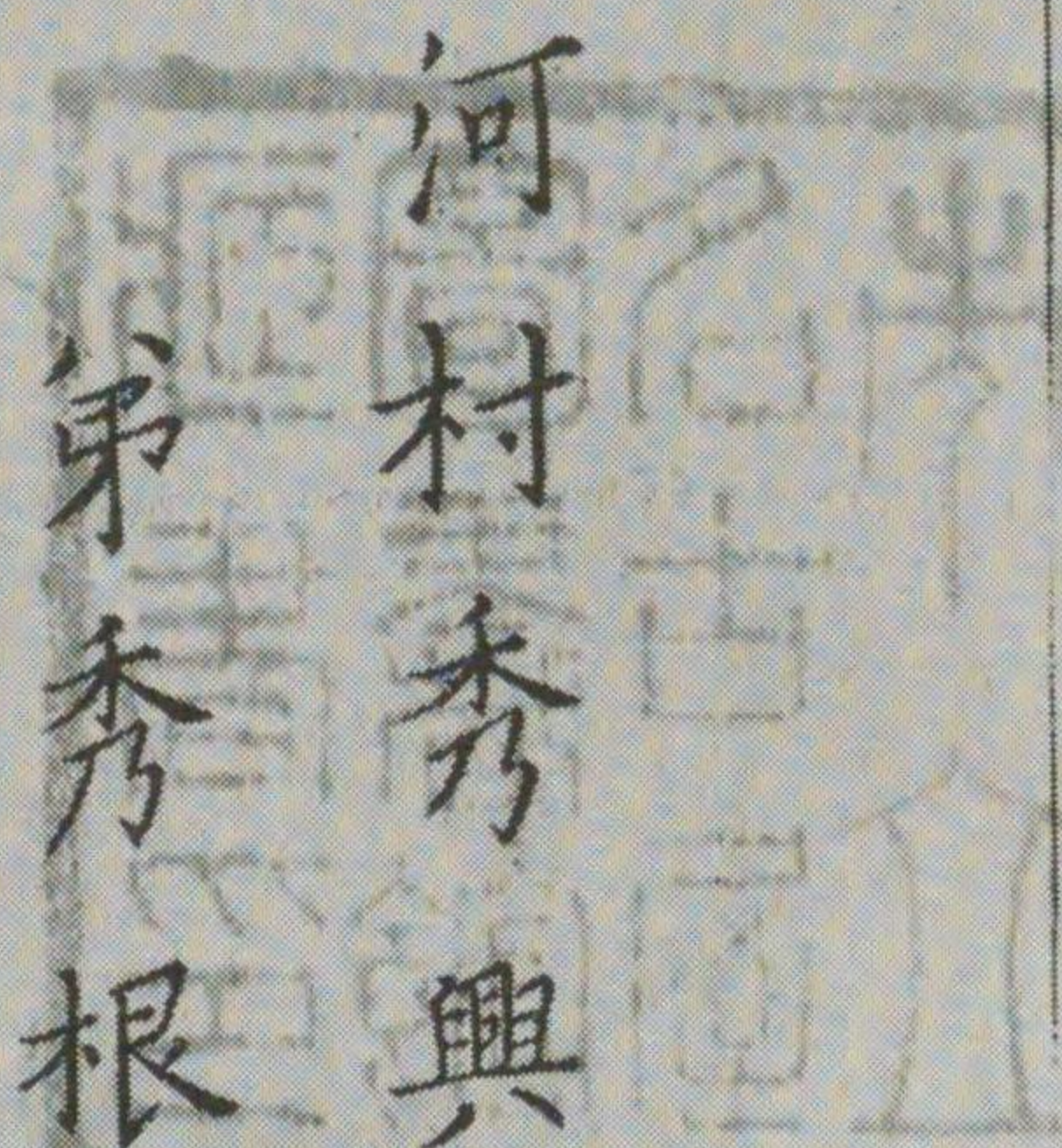
河村秀興著

圖版三 日本書紀撰者考

市立名古屋圖書館藏

日本書紀撰者辨

尾張



河村秀興

弟秀根

同考

竊按日本書紀者

元明天皇

詔而使博學文才之儒臣纂修焉

使舍人親王為惣裁也以其任

重焉故獨專撰名矣然而後世

日本書紀撰者辨

神學辨



河村秀興
弟秀根 述

我神學辨は多しとて神をいやまひ祭を
置れし其乃と學ひ其教と古の志となり
松平んいぢ志れ此神つとめも神事とささり
他事と違ふしつらふらふさあれと付り事
つりて世人古れ法をきん今やうりけあり
正しとてつりと失ひ邪あるゆとて社
論て神は祈をいみぢあふものせらる福を
負ひ

古事記開題

此古事記三卷ハ序文ニ見ヘタル通り太朝臣安麻呂ノ撰ニテ元明天皇ノ
 御宇和銅年中ニ奉後ノ書ナリ本朝國史ノ體賜ハ古語拾遺ノ序文
 ニモ見ヘタル通り上右ニハ文字ナク書成老ヤロクニ言ヒ傳ヘテ神代ノ
 右實ヲ在セシナリ十六代應神帝ノ時物テ文字ワタリ玉仁所止故
 ナト云レ傳士來朝シテヨリ後子ヲ日本ニ用來セリ十八代履中天皇
 四年八月辛卯朔戊戌始之放諸國置國史記言事達四方志ト日本紀ニ
 見タリコレ本朝國史ノ始ナルベシ然レハコノトキハ末全部スル書ノアルトモ云
 ヲバソノ時ノ日記ヲルヒタルノトヲ不具後三十四代推古天皇ノ二十八年ニ聖
 德太子獲我馬子ノ宿禰ト共ニ議テ天皇記及國記臣連伴造百八十部并公氏等
 本記ヲ撰スト日本紀ニ具タリコレ世所謂ル舊事本紀ナリ然レハ三十六代
 皇極天皇ノ御宇ニ獲我ノ蝦夷ノ入鹿父子亂ノセツ志ク燒失セラソノ書傳ラス
 船史惠人ト云モノソノモエクヒノ中ヨリ燒ケノコリノ書ヲ和テ天智辛ニ奉リ
 又リ其證如左○皇極紀曰獲我臣蝦夷等臨誅志燒天皇記國記珠寶
 船史惠人昂夜取所燒國記而奉中大兄云○新撰姓氏錄序曰皇極
 握鏡國記皆燒幼弱迷其根德發強倍其偽說天智天皇儲官也船史惠
 人奉進燈書云云今世ニ行ハル旧事本紀十卷ハ推古ノ朝ニ撰タル也

家塾錄

尾張 藤益根

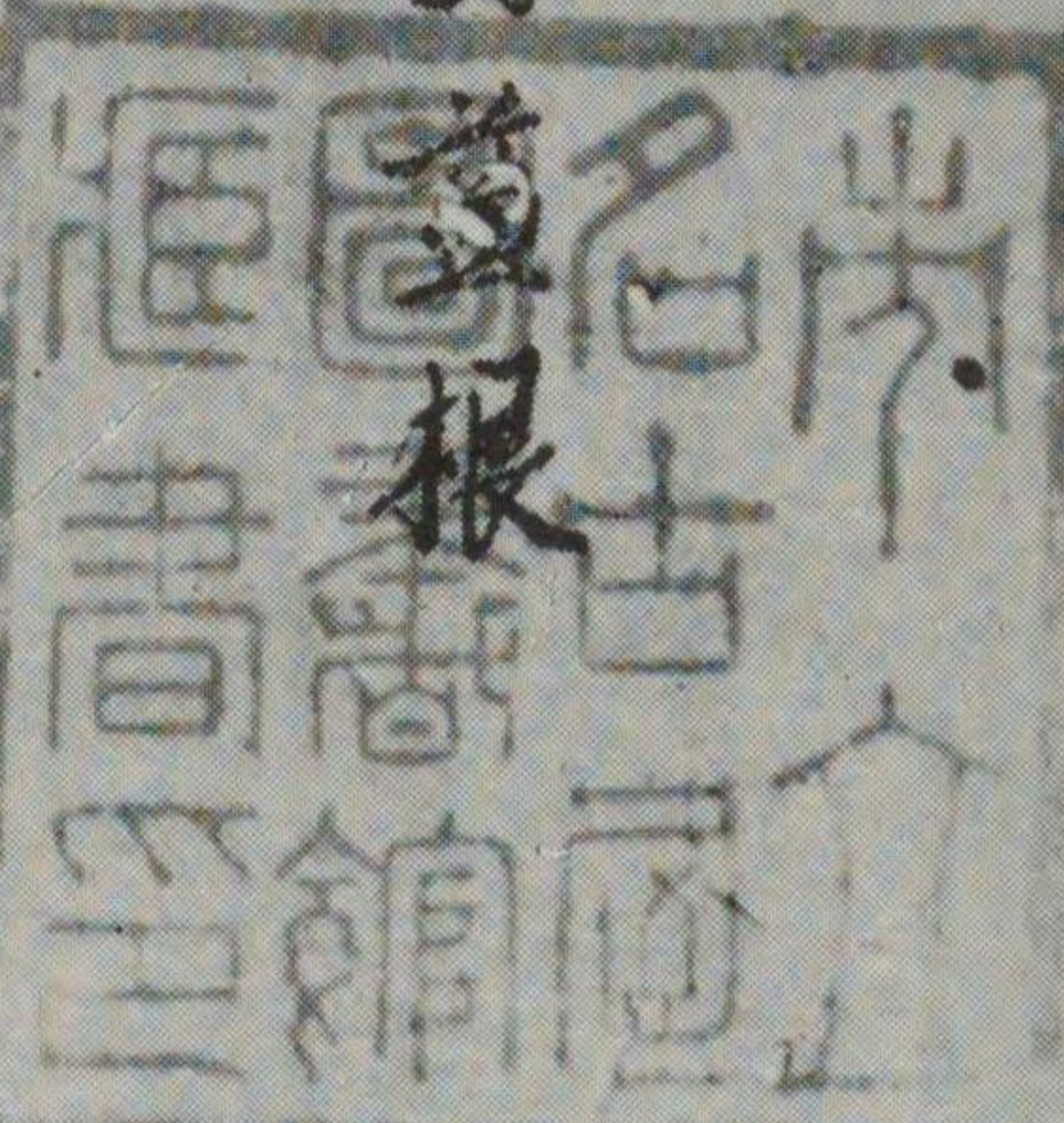
凡童子入塾今文孝經授句讀日一二行或四五行
才有頓漸不必強之讀用俗音不用倒置熟讀數編
上口為期次論語日授十行或二十行次毛詩日授
五篇或十篇熟讀宜誦之次尚書次易次春秋次禮
記日授四五十行日宜覆讀人力有限不必諷七經
惟毛詩宜諷誦之七經既畢宜讀文選既讀文選無
字不可讀宜讀爾雅以知訓詁則無書不可解矣
凡書生檢經義於孝經則鄭玄玄宗註孔安國偽文

論讀式

凡讀式有三、一曰詔書、二曰勅書、三曰經典、詔者、朝廷臨大事則用之、其讀法用古言、是謂之訓、訓者、義取古言可爲法也、勅者、百司承旨、而爲程式、奏事請施行者、其讀法、錯音倒置、是取施行而易通也、經典以音直下、不錯以訓、斯謂之古讀、範、中古有黠、圖者出、以讀勅書式、讀經典、百家、就容易失經常、是走活法而避死法、所以招害、遂深也、至于今日、流弊已極、古訓亦廢、獨以倒置爲不刊之法、世之阜然有力、唱古者、亦未能復焉、泥於舊深、未知其弊也、其讀勅書式、用倒置之法、宜哉、從事之便也、周公聖人、與群下矢誓、其誥煩而悉、以訓於衆、故也、若夫咎繇之謨、畧

偶談

藤



人の行實を孝悌の道より外に以て見るるを
 善事とも兼ふべし少くも其本をまもるるを
 家父よりひきつるよ文武ともに其乃に在る周禮乃
 古行孝悌姍姍任恤を簡條に於て孝悌乃ありま
 一を解きて孝悌を天の道より所謂舒之暢於六
 官卷之帛盈於一握より少に切て孝於父母弟於
 兄弟を孝悌乃一握より少に切て孝於父母弟於

711
58

目次

解題

撰類聚國史考 (初稿本) 一

撰類聚國史考 (訂正本) 七

日本書紀撰者考 一三

日本書紀撰者辨 二

神學辨 二七

古事記開題 四一

家塾錄 一三七

紀典學に關する文書 一三三

目次

一

刻孝經鄭註序……………一四一

論讀式……………一四一

論吳漢兩音……………一四一

偶談……………一四九

卷頭圖版

- | | |
|---------------|---------------|
| 圖版一、撰類聚國史考初稿本 | 圖版二、撰類聚國史考訂正本 |
| 圖版三、日本書紀撰者考 | 圖版四、日本書紀撰者辨 |
| 圖版五、神學辨 | 圖版六、古事記開題 |
| 圖版七、家塾錄 | 圖版八、論讀式 |
| 圖版九、偶談 | |

河村氏家學拾說解題

撰類聚國史考

初稿本 一册 無窮會神習文庫藏
 訂正本 一册 市立名古屋圖書館藏

秀興、秀根兄弟の撰述である。その内容に就いては、首卷(二二頁)でふれておいたが、初稿本は秀根の執筆である。訂正稿は兄弟の共著となつてゐる。引用書や行文の相違はあるが所説の核心は一つものである。「類聚國史」の書史的問題としては中核を衝いてゐるものであらう。

初稿は「延享乙丑(二年)十二月」の成立で、吉見幸和に入門して、恰度一年目である。兄弟の素質的な傾向と幸和の兄弟に與へた影響とを知り得るものである。訂正稿は、「于昔延享三歲丙寅黃鐘日」とある様に、初稿の翌年十一月の稿である。論の立て方も初稿本よりはしつかりしてゐる。底本として、初稿本は無窮會神習文庫所藏の寫本を、訂正本は市立名古屋圖書館所藏の秀根自筆本を用ゐた。初稿本は「珍書百家叢說」第貳編に活字にして收められてゐる。

日本書紀撰者考

一册 市立名古屋圖書館藏

「菴軒門人河村秀興」と署名して秀興の最初の述作である。片々たるものだが、日本書紀の筆削者を論じたものとして今日といへども問題とさるべきものである。秀興は後年日本書紀の撰述期を二つに分けて考へるにいたつたので、書紀集解にはこのまゝはとらなかつたが、舍人親王筆削といふ古來の傳統的所説を捨てるのはこの時に始まつてゐるものである。成立は「延享三丙寅歲二月十八日」と巻尾にある。底本としては、市立名古屋圖書館所藏の秀興自筆本に據つた。

日本書紀撰者辨

一册 市立名古屋圖書館藏

「日本書紀撰者考」の所説を漢文に直して、兄弟の共著として刊行したものである。所説の核心は變つてゐない。この所説と奥附に「日本書紀集解嗣出」とあることは、「書紀集解」成立事情の考察に於いて重視すべきものである。成立は、「延享丁卯(四年)之春」と巻末に在る。兄弟の述作は、「撰類聚國史考」やこれに於いてみられる如く、そのいづれの著述と分つ事はむしろ無理なのであつて、互ひに助け合つて研究してゐるのである。底本としては市立名古屋圖書館所藏刊本を用ゐた。

神學辨

一册 市立名古屋圖書館藏

秀興、秀根兄弟共著の神道説であるが、その所説は、大體に於いて吉見幸和を踏襲してゐるといつて然るべきであらう。成立は巻末に「延享五戊辰孟春」とある様に改元して寛延元年となる年である。幸和に就いて以來丸三年と一寸の所であり、思想的には未だ師の羈絆を脱却し得なかつたのはむしろ當然であらうと思ふ。底本として、市立名古屋圖書館所藏の秀興自筆本を用ゐた。

古事記開題

一册 市立名古屋圖書館藏

題簽と中扉に

古事記開題 序文講義

とある。これに據れば、本書は古事記序の註解書として書かれたやうにもみえるが、序文の「然乾坤初分參神作造化之首」の條に

コ、ノ文ヲ以テコノ三神ハ人體ノ神ニアラズ造化ノ神靈ナリナド云ハフカク不レ考説ナリ悉シク本文ノマツ
口ニテ辨ズルユヘコ、ニ略ス

とあるのを以つてすれば、古事記本文の註解をも志してゐたものらしく考へられる。その計劃が果して實行に移

されたかどうかは全く手懸りはないが、これ以上は書かれなかつたものであらう。

著者は秀興らしく考へられる。その事を明記した箇所があるわけではないし、又秀根、秀興の一方に決める必要もなく、決めては却つて間違ひでさへあらう。唯執筆した人として考へれば秀興かといふことになるだけである。秀興が改まつて自分の意見を提出する場合には「秀興按ニ」とするのがこの書を通じての定型であり、又河村氏の著述を通じてみられる通則である。換言すれば「按ニ」といふのは、著者自身の意見を示す時の通則であり、他の人の説は「何某云」とか「何某説云」とかするのが、河村氏の著述に於ける通則である。従つて本書を以つて秀興の著述と認めて然るべきであるやうであり、殊に秀根の説を「秀根説」として引用してゐるので、更に裏附されるのであるが、後半になると、「秀根按」「根按」としてあるので一應は迷はざるを得ない。但し「秀根按」とは附箋にあるので、後に秀根が補つたとみてもいい。又「根按」とあるのは行間の註記が多いのだから、著者以外の人の補筆ともみられるが、秀興、秀根以外の人ならば「根按」と略稱する事は考へられない。斯うした稱呼は秀根自身であるのが普通だが、それでは秀根の著述かといふと一方に「秀興按ニ」とあるのが説明出来ない。兄の秀興からならば「根按」と呼んでもさしたる不都合はないわけであるがやはりこれだけでは秀興と決する事は出来ない。が、「秀興按」が多いだけに秀興かと考へられるだけである。

もう一つの手懸りは本書に「日本書紀撰者辨」を参照してほしいといふ事が二個所程ある。その後の方は傍の註記になつてゐるが、本文の執筆期と殆ど同時のものである。それに

日本紀序ナク撰者ヲ注セサルコトハ予アラハス「日本紀撰者辨」ニツマヒラカニ論ス

とある。「日本書紀撰者辨」のことは、その條に就いてみて貰へば分る様に草稿と刊本とあつて、これは刊本の方の稱呼である。その草稿は秀興の著となつてゐるが、刊本の方は秀興、秀根共著となつてゐるので、これによつても本書の著者を一決する事は出来ないわけである。だが草稿を作つたのが秀興であるから、どちらかといへば共著とあつても秀興のものともみておくのが穩當のやうである。

これらによつて考へてみると、秀興らしいがさうとする決定的な理由にはならない。斯うした事の起るのは、この兄弟の初期に於ける研究の特徴で、「日本書紀撰者辨」の場合にもみられるものである。秀興とし秀根としてみても、原案がどちらであるかといふだけの事で、それが一つの草稿としてまとまるに就いては兄弟互ひに手傳ひ合つてゐるのであるから、一方的に決定しては却つて内容にそぐはないことになるのであると思ふ。従つて本書に於いても、原案乃至は執筆者が秀興であるといふだけの事で、秀根が殆ど著者同様の立場で参劃してゐる共著に等しいものと認めて然るべきなものであらうと思ふ。そしてこの事は、この書の成立が極く初期に屬するものである事を同時に物語つてゐるのだと思ふ。

成立の時代は、これ亦日附がないので明かでないが、「悉シクハ日本紀撰者辨ニ載ス」云つてゐるから延享四年（二四〇七）春以後であり、秀興と稱してゐるから、安永四年（二四三五）秀穎と改名する以前といふ事は明かであるが、この三十年程の間の何處かといふ事ははつきりしない。たゞ草稿だからでもあらうが、論の立て方

にたど／＼しいところがあり、又前述した様に秀興、秀根共著といつた内容のものであるだけに、この三十年間の中でも極く初期と考へて然るべきなのであらう。さうしてみると秀興が父の後を襲つて出仕するのが寶暦元年（二七五一）十二月廿一日であるから、かうした述作をしてゐられるのはその前と考へておくのが順當な時期となつて來るであらう。暫定的なものであるが、延享四年から寶暦元年までの五年間の中何處かとしておいていいのであらう。

斯うした年代の成立と推定してみると、これが古事記全卷に及ぼす積りであつただけに、古事記研究史上に於いて「古事記傳」に先立つものとして、目立つた計劃になつて來る。殊に註釋史からみてゆくと、未だでもあり断片的なものでもあるが近世的研究としてはつきりした色彩を示してゐるもので、「古事記傳」の世に出る機運が、既に時代として熟しつゝある事を十分に窺ひ得る。

古事記裏書（便宜斯う稱するが、その内容は二部に分つべきものかもしれない）、厚顔抄、鼈頭古事記、古事記割記、古事記詳説並別記、古事記頭書等を辿つてみても、いづれも部分的な註釋書であり、たとへ全卷に互つても割記と稱し得る程度にすぎなかつた。この「古事記開題」の計劃は、計劃だけではあるが全卷に及ぼさんとしたものでもあり、その註は割記程度のものには止まらなかつた。完成すれば立場は暫く別として、「古事記傳」に匹敵すべきものになつた筈の、劃期的な計劃であつたわけである。

古事記を取扱つてみても、秀興の場合には、眞淵の門流といふわけではなく、そこに古道論的な主張があつたのでなく、むしろ吉見幸和の門人として、國史官牒によつて古典を研究するといふ、云はゞ契沖時代の古典研究の如く、研究の對象が古典にあるので、従つて古事記は古事記として認めつゝ、一方その序文をも漢文で修飾的言辭を弄するものと宣長のやうに捨てる事をしなかつた。唯何と云つても、秀興、といふよりも河村氏一門は、國語學的技術を有つてゐないのであるから、古事記全篇の註を作り上げる時、「古事記傳」を凌駕し得たかどうかは覺束ない。が少くとも、この序文の性質を論じ、これを古事記の内容と切り離してはならないものとしたのは、偶々河村氏が眞淵、宣長の様に古語によつて古意をといふ方式に煩はされずに考へられる立場にゐたからであるが、「古事記傳」以後の古事記研究に徴してみても順當な取扱ひと云はねばならぬものであらう。

河村氏としては、記紀を比較する時、日本書紀は

帝王ノ御血脈開闢ノ初ヨリ立ツ處ノ君道ヲ唯一路ニ記シ玉ヘリ

といふ正史としての立場で古事記以上に重視しようとする事は認められるが、一方古事記が

コノ書文體甚タ古雅ニ自餘ノ書トハ其様大ニ異ナレリ漢字ヲ用ユトイヘ斥漢文ノ法文字ツカヒ等ノ法モナク假名書相マシリテ、日本紀ニ擬スレバ文體拙ク俗ナルヤウナレ斥コレ上代質素ノ風俗ニノ却テ殊勝ノ至リナリ、ソレユヘ本朝古實上代ノ古言等ハ日本紀ヨリモ此書ニ多ク日本紀ヲヨムニモコノ書ヲ以テ訓點ノ證トセザレ古言ニモトレリ然レ斥安麻呂記スルノ日阿禮カ傳ノマ、シヒイ文章ニモカ、ハラズソノマ、筆記セシユヘ國史ノ法モナク帝王統紀モタ、シカラズ、故ニ國史トハセラレズ（中畧）タ、昔ノ古事ヲシルスト云ノ

意ニテ古事記ト題セリ、依テ國史トハセザルナリ

と古事記の特異性を認めて採つてゐるのである。それはやはり、序文をとつたと同様に和漢と對立的な物のみ方をしなかつたためであり、そこに幸和以來の傳統的な立場をも認め得る。

古事記そのもの、書史的理解、内容的理解としては、結果からいへば「古事記傳」をあけねばなるまいが、河村氏の研究に共通してゐる、従つて本書にもはつきりみえる、資料の凡ゆる場合を竭して考へてみるといふ方法は、結果に於いて人を納得せしむるだけの客觀性には乏しいとは云ひながら、實證主義的研究の草創期の潑刺たる姿として推奨していゝものであらう。資料は何處までも資料である。先人がどう云つたといふ師説家説の傳統を離れて考へてみるといふ古典研究方法の革新時代の著述として、たどくしい跡はみえるが、やがて「書紀集解」へ展開する過渡的な姿として、河村家の古典研究の草創期の姿を示してゐるものである。

この翻刻は市立名古屋圖書館所藏の秀興自筆草稿本に據つた。

家塾錄

一册 市立名古屋圖書館藏

益根の家塾に於ける指導方針の概要を述べたもので、漢學を表に立て、國學を裏にしてある。次の「紀典學に關する文書」と表裏をなすものである。刊本ではあるが、刊記もない。臆測するに、益根の家塾に入門するに當つて、塾の方針として子弟に頒布し、了承せしむるための印刷物ではなかつたらうかと思ふ。成立は寛政三年二

月の「紀典學に關する文書」に「家塾科錄」とみえるのがこれであらうから、それ以前の成立であることははつきりしてゐるが、上限は知る由もない。益根の年齢からいつて、せいぐ天明初年までしか溯り得ないであらう。底本は市立名古屋圖書館所藏刊本にとつた。

紀典學に關する文書

一册 石田元季氏藏

益根が、尾張一の宮眞清まきみ田神社の社中から、國典では何を讀んだらいかと尋ねられ、それに答へた書狀風のもので、紀典學を中心に、漢學、歌學、書道、音樂、裝束等に互つて述べてゐる。「家塾錄」と表裏をなすものである。今日河村氏の家學を紀典學と稱するのはこれに由來するのであるが、その紀典學を樹立したのは秀根であるといふことには一寸注意を要する。紀典學の内容をなすものは、云ふまでもなく、秀根が手がけ、秀根の教養として身につけてゐるものであるから、秀根が樹立したといつて差支へはないのだが、秀根は紀典學といふ名稱を用ゐたことは一度もないのである。益根もこの文書の冒頭に

家翁學得候趣紀典ノ學問

といつてゐるが、「趣」で讀點をうつてみれば、紀典學といふ名稱は益根のものであつてもいゝのである。斷定する事は出來ないが、紀典學といふ名稱は益根のものであつたかもしれない。その成立は、「寛政辛亥(三年)二月」と巻尾にあるのによつてよからう。底本は石田元季氏所藏の寫本にとつた。この寫本は益根自筆とされてゐ

るが一考を要するものであらうと思ふ。(首卷卷頭圖版) 原本は書狀で題號は有たない。(第十一参照)

刻孝經鄭註序

論讀式

論吳漢兩音

市立名古屋圖書館藏

いづれも、益根の刊行した「孝經」に收載されてゐるものである。この「孝經」のことは首卷の「益根の生涯」の條(二二八—二三〇頁)に述べておいたが、「刻孝經鄭註」はその刊行に當つての序であると共に、益根の漢籍に對する見解を窺ふに足るものとしてこゝに掲げた。「論讀式」は、益根の漢籍讀解の方法として、直下に音讀すべきことを主張したものであり、「論吳漢兩音」は漢音吳音を論じたもので、共にその家塾に於いて子弟に教へて來たものである。その成立をいへば、「序」はその末尾に云ふ「寛政三年辛亥冬至」を目當にしていゝが、他の二つは、その塾に於いて多年實踐して來た所で俄かにこの頃の意見といふわけにはゆくまい。凡例にも「嘗著論讀式、論吳漢兩音二篇」とある。が「論讀式」にいふ直下音讀の方法は、「偶談」によれば、廿六、七歳の頃から七年にして自らこの方法に熟したといふから、寛政初年には門生にも説いてゐたものであらう。漢吳音に對する意見も此頃には決してゐたものであらう。とすると「序」の日附を以つて成立、執筆期として大きな間違ひはないわけである。

この繙刻は市立名古屋圖書館所藏の刊本に據つた。

偶談

一冊 市立名古屋圖書館藏

益根の隨筆風の著述で、その學風をみるのに最も便利なものである。その所説は無論その凡てをそのまま承認することは出来ないが、これを近世的學風確立のための努力の一端としてみれば、興味のあるものといへよう。その成立は、はつきりしないが、「先人著せる集解云云」の辭句によれば、秀根歿後のことと思はれ、從つて寛政四年後、恐らくは益根晩年の述作であらう。底本としては、市立名古屋圖書館所藏の自筆稿本をとつた。

以上の十二種の説を茲に收録したのであるが、その本文は製版上止むを得ざる場合を除いて原本の體裁をとゞめる事につとめ、頭註、傍註、附箋等を小活字を以つて組み込み、或は異體の字を普通の字體に改める外は、假名遣返り點等も原文のまゝにしておく事とした。校訂者の註記は凡て()を以つて包み、□としたのは推讀したものなる事を示す。

撰類聚國史考

(初稿本)

撰類聚國史考

恭軒門人

河村秀根著



世に相傳テ云類聚國史二百卷ハ菅亟相ノ撰ト云按ニ年曆齟齬シテ甚タ訛ル者也其元ヲ考ニ拾芥抄ニ據リ類聚國史二百卷天神ノ御抄自日本紀至實錄部類也ト見エタリ拾芥抄ハ洞院左大臣實熙公抄シ玉フトイヘ何レノ記ニヨリ此ノ如ク記シ玉フヤ覺束ナシ類聚國史ノ書體ハ拾芥抄ニ云ル如ク日本書紀ヨリ三代實錄ニ至リ類ヲ以是ヲ聚メ上ハ神代ヨリ下ハ光孝天皇ニ至リ全ク六國史ノ抄出ナレハ類聚國史ト號スルコト宜也然レモ三代實錄ハ延喜元年八月二日撰修畢テ奉進ス菅亟相奉敕ノ一人ナレモ事ニ坐セラレテ左降ノ由序文ニ見ユ公卿補任ヲ按ニ昌泰四年辛酉七月十五日改テ延喜元年トス正月廿五日菅道真太宰員外師ニ左遷ス三年二月廿五日任所ニ薨ストアリ然レハ任所ニ就玉ヒテ后時平公等三代實錄五十卷ヲ奉進シ玉エハ任所ニ於テ三代實錄ヲ見玉ヒ類聚國史ヲ撰玉ハンヤ是疑ノ一也

撰類聚國史考(初稿本)

若類聚國史ヲ任所ニテ撰玉ハ、三代實錄撰修以後薨去迄纔二年ニ足ラス二百卷容易ニ撰修シ玉ハンヤ文德實錄十卷スラ貞觀十三年始テ撰修ニ就テ元慶二年十二月十三日ニ奉進スマシテ二百卷何ソニ年ノ間ニ一人トノ撰ミ玉ハンヤ是疑ノ二也又菅（菅）丞相三代實六撰修ノ一人ナレハ草稿有テ三代實六ニヨラスシテ撰玉フト云ハ、豈實錄ト國史ト文ヲ同フセンヤ王代一覽ニ寬平四年五月菅（菅）丞相ニ勅シテ類聚國史ヲ作ラシムト云々王代一覽ハ林春齊（林春齊）ノ撰ニシテ代ノ書ナレハ據ナクテ此ヲ記サンヤ故ニ扶桑略記日本紀畧帝王編年及神皇正統記大鏡ニ至ルマテ寬平ノ條ヲ點檢スルニ未タ此ヲ見ス後學ノ考ヲ俟耳タトエ實記ニ此ヲ載ルハ寬平四年ニ菅（菅）丞相ニ勅ノミアリテ撰修ナカリシ成ヘシ全ク六國史ノ抄出タル證ハ日本書紀ヨリ文德實錄ニ至リ事ヲ記スニ支子（支子）ノミヲ以シ清和陽成光孝三代ハ幾日及支子（支子）ト記ス類聚國史モ亦文德帝マテハ記スニ支子（支子）ノミヲ以シ清和陽成光孝三代ハ幾日及支子（支子）ヲ記ス是ニ於テ六國史ノ抄出タルヲ知ヘシ且勅ニ仍テ此ヲ撰玉ハ、表及序アルヘシ律令日本書紀等ハ至テ古書ナレハ序表ナキハ質素ノ體トスヘシ桓武天皇以來勅撰ノ書或ハ序アリ但廿一代和歌集ニ於テ序ヲ加エサルアリ聊旨有ヘシ國史官牒ニ於ハ必表アリ序アリ類聚國史ニハ未是ヲ聞ス若上表序等有ニ於テハ菅家文草ニ載ヘシ然ハ文草ニ載サレハ序表ハニナキ（ナキ）分明ニシテ是勅撰ニ非サル證也又本朝通記ニ寬平四年夏五月道真勅ヲ奉テ撰類聚國史編卷都テ二百卷自日本紀至三代實錄部類ストアリ本朝通

記ハ一向近代ノ書ニ論ニ足ラス且引書ノ目錄ニ拾芥抄及王代一覽等アレハ是等ニヨリテ書タル成ヘシ又自日本紀至三代實錄部類ストア如何ソヤ三代實錄ハ六十年代醍醐天皇ノ延喜年中ノ書ナレハ五十九代宇多天皇ノ四年ニ何ソ有ヘケンヤ按ニ類聚國史ハ延喜以來天曆以前菅氏ノ人六國史ヲ見易カラシメン爲類ヲ以抄出セシ成ヘシ菅（菅）丞相博識秀才世ニ隱レナケレハ後人誤テ菅氏ノ撰ナレハトテ菅（菅）丞相ニ詫シテ拾芥抄ニモ上件ノ如ク記シ玉フ者歟又天曆以前ニ修撰ト論スル旨ハ源順ノ和名抄第八瘡類ニ類聚國史云仁壽二年頗倉流行人民疫死云々順ハ後撰集撰者ノ一人ニシテ天曆ノ人也タトヒ菅（菅）丞相ノ撰ニ非ストイヘハ國記ノ實六ニ證スルニ足（足）如此後世ノ僞書妄撰ノ類ニ非ス惜カナ近代亡失ノ纔ニ存スル（存）七十有餘卷然ルニ今世名ヲ假テ僞作セルアリ六國史ニ載サル文ヲ新ニ述テ國史ト號スルノ類又奉勅二字題號ニ添ルアリ自餘ノ僞本モ有ヘケレト枝葉ナレハ此ニ論セス唯菅（菅）丞相ノ撰ニ非ル（非）ヲ辨スル耳

延享乙丑十二月

撰類聚國史考

(訂正本)

秀

根

識

撰類聚國史考

桃華藥葉曰類聚國史菅家令撰之給也

拾芥抄曰類聚國史二百卷天神御鈔自日本紀至實錄部類也

仁和寺書目曰類聚國史二百卷菅家御撰云云

謹テ按ニ菅公類聚國史ノ撰タルヲ斯ノ如シ其書上神代ニ起リ下仁和四年ニ
盡ク章々六國史日本書紀續日本紀日本後紀續ノ全文ナリ延喜元年八月二日三代

實錄ヲ奉進ス初メ能有卿已下五人勅ヲ奉テ撰之菅公預レリ尋テ事ニ坐セラ

レ左降ス迺チ序文ニ見ヘタリ公卿補任曰昌泰四年辛酉七月十五日改爲延

喜元年正月廿五日菅道真左遷太宰員外帥三年廿五日薨於任所云云私カニ

考ルニ其疑ヘキモノ三ツ類聚三代格神龜五年九月六日敕曰於圖書寮所藏

佛像及内外典籍書法屏風障子并雜圖繪等類一物已上自今以後不得輒借

親王以下及庶人君不奏問私借者本司科違云云亟相豈實錄ヲ配所ニ閱見シ

抄出シテ此書ヲ成ンヤ此可疑ノ一ツナリ若此ヲ配所ニ成ト云凡其太宰帥タル一殆二年ニシテ薨_ス府文德實錄十卷ノ編次漸ク八歳ヲ經タリ況於若干卷ニ哉此疑ヘキノニツナリ又亟_ニ相撰_ル者ノ員ニ預レハ更ニ其草稿アルカ然レモ非_ニ本書_ニシテ何ソ如此書體ヲ同フセンヤ自_ニ日本紀_ニ至_ニ文德實錄_ニ記スルニ獨支干ノ以テス三代實錄ニ及テハ記スニ日ト支干ヲ以テス類聚國史亦然リ此疑ヘキノ三ツナリ本朝文粹菅贈大相國早春觀_テ賜_テ宴宮人_ニ同賦_シ催_テ粧_ヲ曰_ク聖主命_ニ小臣_ニ分_ニ類_ニ舊史_ニ之次見_レ有_リ上_ニ月子_ニ日賜_テ菜羹_ヲ之宴_ニ云野史亦云寬平四年菅亟_ニ相_ニ勅_シテ類聚國史ヲ作サシムト云云思ニ奉_ル勅_ノ功終ラザルカ其序表ナキ可_ニ以_テ追考扶桑略記文武天皇事條見_レ文章モ亦載_レナシ此其證ナリ或_ハ人云後_ニ人菅公ノ功ヲ繼分注云景戒記并類聚國史テ三代實錄ノ一ヲ補モノナランイカン予云此書二百卷部少_ニ角獨_ニ以_テ通力_ニ爲_ス時々竊_ニ行_ク也云探此文無_ニ續日本紀_ニ然ルキハ今類聚國史ト菅公御撰ト一ナラザルコト明ラケシ

倭名類聚鈔ニ引_テ類聚國史云仁壽二年頗瘡流行人民疫死云云然レバ延喜天曆ノ間博士六國史ニ便セン爲_ニ分類

ノ此書ヲ成スモノカ菅亟_ニ相奉_ル勅_{アル}ヲ以テ後_ニ人此公ニ附_シ記_シ其因襲ノ弊斯ノ如シ菅公ノ撰ニ非ト云ヘモ倭名類聚鈔ニ引ケハ徵ルニ足リ後世ノ僞書妄撰ノ類ニ非ス惜カナ近代亡_シ失_シテ存ル_ル半ニ足ラズ今世名ヲ假_テ僞_ニ作_{セル}モノアリ六國史ニ載ザル_ルヲ新ニ述ル_ル類キ又奉_ル勅_ノ二字ヲ以テ題號ニ加フ自餘ノ僞本舉_テ不_レ可_レ知_ル予カ意唯菅公ノ撰ニ非ル_ルヲ辨ル_ルノミ

于皆延享三歲丙寅黃鐘日

尾張 河村 秀根 識

(次頁ニ)

尾州 河村 秀根 識

日本書紀撰者考

日本書紀撰者考

恭軒門人

河村 秀興 著

按ニ日本書紀ノ書タルヤ六國史ノ最ニシテ神代ノ久遠ナル此書ナカツセハ何ヲ以カシルシトセンヤ
帝王ノ統紀歴史ノ模範此書ニ據ラサルナシ舍人親王ノ勅撰タル人皆コレヲ知ル然ルニ題號ノ下其名ヲ
注セサルモノハ何ゾヤ予不敏トイヘルニ考索ノタメ管見ノ覃トコロ左ノ如シ

○續日本紀第八曰元正天皇養老四年五月癸酉先是一品舍人親王奉勅修日本紀至是功成奏上紀三十卷系圖一卷

○釋日本紀曰弘仁私記序云日本書紀者一品舍人親王從四位下勳五等太朝臣安麿等奉勅所撰也

○延喜六年日本紀竟宴三統宿禰理平和歌序曰日本紀者一品舍人親王從

四、位、下、太朝、臣、安、滿、等、奉、勅、所、撰、也、神、代、上、下、紀、帝、世、廿、八、紀、惣、三、十、卷、筆、削、成、功、其、勤、至、矣、

○天、慶、六、年、日、本、紀、竟、宴、橋、朝、臣、直、轄、和、歌、序、曰、元、正、天、皇、御、宇、之、時、敕、一、品、舍、人、親、王、從、四、位、下、太、朝、臣、安、磨、等、俾、撰、日、本、書、紀、上、起、混、沌、下、別、人、神、始、於、辛、酉、之、元、終、壬、寅、之、歲、惣、三、十、卷、

○江、談、抄、曰、被、談、云、日、本、紀、被、見、哉、答、云、少、々、見、之、未、及、廣、抑、日、本、紀、誰、人、所、撰、被、答、云、日、本、紀、者、舍、人、親、王、撰、也、

○東、家、祕、傳、曰、日、本、紀、者、藤、原、朝、廷、天、津、足、根、大、父、天、皇、御、宇、一、品、舍、人、親、王、奉、詔、所、制、作、也、上、始、混、沌、未、分、昔、下、終、人、皇、四、十、一、代、高、天、原、廣、野、姬、天、皇、之、御、宇、
○日、本、書、紀、口、決、序、曰、淨、足、姬、天、皇、勅、之、撰、舍、人、親、王、大、安、磨、自、開、關、至、持、統、天、皇、爲、三、十、卷、矣、

○日、本、書、紀、纂、疏、曰、此、書、者、元、正、天、皇、養、老、年、中、一、品、舍、人、親、王、天、武、天、皇、御、宇及、從、四、位、下、勳、五、等、太、朝、臣、安、磨、奉、勅、撰、也、

○拾、芥、抄、曰、日、本、紀、三、十、卷、一、品、舍、人、親、王、從、四、位、下、勳、五、等、太、朝、臣、安、磨、奉、勅、撰、也、

撰、神、武、以、後、文、武、天、皇、以、前、或、云、養、老、四、年、五、月、二、十、一、日、奏、

古、記、ノ、所、見、右、ノ、如、シ、其、中、國、史、ヲ、以、テ、本、據、ト、ス、ベ、シ、續、日、本、紀、養、老、ノ、條、下、先、是、奉、勅、ト、ノ、ミ、記、ノ、初、詔、ヲ、下、シ、玉、フ、年、月、ヲ、記、サ、ス、按、ル、ニ、續、日、本、紀、第、六、和、銅、七、年、二、月、ノ、條、下、ニ、戊、戌、詔、ニ、從、六、位、上、紀、清、人、三、宅、臣、藤、磨、令、撰、國、史、ト、記、ス、又、類、聚、國、史、第、百、四、十、七、文、之、部、下、國、史、ノ、篇、ニ、モ、此、ヲ、載、ス、此、ニ、於、テ、廼、知、ヌ、元、明、天、皇、ノ、御、宇、和、銅、七、年、詔、リ、ヲ、下、シ、玉、ヒ、テ、國、史、ヲ、撰、シ、メ、ソ、レ、ヨ、リ、七、年、ヲ、經、テ、元、正、天、皇、ノ、養、老、四、年、ニ、修、撰、ノ、功、成、リ、奏、覽、ニ、ソ、ナ、ハ、リ、タ、リ、ト、ミ、ユ、然、レ、モ、和、銅、ノ、條、下、清、人、藤、磨、二、人、ヲ、撰、者、ト、記、メ、舍、人、親、王、ヲ、載、ヌ、又、養、老、ノ、條、下、舍、人、親、王、一、人、ヲ、載、テ、清、人、藤、磨、二、人、ヲ、記、サ、ス、コ、レ、ヲ、如、何、按、ル、ニ、凡、國、史、ヲ、修、撰、ス、ル、ハ、一、人、ノ、功、ニ、ア、ラ、ス、親、王、或、ハ、大、臣、ノ、内、一、人、物、裁、ノ、官、ト、シ、其、他、ノ、學、士、許、多、コ、レ、ニ、ア、ツ、カ、ル、此、ヲ、纂、修、ノ、官、ト、云、六、國、史、凡、ニ、皆、然、リ、釋、日、本、紀、引、新、儀、式、曰、修、國、史、隔、三、四、代、修、之、先、定、其、人、第、一、大、臣、執、行、參、議、一、人、大、外、記、并、儒、士、之、中、擇、堪、筆、削、者、一、人、令、制、作、之、諸、司、官、人、堪、事、者、四、五、人、令、候、其、所、修、畢、奏、進、之、須、下、所、司、云、然、バ、日、本、紀、修、撰、モ、舍、人、親、王、惣、裁、ノ、官、ニ、清、人、藤、磨、纂、修、タ、ル、ベ、シ、纂、修、ア、リ、テ、筆、削、ヲ、ナ、ス、ト、イ、ヘ、モ、功、ハ、惣、裁、ノ、官、一、人、ニ、飯、ス、ル、故、ニ、養、老、條、下、ニ、舍、人、親、王、一、人、ヲ、注、メ、自、餘、ノ、輩、ハ、略、セ、リ、又、和、銅、ノ、條、下、舍、人、親、王、ヲ、記、サ、ル、ハ、先、ツ、清、人、藤、磨、ニ、詔、メ、豫、メ、國、史、ヲ、修、撰、セ、シ、メ、其、後、親、王、ヲ、惣、裁、ノ、官、ニ、命、ス、ル、モ、ノ、カ、又、弘、仁、私、記、竟、宴、集、ノ、説、ニ、據、レ、バ、太、朝、臣、安、磨、モ、撰、修、ニ、加、ル、ト、見、ヘ、タ、リ、此、又、纂

修ノ官タルベシ撰者ヲ稱スルキハ惣裁一人ニ攝スルトイヘテ惣裁ノ官ハ自ラ筆削ヲナサズ纂修ノ輩
 ノ中學才ニ堪タルモノ筆削ヲ盡シ惣裁ノ官ハコレヲ檢ズルノミ新儀式（マ）所見儒士ノ中擇（タル）筆削（ニ）
（朱筆頭註）梁昭明太子文選ヲ作ト文者一人上令レ制作之コレヲ以テ知ベシ文德實錄ハ基經公惣裁ノ官タレテ都良
 迂太子一人ノ草稿ニアラズ然レテ文迂ノ作者ヲ稱スルトキハ昭明太子一人
 香筆削ヲナシ三代實錄ハ時平公惣裁ノ官タレテ大藏善行筆削ヲナス日本
 紀モ舍人親王惣裁ノ官タリトイヘテ筆削ヲナスハ纂修ノ官ノ中ノ學士ニ親
 王自ラノ筆力ニアラジ恐クハ紀清人專ラ筆削ヲナスカ續日本紀養老條下ニ
 載ス賜ニ從五位下紀朝臣清人穀一百斛優學士也コレヲ以テミルニ清人學オスグレタルカ國史修撰
 モ纂修ノ官ノ中ノ學オスグレタル者專ラ筆削ヲナスキハ清人カ功ニヨリテ日本紀ヲ成スト見ヘタリ
 弘仁私記ニヨルキハ太朝臣安鷹專ラ筆削スルカ如シ然レテ日本紀文安鷹カ撰ズル古事記ト大ニ齟齬
 ス古事記ノ説ハ多ク一書ノ説ニ注ノ本段ニ記サルキハ安鷹ガ筆力ニハ非ジ又續日本紀ノ所見紀三
 十卷系圖一卷ト云其系圖絶テ世ニ傳ハラズ惜哉疑ラクハ今釋日本紀ニ載スル帝王系圖ノ如キモノナ
 ラン又按ルニ五國史各序表アリ日本紀序表ナシ釋日本紀ニモ序無シト記ス上代ノコ其法定ラサル時
 ヲヘ序表ナキカ然レテ養老ノ頃既ニ文物備レリ何ソ序表ナキコアラシク今絶テ傳ハラザルカ五國史ノ
 如キハ序表ノ末ノ連署ヲ以テ撰者ノ姓名ヲ知ル然ルニ日本紀ハ表文存セザルユヘ撰者ノ連署モナシ

故ニ後世其説區々ニ決シカタシ因テ古記ヲ閱シ撰者ヲ考ヘ録スルモノナリ
 延享三丙寅歲二月十八日

日本書紀撰者辨

全

日本書紀撰者辨

尾張 河村 秀興
弟 秀根 同考

竊按日本書紀者 元明天皇 詔而使博學文才之儒臣纂修焉使舍人親王爲
惣裁也以是其任重焉故獨專撰名者 矣然而後世妄謂其撰成於親王一人之手
者不考之誤不亦大乎續日本紀曰 元明天皇和銅七年二月戊戌 詔從六位
(頭註)類聚國史 上紀朝臣清人三宅臣藤麻呂令撰國史又曰 元正天皇養老四年五月癸
入字下有 酉先是一品舍人親王奉勅修日本紀至是功成奏上紀三十卷系圖一
正八位下 卷又曰養老中賜紀朝臣清人穀一百斛優學士也類聚國史國史篇載
四字又藤 元明帝 詔清人藤麻呂令選國史之事及養老四年上日本書紀之事
作勝 釋日本紀引弘仁私記序曰日本書紀者一品舍人親王從四位下勳五等太朝臣

安麻呂等奉_レ勅所撰也又引_レ新儀式曰修國史隔三四代修之先定其人第一大
 臣執行參議一人大外記并儒士之中擇_レ堪筆削者一人令_レ制作之諸司官人堪_レ事
 者四五人令_レ候其修畢奏_レ進之須_レ下所司而續日本紀彼不載_レ親王此不載_レ清人
 藤麻呂又養老中賜_レ賞清人以_レ是考之_レ和銅中詔_レ此二人使_レ纂集至養老中使_レ
 親王爲_レ惣裁使_レ清人助_レ之者歟恐或清人以_レ博學文藻冠_レ當時歟弘仁私記雖_レ記_レ
 安麻呂之所撰其所撰之古事記者與_レ日本書紀所載之事齟齬乖_レ戾多有_レ焉故謂
 蓋於_レ其纂集也以_レ清人之大手筆使_レ之專焉安麻呂等第備_レ其員耳纂集惣裁之
 例文德實錄者藤原基經惣裁焉都良香專選焉三代實錄者藤原時平惣裁焉大
 藏善行專選焉故知親王之於_レ日本書紀亦猶_レ此乎夫續日本紀日本後紀續日本
 後紀文德實錄三代實錄僉有_レ序表獨此紀無_レ序表釋日本紀云無_レ序也豈其所_レ以
 上代未_レ備其文歟雖然養老之朝文學如此其盛矣奚爲_レ無_レ序表哉蓋其_レ混矣夫所
 上之系圖一卷今亦滅矣不_レ亦大惜乎嗚呼古之典籍多_レ泯沒矣後之人以_レ誤傳誤或
 杜撰附會大使_レ人惑焉亦唯不_レ深考之罪也何爲_レ鹵疎之甚故不_レ佞等有_レ慨於此乃
 以其志語_レ恭軒吉見先生先生曰善哉爾輩之志也他日其成則有_レ大補於世之爲_レ

吾邦古典正史之學者噫有_レ始鮮_レ能有_レ終者生等慎勿_レ中途而廢焉於是乎錄_レ之
 爲_レ其考_レ日本書紀之嚆矢上已

延享丁卯之春

(奥附)

日本書紀集解 嗣出

書肆

京師 永田 調兵衛
 尾張 木村 六右衛門

神

學

辨

全

神學辨

尾張 河村 秀興
弟 秀根 述

我秋津洲のならばしとして神をいやまひ祭を重んじ其道を學ひ其教を守る事しかなりおほんいちじんの御つとめも神事をさきに他^{コト}事を後にし給ふけるさはあれと時うつり事かはりて世^ノ人古の法をしらす今やうにはしり正しきことはりを失ひ邪なる事をもて社に詣て神に祈りいみしげにもものするも福を貪^{ムサホ}り己を利するの外ならんやはふりかななきやうのものも其^{ナリハヒ}産やつゝしま言を巧にして偽をかさり又其學をさばめ道を談といへる輩もめつら成事を專としてむかしの文にも見えぬおほつかなき言をもていかめしういひのしり瑞垣の古き御代よりためしもあらぬことにのみなりゆく事のかなしさのまゝ心にうつりゆく事とも短かさ筆をもてかいつけ侍りぬ

○本朝の道を神道と稱し其學をなす者を神道者など言にはこゝろ得ある事なり神道の號は古へよりありて日本紀の所見も用明紀に天皇佛法を信し神道を尊ふとあり孝徳紀にも佛法を尊ひ神道をあなづり給ふとも見えたりこれらの神道と言は佛法に對するの名にして神祇に祭祀奉仕するの謂なり日用常行の道の名にあらず續日本紀續日本後紀三代實錄朝野羣載等の所見も右に同じ又皇朝類苑を按ずるに一條院の比にや僧の寂照宋朝に渡りていへらく國中專神道を奉す祠・廟多しと云々神祇道を云事かくのことし易に謂ゆる天の神道を觀れば四時たかはす聖人神道を以て教を設といふは別段の意にして天地の間にある事の人力の及さるは皆神の所爲にて萬物の造化する天道を天の神道とはいふなり聖人の道は何事も天に則りてこれを行ふゆへにしかいへり又孝徳三年の紀かみならも神といふ注に惟神とは神道に隨ふをいふと見へたり此所の全文を案るに神代の昔日の神皇孫へ讓國の事を演たる章にて神皇正統の義を以て神道と注せり然れば近世本朝の學をなすもの神道者と稱る事甚恐れあり日・神以・降連綿して百・有・餘・代

今上に至り行るゝ處の大道を何ぞ庶人として負・荷し號に稱んや又本邦の書籍を學ふのみに神・祇・道の名を負へき故もあらず止ま神道神學の稱を止めて本・朝古・學と稱せんには難なかるへし名・法要集に三・家の神・道といひ或は大意に神道は心を守る道なりなんといへるは覺束なき事なり悉く論す

これは事繁き故神道の二字を辨するのみ

○中古以來唯一神道の名目起るこれ國・史官・牒に見えず漸名・法要・集の題・號に冠たらしめ且其義を釋して三・義を論し一ツは唯一・法にして二・法なし二には唯一・授一・流にして二・流なし三には唯一・天・上にして證・明ありと見えたり案に法・華・經の唯一・乘・法といへるに倣ひ言ひ始るものか唯一・一とは唯一・授一・人の畧・語にして神・代以・來神・道の一・脉我家に限つて他になきとの謂にや彼名・法要・集の書たるやおぼつかなき事のみ多く其家の説と信しかたし疑らくは後世好事の者作者を兼延に託して摺紳家を方・人とするの謀・計にや何ぞ其家説にかゝるチヤサカ吝チヤサカなるあらん又一・説に最・澄空・海佛・法を以て神・教に混ぜしより兩部の號ありそれに對して異邦の教を交へす純一の神道といふ事にて唯一・一といふは純・一無・雜の神道といふ事にや兩・部とは眞・言家の胎金兩・部の義にして固より神道に關する事ならねは純一の神道と新規の名・目を立るに及はず又近世の學者説をあらためて唯一・一とは異・邦の教を交へさるの謂に非ず天・人唯一・一といふ事にて天地と人と全く一と云義なり造化を以て人・事を示し人・事を以て造・化を説くものなりこれ天・人唯一・一の道ならずやといへりこれらは一向往近世の臆・説にして宋・儒の性理の説に天・人一・理など云に倣ひ附會するものなり孝徳紀に帝道唯一・一とある文を以て天・人唯一・一の出所とする輩あれ共文字同しくて義大に異なれり證とする

にたらず

○神・學者・流天・兒・屋・命何・十何・世の正傳など稱し數・通の切・紙をもて傳とし三種の神・器ひもろきいむさか籬磐境の説を最・極とし或・家には住・吉傳といふを極・秘とすこれ如何なる事ぞや神・代以來三・千有餘・年何れの書に載せ何れの人に傳りて兒・屋・命の直傳を得んや堂上にすら其沙汰なきを民間に於て誰か知るべき殊に三・種の神・器を傳とするは凡卑の輩至て憚多し神・籬磐境の事も釋日本紀に神・籬は神・祠と注せり日・守木ひもろきの訓・傳なくともよく聞へたり自・餘の傳・授各好事の僞・作なりしかれ共神祇道には古來より定れる家ありて世々其職に補せらる故に家職の故・實は傳とせらるゝも理りならめ又公事有職の上にて傳とする事は別に子細ありなん中・臣・祓神・代・紀等に書面の外何れそ秘訣として古來よりつゝめる餘意のあるへきや舊史實錄に證なき事はゆめ／＼信すへからず

○書に古今あり眞僞ありよむ人差別なくんはあるべからず其要とする所は國史及び律令格式にしてこれに次ものは古・昔の官・牒名・公百・家の記録なり初入の學あしき時は國・史家・牒をわすれて僞・本妄・撰の類を信す慎ますんばあるべからず夫僞・書とは作者を古人の名にかりて實は後世の僞・作を云妄・撰とは撰・者過つて其説正しからざるを云僞書にも古今の差・別ありて舊・事本・紀なども實は延・喜已・後の作・文にして舊・本に非す太子所・撰の紀今滅ひたり疑らくは後人諸書の抄出をもてこ

れを撰舊事紀の題號を蒙らしむるか然れとも文・體古雅にして正史の考・索に便あり今按るに此書元和州石・上神・宮より出て祠・官物・部氏つぐみ乃る所か或は天・書神・別・記の如き其書亡ホロビたるに古・名をもとめて一向近世の作文せるもあり又伊勢五部書の類は素り古・名なくして後人文を構へ作者を古に託せるものなり自餘の僞書推て知るへし妄撰は強て書・名イヤウを指がたし取・捨は學者の意にあるへし然れとも初學よりして奇・書を求るに及はす普く世に行はるゝ處の國史舊式を熟讀翫味すべし

○近世の風俗伊勢大神宮を信仰し奉りいかなる卑賤凡・下の身もはゞかりなく參詣をなし賽物を捧げ剩心中の祈願を申事何事そやそれ 天照大神は惟・祖惟・宗尊き事二ツなく自・餘の諸神とは君臣父子のごとくにて尤他神に類し難し凡下たるもの容・易く近つき奉らんや太・神・宮・式に王臣以下たやすく 大神宮に幣・物を供ふへからず三后皇太子供ふべきものあらは臨時に奏聞せよとなり又内・宮儀式帳に王・臣家并諸・民幣・帛ぬいまいらすることを禁・制す若欺・事をもて幣・帛を進る人は流罪に准すと記されたり安・和二年三月廿九日官符には伊勢太・神・宮・司等最公・家の御祈禱朝廷の御祈禱を云にあらざる外臣下の祈禱致すへからずと見へたり如此禁制し給ふと辨えなくしてなすときは其身は違勅の罪人となり神明何そ是を享け給んや今日諸民たるものゝ

内裏 仙洞へ推參して直奏するに異ならずそのかみ 花園院の比巫等太神宮の先達と號し參 宮の

路次にて新儀をなし、剩朝家の憲章、神宮の古典にも背き、觸穢不淨忌事をさりに成たるを禁し給ふ事、文保記に見へたり。古は伊勢の内三郡或は八郡を、神宮の領地とせられしかとも、代々の兵革の災により、神領没落し、神職の者恒の産を失ひ、如此事も出来るにや、これを以て餘社の事も推して知るへし。然れとも世擧て、宮し奉る事なれば、神國に生まれ、宗廟の神境を拜見せざらんを本意なく思は、幣帛を奉り參詣をなす事なくた、齊庭にうつくまりて、神宮の嚴かなる體を恭く拜し奉るのみは可ならんか案に伊勢參、宮とて道者をかまへ袖をつらね千里を遠しとせずして詣る事斯の如きの習俗往古よりも其例しありてそのかみは初瀬の觀音を信し、其以後熊野三山を仰く事今の伊勢のことにやありけん鎌倉右大將はなはだ伊勢を敬ひ給ひし故、其比の俗上を眞似て各伊勢參りといふ事の起りけるにや、頼朝遂に天下の權を得てより、其俗延て後代に及び、都鄙のならばしとなるか、又神宮諸雜事記に承平四年九月御祭のとき、忽雷電鳴騷て大雨濞くかごとし、參宮人千萬貴賤論せず恐れ迷て、宮中を退出せし事見へたり。古より貴賤參宮の習俗なりけるにや、依て式文にも嚴制をなし給ふとおほゆ今やうの俗ぬけ參りと號して人の奴婢たるもの主の暇をも得ず、人の子たるもの親の許しを受す恣に家を出るも參宮となれば憚ざるはいかなる僻事ぞや、君父をないかしろにする不道の者に神何ぞくみし玉はんやよく思ふへし。

○神國に生れて神祇を敬する事しかなりさあれと天下大小の神社は皆先王之靈廟功臣の封祠にして各朝廷より祭置れ、其由緒の神職を附屬せられ、祭典とても上中下祀の次第あり、神名式に載する處三千一百三十二座各それの品あり、幣帛の次第も案上案下官幣國幣等の差別ありて、其祈る所は天下泰平寶祚無窮にして、水旱疾疫の災のなく秋稼豊稔ならしめんと固より神職のための祭にもあらず、諸民のための社にてもなし、然るを非職の者故なくして神社に詣ふて私の祈禱をなし、或は自分の居宅に稻荷天、神などを小祠に觀請し、祭儀をとのへ、自他の祈願をなし、或は壇場を構へ、護摩をたき、行法を修し、又は橘家の古傳など稱して、墓目鳴、弦の術矢、防炮、瘡の神符を出し、種々の事をなし、遂には神變不思議の奇、怪妖術に陷溺する輩あり、これ巫覡の淫祀にして、朝家の禁る處、神を瀆罪、人なり弘仁中にも諸民妄に神の託宣を申ふらすことを停止し給ひ、又寶龜中にも京中街路の祭祀を禁し、妄に禍福をのへ、巫覡にくみし、淫祀を成もの罪に決し給ふ、又大一同にも格制ありて、兩京の巫覡を禁し給ふ、巫覡等奸しく人の吉凶をとき、愚なる庶民この妖言を信し、世の風谷のあしくなるを制し給ふ、事格文にあさらかなり、夫祭祀は其鬼にあらざれば祭らざるよし、西土の論説にも見へたり、吾國祭祀の義も又同し、崇神帝の御宇神祇をいやまひ給ふ事おごそかにして、倭の大物主の神を祭り給ふに、其しるしなく、災害しばくあり、帝憂へて齊戒沐浴して、神に問給ふに、則告給はく



吾^ガ子の大田々根子^{おほたねこ}をもて吾を祭らしめは天か下安からんとの教に帝驚き給ひ四方にふれて大田々根子を求め祭主として祭給ふに神享て國治り萬民賑ひぬこれ其子孫ならぬは神其祭をうけ給ぬ事明らかかり故に諸社の神主も皆其由緒の者を任じ給ふ又諸氏各其祖神の社を仰ぎ氏神の神階或は官幣其神の苗裔より奏する事には類聚國史に天長元年八月に右衛門督紀百繼越前守紀末成等か奏により紀氏の神月次幣帛の例に預る事みゆ又續日本後紀に承和三年五月遣唐使小野篁申によつて无位小野神に従五位下を授る事あり凡氏神の祭祀には其神の苗裔預る事朝廷よりゆるし給ふと見へて續日本後紀に承和元年二月近江國滋賀の郡小野氏の神社に春秋の祭に彼氏五位以上の輩官符をまたす往還する事をゆるし給ふとあり淫祀を慎事ゆるかせにすへからす

○俗學のならばし私に祖先を社に祭り靈社號を設け甚しきに至ては存生に吾魂を自祭る事我國の古風なりと云へり斯の如き古法ある事未たこれを聞かす靈社の號は橘諸兄公以來代々其號あるよしへとも何れの書に出たるや未詳蓋造言は律條の戒むる所ならずや大已貴命奇幸の魂を自ら祭り給ふを例として俗身のなまじしき神に祝ふ事何んぞ神聖と同日の論に至らんや新に神社を勸請する事深く故あり又葬送の式神代の遺法ありとて近世の印本に出或は者流の傳にもあれ

と各附會の新製なり出雲國造家傳鹿嶋の社傳なんといへるを信するも舊史にうとよきのあやまちとやいはん

○神拜の節杵揖座揖兩段再拜奉幣等の作法は堂上方并神職の輩束帶衣冠淨衣など着用の時はずもあるへし無位の庶人麻上下を着し扇子を笏のことく持て右の作法をなす事妓樂の戯にひとし布衣大紋又は長袴着して神拜の節も跪座して常の如く兩手をつき拜すへき事とそ況や麻上下にての拜をやこれらの差別を知るへし又社人の輩社例と云あるは先祖より相傳といひあるは高家より拜領と云て其身無位無官にして四五位の位袍を用剩禁色を犯し神事に奉する事非禮の甚しき古の格制にも違り官位の階級により常服あれば謹んて朝家の嚴制を守るへし

○神世の遺風をしたふとて何彦何の命何の翁など號を設け自らも稱し書にも記する事大なるあやまりなり上代命及彦を以て稱るは各顯貴の人の事にして庶人の稱すへき事ならず又翁號は高年の稱にして他より呼ときは可なれとも神道許可の別號とし自稱する事其謂れなし神代塩土老翁彦火々出見尊を海宮へ導給ひしより師範の稱としこれより轉して師をさして潮翁など呼事何れの書をよりとするとするや笑ふに堪たり

○佛を憎み儒を謗り我國のみの道を修するとして漢字を忌てかんなを用ひ宗門の佛事を嫌ひて祖先の祭

を神事になし新儀の事を企つる輩あり夫儒は

應神帝の神・智に免し佛は 欽明帝の聖慮にいれ給ふ物・部中・臣の二・臣これを忌て寺院を燒佛像を捨つ然れとも天災ありて天これをたゞし給ふ日・本・紀の所・見むなしからずされは代々の帝此法を信し再興し給ふ後世に至りて猶法親王の宣下ありて今佛法をそしる輩は遠くは先王の明制に違ひ近くは

今・上の叡慮にもとる違 勅の罪まぬかるへからず神社とても古へより佛經を用ひたる事豊前の八幡筑前の宗像當國にても熱田神・社等に讀經の事國史式文ニ明なり其外悉く記すに違あらず又類聚國・史に養・老年中若・狹國若・狹彦の神の託宣によりて佛・法に歸・依し道場を建立し給ふ事あれば神も敢てこれを忌玉はさるにや日・本・紀竟・宴集に三・善清・行欽・明帝を得てよめる歌に佛すら朝廷かしくみ白妙の浪かさわけて來ませるものと又日本紀に佛の事を蕃・神と記せり佛とても別のものにあらず我王・化に歸して來朝する所の蕃客とみるときはにくむへき理りなし然れとも又神社に佛法を忌事なさに非す伊勢には内七言の忌言あり又建・久年中十二社奉幣宣命の草に佛界の字ありたるを難する事玉海に見へたりこれらはまさしく佛法を避るの證明らかなれば信するに非ス疑るに非ス舊記の所見に任すへし又漢字を忌て國・字を用るも其國字素り漢字を略して制作せり日本紀

といへとも悉漢字に記しあなたの書籍の文章をかり用て一部を綴り神代紀發端も淮南子天文訓の文をとれり其外史漢文選の全文を用たる事あけて計かたし 朝廷の禮典威儀官位の次第宮殿調度の制まで悉唐禮をうつせること續日本紀續日本後紀三代實錄等に出たり衣服の品も弘仁年中に男女ともに唐法に依るといへること續日本後紀菅原清公薨傳及び源氏の河海抄にも見へたりしかのみならず古來大學寮にて春秋二八の釋奠に先聖先師を祭り給ふ事延喜式以下諸書に詳なり斯の如く上代より儒佛の隆なるを妄りに管見を以て好む所にまかせ取捨をなし紀文を曲けて自らの臆見に附する事大なる誤なり心を虚くして紀文によるへし強ちに儒佛を憎より僻説をなす事ゆめ／＼あるへからずしかいはし世人不・佞等を稱して儒・佛習・合の神道者とや笑んしかれとも吾・國太古より自然のならばはし天壤と無窮の 君道萬世に燦然として異域の及ふ所に非す學者心を潛日本紀を熟復して其旨・趣をしるへし不・佞等はしめ俗師を信し彼の傳授口訣に惑ふこと年あり退て正史古典を熟復して漸其非を悟り其疑を解さぬ故に臆見の趣を俗文に綴り初生の惑をひらくと爾云

延享五戊辰孟春

古事記開題

(貼紙)

序文講義

古事記開題

此古事記三卷ハ序文ニ見ヘタル通り太朝臣安麻呂ノ撰ニテ元明天皇ノ御宇和銅年中ニ奏覽ノ書ナリ
本朝國史ノ濫觴ハ古語拾遺ノ序文ニモ見ヘタル通り上古ニハ文字ナク貴賤老少口々ニ言ヒ傳ヘテ神
代ノ古實ヲ存セシナリ十六代應神帝ノ時初テ文字ワタリ王仁阿止岐ナド云ヘル博士來朝シテヨリ漢
字ヲ日本ニ用來レリ十八代履中天皇四年八月辛卯朔戊戌始之於諸國置國史記言事達四方志ト
日本紀ニ見ヘタリコレ本朝國史ノ始ナルベシ然レモコトキハ末全部スル書ノアルトモミヘズタ
ソノ時ノ日記ヲシルシタルノミトヲボユ其後三十四代推古天皇ノ二十八年ニ聖德太子蘇我馬子ノ宿
禰ト共ニ議テ天皇記及國記臣連伴造百八十部并公民等本記ヲ錄スト日本紀ニ見ヘタリコレ世
ニ所謂舊事本紀ナリ然レモ三十六代皇極天皇ノ御宇ニ蘇我ノ蝦夷入鹿父子亂ノセツ悉ク燒失セテ
ソノ書傳ラズ船史惠尺ト云モノソノモエクヒノ中ヨリ燒ケノコリノ書ヲ求テ天智帝ニ奉リタリ其
證如左○皇極紀曰蘇我臣蝦夷等臨誅悉燒天皇記國記珍寶船史惠尺即疾取所燒國記而
奉中見云云○新撰姓氏錄序曰皇極握鏡國記皆燔幼弱迷其根源狡強倍其僞說天智

天皇儲官也船史惠尺奉進燼書云云今世ニ行ハル、舊事本紀十卷ハ推古ノ朝ニ撰スル處ノ舊本ニ非ズ偽書也然レ其餘ノ偽書ト事カハリテ文體古雅ニ公望私記江家次第等ニモ引證スレバ近代ノ偽作ニモアラズ古クヨリアルトミヘタリ疑ラクハ舊本ノ殘篇ノワヅカナルヲ後人諸書ノ抄出ヲ以補ヒタルモノカ然ヲ好事ノ者舊事本紀ノ題號ト序文ヲ作文セルモノナラン推古ノ朝所撰ノ國史ハ絶テ不傳其後四十代天武天皇ノ御宇ニ諸臣命ノ國史ヲ撰マシムル日本紀ニ載ス○天武紀ニ四十年三月庚午朔丙戌天皇御于大極殿以詔川嶋皇子忍壁皇子廣瀨王竹田王桑田王三野王大錦下上毛野君三千小錦中忌部連首小錦下阿曇連稻敷難波連大形大山上中臣連大嶋大山下平群臣子首令記定帝紀及上古諸事大嶋子首執筆以錄焉云云天武ノ朝ニ詔シテ國史ヲ撰シメ玉フ然レ此書今絶テ傳ラズ疑ラクハ天武ノ朝ニ諸臣ニ詔リテ國史ヲ撰セシムルニ其事ヲヘズ半途ニ廢レテ國史全部成就セザルモノカソノ後四十三代元明帝ノ和銅年中ニ紀清人三宅藤鷹ニ詔リアリテ國史ヲ撰ゼシメ年ヘテ四十四代元正帝ノ養老四年ニ奏覽スル處ノ日本紀ナリ舍人親王惣裁ノ任トナシ玉フ委シクハ日本紀撰者辨ニ載ス然ルニ此古事記ハ和銅中ノ太安麿ノ撰ニ日本紀ヨリモ先ダツコ八年ナリ安麿コノ所撰ノ意趣○序文ニ云ク清原大宮昇即天位云云於是天皇詔云朕聞諸家之所齋帝紀及本辭既違正實多加虛偽當今之時不改其失未經幾年其旨欲

滅云云故撰錄帝紀討覈舊辭削僞定實欲流後葉時有舍人姓稗田名阿禮年是二十八爲人聰明度目誦口拂耳勅心即勅語阿禮令誦習帝皇日繼及先代舊辭然運移世異未行其事矣伏惟皇帝陛下云云於焉惜舊辭之誤忤正先紀之繆錯以和銅四年九月十八日詔臣安麿撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者謹隨詔旨子細探撫云云竝錄三卷謹以獻上和銅五年正月二十八日太朝臣安萬侶云云○釋日本紀引弘仁私記序曰淨御原天皇御宇之日有三舍人姓稗田名阿禮年二十八爲人謹恪聞見聰惠天皇勅阿禮使習帝王本紀及先代舊事紀未令撰錄世運遷代豐國成姬天皇皇女帝臨軒之年詔正五位上安麻呂俾撰阿禮所誦之言和銅五年正月二十八日初上彼書所謂古事記三卷者也云云纂疏ニモ亦此文ヲ引ケリ然ルニ日本紀天武帝ノ紀ニ阿禮ニ勅ノコトミヘズ又續日本紀元明帝ノ紀ニ太安麻呂此記奏上ノコトヲノセズソレニヨツテ如何ト云セツアレ此序文及ビ釋紀ニ引弘仁私記序ノ說ムナシカラズ證トスベシ右ニ云處ノ序文及ヒ弘仁私記ノ趣ヲ委ク按ズルニ右ニ云フトコロノ推古ノ朝ニ太子馬子ノ撰スル處ノ國史ハ皇極帝ノ四年入鹿ガ亂ノ節右ノ記錄ニ蘇我氏ガ家ニアリタルユヘ兵火ノタメニ悉ク燒失タリ船史惠尺ト云モノ灰燼ノ中ヘ入りテ少シバカリ燒ノコリタル書ヲ取出セシカハ過半燒テ全書ナラズ故ニ舊事本紀ノ全キハ傳ラヌ筈ナリソノ灰燼ノ中ヨリ取出セシ殘篇ヲ惠尺天智帝ニ奉リタリ其後舊

記ナクノ過ケルニ天武ノ朝ニ至テ全部スル國史ナクノ漸ク惠尺ガ奉ル殘篇ノミソノ外諸ノ家々ニ散在ノアルトコロ古ノ記録モアリテモミナ區チニ多ク正實ニ違ヒ後人虚偽等ヲ加ヘタリ依テ天武帝ノ叡慮ニ只今トクト糺メソノアヤマリヲタゞサズ打ステヲカバ追付ソノ旨亡ビウセ我國上代ヨリ傳ルコトノナクナラントナゲキ思召帝王ノ御記録ヲ撰テ上代ヨリノ舊辭ヲタゞシアラタメテソノ虚實ヲトクト吟味メソノアヤマリ偽リヲ削リ捨テ實ヲシカト定メ後ノ世マデ傳ルヤウニナサレタキト思召スナリソノ時ノ舍人ニ稗田阿禮ト云モノアリ二十八歳ニナレリソノ者生レツキ聰明ニシテ記憶ツヨキモノユヘコノ阿禮ニ仰付ラレテ帝王御代々ノ御記録ナラビニ先代ノ舊辭ヲ誦ミナラハシヲボヘサセ玉フトナリ弘仁私記ニハ帝王本紀及ヒ先代舊事紀ヲ習ハシムトアレバ彼ノ惠尺ガ奉リシ舊記ノ殘篇ナラビニ諸家秘藏ノアル處ノ帝王御代々ノヲシルシタ記録等ヲヨミ習ハシヲボヘサセ玉フゾ又按ズルニ皇極四年舊事紀燒失ノ年ヨリ天武ノ朝マデハ年數大概三十餘年ナリコノ序文ニ阿禮ニ勅リノ年月出ザレハサシテ何年トモ云ガタケレモ天武ノ御宇トアレバ凡ノ年數三十年ノ餘ニナレバソノ比ノ老人ハ舊事本紀ノ燒ケザル以前ニ舊事紀ヲ見テ覺タルモアルベケレバソノ舊事紀ヲ覺ヘタル老人ヨリ阿禮ニ口傳シヲカセラレシカ序文ニ然運移世異其事行レズトアリ弘仁私記ニモ未タ撰録セシメザルニ世運遷代ストアレバ天武帝ノ思召ニ阿禮ニヨクヲホヘサセテ記録ヲ撰録サセ

ント思召スニイマタ撰録ノ成就セザルウチニ天武帝崩御アリ御代カハリテソノ事打スタリソノ後四十三代元明帝ノ和銅年中ニ至リテ上ニモソノヲ思召出サレ打スタレタルヲ殘念ニ思召ソノ時ノ儒官太朝臣安麻呂博學ノモノユヘニ安麻呂ニ勅リアリテ阿禮ガ誦スル處ノ勅語舊辭ヲ撰録セシムトナリ天武ノ朝阿禮ガ勅リヲウケテ舊記ヲ誦ミシトキノ草稿ニテモアリテソノ阿禮ガ草稿ヲ安マロウケトリテエラミシニヤ又天武ノ朝阿禮年二十八トアレバソレヨリ和銅四年マデノ年數三十餘年ナレバ阿禮老年ニシテ和銅四年マデ存生ニテイタリシニ安麻呂會ソ阿禮カ口授ヲ聞其趣ヲ筆記セシニヤ或説ニ阿禮和銅四年ニ六十四歳ニテ存生セリコノ人ナクナラバ國ノ紀文ムナシクナラント安磨ニ勅リアリテ阿禮ニアフテ口授ヲ筆記セシトイヘモコノ序及弘仁私記ノ文中ニ天武ノ朝トノミ見ヘテ年月ナケレバ阿禮ガ年齢ヲ計フベキタヨリナシ又和銅四年マデ阿禮存生シテ安磨ニ面授スルコト又文中タシカニソノヲフセズ故ニイヅレモ一決シガタシ何レニセヨコノ古事記ハ天武ノ朝ニ先代舊事紀ノ絶タルヲナゲキ玉ヒ阿禮ニ仰付ラレ舊事紀ノ殘篇ヲナラヒ古コト等ヲ覺ヘサセ玉フタルヲ其後和銅四年ニ安麻呂阿禮カ傳ノ趣ヲ筆記セルモノナリソレユヘ筆者ハ安麻呂ニシテ和銅ノ作文ナレモソノ實ハ阿禮ガ傳ニシテ推古ノ朝所撰ノ舊事本紀ノ古言ナリユヘニコノ書文體甚々古雅ニシテ自餘ノ書トハ其様大ニ異ナレリ漢字ヲ用ユトイヘモ漢文ノ法文字ツカヒ等ノ法モナク假名書^{カキ}相

マシリテ日本紀ニ擬スレバ文體拙ク俗ナルヤウナレドコレ上代質素ノ風俗ニシテ却テ殊勝ノ至リナ
 リソレユヘ本朝古實上代ノ古言等ハ日本紀ヨリモ此書ニ多ク日本紀ヲヨムモノコノ書ヲ以テ訓點ノ
 證トセザレ古言ニモトレリ然レド安麻呂記スルノ日阿禮カ傳ノマ、シヒイ文章ニモカ、ハラズソノ
 マ、筆記セシユヘ國史ノ法モナク帝王統紀モタシカラズ故ニ國史トハセラレズコノ後ニ出來タレ
 日本紀ハ帝王ノ統紀モタシ國史ノ法ヲソナヘシユヘ國史ノ最トシテ本紀ニソナヘ國號ヲ題シテ
 日本書紀ト稱シラル紀ノ字ハ帝王ノ統紀ニカ、レリ史、記、索、隱、曰、紀、者、記、也、本、其事、而、記、之、故、曰、
 本紀、又、紀、理、也、絲、縷、有、紀、而、帝、王、書、稱、紀、者、言、爲、後、代、綱、紀、也、正、義、曰、天、子、稱、本、紀、諸、侯、曰、世、家、本
 者、繫、其、本、系、故、曰、本、紀、者、理、也、統、理、衆、事、繫、之、年、月、名、之、曰、紀、云、云、帝、王、ノ、統、紀、ヲ、記、テ、年、月、ヲ、繫、ル、ヲ
 紀ト云ユヘ日本紀ノミナラズ五國史モ亦紀ヲ用ヒタリシカルガユヘコノ書ハ紀ノ字ヲ不用記ノ字
 ヲ用ヒ題號ニモ日本紀ナドノ如ク國號等ヲモ不用タ、昔ノ古事ヲシルスト云ノ意ニテ古事記ト題
 セリ依テ國史トハセザルナリ

○阿禮ガ功ニヨリテ絶タル舊事紀ヲ傳ルヲアナタニモ其例アリ漢ノ伏生カ絶タル書經ヲ覺ヘテ傳
 ヘタルコアリ○史記儒林傳曰伏生者濟南人也故爲秦博士孝文帝時欲求能治尚書者上天
 下無有乃聞伏生能治欲召之伏生年九十餘老不能行於是乃詔太常使掌故朝錯往

受之秦時焚書伏生壁藏之其後兵大起流亡漢定伏生求其書亡數十篇獨得二十九篇即以
 教于齊魯之間學者由是頗能言尚書諸山東大師無不涉尚書以教上矣云云阿禮ガ功伏生
 ヲモ耻ザル才ナリ

○或說ニ云古事記ハ日本書紀ノ草書ナレバ日本紀ニ添ヘ用テ考ニソナフルバカリナリ一品舍人親王
 日本書紀ヲ撰ム日ニコノ古事記ノ作者安麻呂ヲ筆頭トシテ名儒ヲエラヒ右ノ古事記ヲ清書ノ文章ニ
 ワタリテ全備シタル所ヲ日本紀三十卷トス然レバ古事記ハ日本書紀ヲ撰ンタメノ草稿日本紀ハ古
 事記ヲ清書シタル物ニテ二部即一部ノ書ナリト云コノ說本據ナキニモアラズ釋紀長寬勘文等ニ日
 本紀ハ古事記ニモトヅキテ撰セルヨシミヘタリ又古事記ノ後ニ出來タル日本紀ノ作者ニ安麻呂加リ
 テ專ラ撰ズルコト弘仁私記ノ序及ヒ日本紀竟冥集ノ序ニミユレバコノ說ムベナリ○長寬勘文云日本書
 紀者以古事記爲本書云云○釋日本紀曰問撰修此書之時以何書爲本哉答師說或云以古事
 記爲本或云以先代舊事本紀爲本但以古事記爲本者多有相違之文古事記者只立意爲宗
 不勞文句之躰仍撰修之間頗有改易云云而今見此書所載文者全是舊事本紀之文也注
 文一書云之處多引古事記之文況舊事本紀者上宮太子全依經史之例能勞文筆之體或神名
 用訓之處更不交音或嶋名用音之處亦不交訓國常立尊殿廬嶋是其一端也此書體已同彼書

其所載多彼文然則以舊事本紀爲本所撰也自餘闕門假借之書雖有其數皆稱一書置註云云纂疏ニモ又コノ文アリ古ヨリモ古事記ヲ本トシ日本書紀ヲ撰ズト云セツアリトミヘタリ然レモ古事記ト日本書紀ト文體大ニ齟齬ノ意旨モ亦異ナリ古事記ノ説ハ日本紀ニ載テ一書ノ説トス然レバ古事記ヲ以テ日本紀ノ草稿トスルノ説トリガタシ又釋紀ノ説モ半ハ是ニシテ半ハ誤レリ古事記ハ意ヲ立テ文句ノ舛ヲ勞セズ古事記ノ説ハ多ク日本紀ノ一書ノ文ニ引ケリト云ハソノ説ヨシ舊事紀ハ太子經史ノ例ニヨリ文筆ノ體ヲ勞ス日本紀ノ書體舊事紀ニ同シクソノ載ル處舊事紀ノ文ナリ然レバ日本紀ハ舊事本紀ヲ本ニシテ撰ズル處ナリト云ハソノ説シカラズ右ニ云通り太子所撰ノ舊事本紀ハ蘇我ノ亂ニ燒失セテ少シバカリモノノ殘篇ノアリシニヤ今世ニ行ル、舊事紀ハ舊本ニアラズ殘篇ノ少シキニ後人諸書ノ抄出ヲ以テ補シモノナリ然ルヲ好事序文ヲ僞作シ舊事本紀ノ題號ヲカフムラシムルカ今舊事紀ノ文中後世ノ事ヲ載スルコト數多ニシテ時代アハヌコト多シ舊事紀文體經史ノ例ニヨリ文筆ノ體ヲ勞シ其文日本紀ニ同シキモノハコレ後人日本紀ノ文ヲ抄出シテノ作文ナレバソノ文同シキハズナリ然レバ日本紀ハ先ニ今ノ舊事紀ハ日本紀ヨリ後ニ日本紀ノ文ヲヌキ出シテ作レルモノナリ然レバ日本書紀ハ舊事紀ヲ本ニシテ撰ズルト云ハ用ラザル説ナリ先代舊事紀ハ絶テナシソノヤケノコリヲ惠尺ガ奉リシヲ天武ノ朝ニ阿禮ガ傳フトミユレバ今ノ古事記ハマサニ太子ノ舊事

紀ノ殘篇ヲエラミタルモノトヲボユソノ證據ニハ古事記神代ヨリハジメテ推古ノ朝マデヲ記セリ阿禮ガ撰ナラバ天武ノ朝マデヲシルシ又安麿ガ撰ナレバ元明帝マデノヲシルスベキニ和銅ノ朝ヨリハルカ以前ノ推古ノ朝ニテ早ヘシイタビニアラズ舊事紀ヲ以テ本トシ補ヒツ、レルモノナレバナリ舊事紀推古ノ朝ノ所撰ニテ推古ノ朝マデノ記ナレバナリシカレバ古事記ハ筆者ハ和銅ノ朝ノ安麿ナレモ阿禮ガ傳ヲ以テ舊事紀ヲ補ヘルモノナレバ太子所撰ノ記錄モ同シコニミテヨシ漢ノ伏生ガ書經ヲ傳ヘシコナド右ニ云トコロヲ考合スベシカタク、以テ今ノ舊事紀ハ信用シガタシ往古ノ殘篇ニ諸書ノ抄出ヲ以テ補フタルモノカトヲボユレモ今ノ古事記ガ古ノ舊事紀ノ補ナレバ又コトニ舊事紀ノ補ノアルコトヲ心得カタシ又今ノ舊事紀文中ニ日本紀ニモ古事記ニモコレナキコトアレバソレハ何ノ書ニヨリテ載シヤヲボツカナシ然レモ右云トヲリニ今ノ舊事紀モ久シクヨリアリタルトミエテ古書ニモ引證シ且ツ文體古雅ニシテ新作ノモノモ凡ミエズ自餘ノ僞書ノ如ク謀計姦曲ノコトモミエテハトリ用テ可ナリ疑ラク上代ノ古書ノ殘篇モトリアツメテ編集セルモノカ舊事紀ノコトハ獨委シク別ニ考ラクモノナリ

○或説ニコノ古事記ハ本書ニ非ズ僞書ナリソノユヘハコノ書序本文トモニ安麻呂ノ同筆ナリシカルニソノ文體本文ト序文トハ大ニコトカハリテ本文ハ文體拙ク序文ハ文章ヲカザレリ本朝コノ比ハ

末文筆ノ法モ全カラズカヤウ文章ノソロフベキナシコノ序文時代ニアハセテハヨスギタレバコノ序文安磨ガ文ニハアラジ後人ノ僞作ナラン本文ハ上代ノ野史ナラン上代如此ノ野史ハアマタアリ野史トハ國史家牒ノ如クタシカナラヌ書ニテシカト撰者モタシカナラヌ妄リニ記シタルモノナリ上代ノ野史ノ殘リタルニ後人序文ヲ僞作シテ撰者ヲ安麻呂ニ託シタルモノカ且ツ日本紀續日本紀ニモコノ書勅撰ノミエズ又天武記二十年三月諸臣ニ命ノ帝紀及上古ノ諸事ヲシルサシメ中臣ノ大嶋專ヲ筆ヲトルコアリコノトキ阿禮ニ命シテ先代ノ勅語舊辭ヲ誦セシメ玉ハ、又何ゾ大嶋等ノ諸臣ニ帝紀ヲシルサシメ玉フコアラシラン若又コノ天武十年ニ大嶋等ガ記スル書古事記ナラバ阿禮又ソノ撰者ニアルベシト云ヘリ按スルニコノ考クハシクノ信用スベキニ似タレドソノ説アタラズ古事記序文ノ文章ノ一時代ニアハセテ文章過タルト云フ心得ガタシコノ序文ハ和銅五年ナリコレヨリワヅカ八年過テ奏覽スルトコロノ日本紀ソノ文體委經史ノ例ニヨリ文章ノ法備レリワヅカ八年以前ニ文章ノ法備ラザルコアルベカラズコトニ安磨又日本紀ノ撰者タリ和銅ノコロハ本朝モ既ニ文學サカリニシテカホドノ文章ニウトカルベキナシソノ上安磨ソノ時ノ學才他ニスグル、トキハコノ作文ウタガフコアルベカラズ又本文ノ文體序文ニカハリテ文章ノ法ソナハラズカナガキニナシタルコトハ右ニ云フ如ク安磨コノ記ヲ撰ムニ先代舊事紀ノ旨趣ヲ阿禮ガ傳ノマ、ニ聞マ、ニ書タルモノニテ自ラノ才

カヲアラハシ文章ヲカザリタルニハアラズ古傳古書ノ趣ヲ其儘シタリ序文ニ至リテハ自ラノ作文ユヘ筆力ヲアラハシ文章ヲカザリタルモノナリ然レバ序文ト本文トノ文體カハリタルモノノイハレアリコ、ヲ以テ僞書トスベキナシ又天武十年大嶋等ニ命ノ國史ヲ撰ゼシメ玉フコアラシ按ズルニ本朝履中天皇ヨリ國史ヲヲキテ諸國ニテ事ヲ記シ玉フトイヘド全部シタル朝廷ノ御記録ハナシ漸推古ノ朝ニ太子馬子ガ撰ゼシ紀アレド兵火ノタメニ燒失タルコト右ニ云フ如シ其後モナクテ過ヌ惠尺ガ奉リシ殘篇アリトイヘドワツカノ殘篇ニノ全部セザレハコレノミニテ朝廷ノ御記録ニナリカタシ故ニ天武ノ朝大嶋等ニ詔メ國史ヲ撰ゼシメ玉フナルベシ又阿禮ニ命メ舊事紀ヲ誦セシメ玉フトミユ阿禮ニ命メ舊辭ヲ誦セシメ玉フコノ序中ニ年月ヲ出サレバ大嶋等ニ詔メ國史ヲ記セシメ玉フト何レ前後ノホドハ考ガタケレドモト天武ノ思召諸家ニアル記録傳説マチノニテアヤマリアルユヘソレヲタシシ帝紀ヲ撰ントノコトユヘ阿禮カクベツ人ユヘニ先ツ先代ノ舊事紀帝王ノ日繼ヲヨミナラハセ玉フナルベシ然レバ阿禮ガ誦シ習フ先代舊辭トイヘルハモツハラ舊事紀ノ殘篇ノ旨趣ニテコレノミニテ朝廷ノ御記録ニハコトアルマジコノ推古ノ御宇所撰ノ舊事紀ノミナラズ其外上代ヨリ諸家ニノコル記録モ多キユヘソレヲアツメテ其虛實ヲ糺シテ全部スル國史ヲ大シマ等ニ撰セシメ玉フナルベシ然レド阿禮モ大嶋等モ其事トダス打スタリ世ウツリタリソノ後元明帝ノ和銅ニ至リ安麻呂ニ命シテ

阿禮ガ傳ノ趣ヲ記サセ玉フ所謂ル古事記ナリ然レモコノ古事記ニテハ朝廷ノ御記録ト立ガタキニ付テ其後ニ日本紀ヲ撰シ玉フナルベシ然ルトキハ日本紀ノ撰ハ恐クハ天武ノ朝大嶋等詔リウケテ記セシ草稿ニテモアルベキニソレニ次デソレヲ本トノ撰ズルモノカサレモコノ證ナケレバキワメテ云ガタシ

○或説ニ此書序文ニ古事記トナヅクルト云フミヘズ然レバ古事記ト云ヘル題號ハ後人加ヘタルカト云按ズル萬葉集第十三ノ哥ノ左註云檢ニ古事記ニ件歌者木梨輕皇子自^{ミマカル}死之時所作者也トアリコレヲ以テミルトキハ古事記ノ名ハ古クヨリアルトミヘタリ萬葉集ニ載スルトキハアナガチ後人ノ加フトハ云フベカラズ

○本朝三部ノ本書ト云俗説アリ先代舊事本紀古事記日本書紀ヲ云コレ名法要集ナドノ覺束ナキ書ニ出タルヨリ外ハタシカナル書ニ證據ナシ舊事紀ハ舊本ニアラズ古事記モ右ニ云通り古書タリトイヘ凡國史トシガタシ何舊事古事ノ二記ニ日本紀ヲ合メ日本三部ノ本書トセンヤ兼俱神代抄清原宣賢神代抄等ニ三部ノ本書ト云フミユレモ取ルニタラズ兼俱ガ臆説ニヨリ宣賢ハ專兼俱ガ説ヲ信用スルユヘナリ

○清原宣賢神代抄ニ曰先代舊事本紀古事記ノ二書ハ神代ノ書ノ心ヲ以テ撰者ノ新作シタルフミ也此

日本紀ハ神代ノ書ヲ其マ、集テ編タルフミナレハ第三ニ撰シ出タルトイヘ凡撰者ノ作文ニアラサルユヘニ此書ヲ以テ最上トス故ニ吾國ノ摠名日本ヲ以テ題號ノカシラニ置クコレヲ以テ證據トス云云此説心得ガタシ舊事紀ハ右ニ云通りナレバ論ニ不及古事記ハ神代ノ書ノ心ヲ以テ撰者ノ新作シタル書也日本紀ハ神代ノ書ヲ其マ、編タルユヘ後ニ出來テ日本紀ヲ最上トシ題號ニ國號ヲヲホスト云フイカニゾヤ古事記ハ阿禮カ口授ノ古傳ヲ安麻呂聞マ、ニ書シタル記ニテ新作ト云フモナシ撰者ノ私意ト思フベキ記中ニサラ、ナシ日本紀ハ神代ノ書ヲ其儘集テ撰者ノ作文ナキト云フハナラ、心^{グク}得ガタシ神代ノ書トハ何ヲサシテ云ニヤ我國上世文字ナキ何ノ書アラン例ノト氏ノ^{グク}寓言ナリ勿論日本紀ヲ撰ノ日上代ヨリ散在スル古記ヲアツメテ撰者自作ノ言ニ非ズトイヘ凡紀ヲ序ズルノ次第文章ノ體ミナ、撰者筆力ニシテ漢家ノ書ヲ借用テ文ヲ敷キ句ヲ構フ處撰者ノ微意アリ尤古紀ノ儘ニシテ撰者ノ作文ナラズボユル處モアレ凡史法ヲ設ケ文章ヲカザル處ノ書體何ゾ神代ノマ、ト云ンヤ云ハ、日本紀ハ撰者ノ私意アリトモ云ハンヤ此古事記ニ於テ安麻呂自ラノ筆力ヲアラハズ古傳ヲ聞マ、ニ記ストコロ全篇ノ書體ニ自ラ明ナリカ、ル臆説トルベカラズ然レモ日本紀ヲ以テ國史ノ最ト國號ヲ題シ古事記シカラザルハ○或説ニ舊事紀古事記ノ二書全ク皇統一脈ノ實録ト稱シガタシ其謂レハ二記トモニ君臣ヲ雜ヘ記サレタリ舊事紀ハ第一神代系紀ニ君臣ヲ併セ記シ天御中主尊ヲ第一

代ニ立國常立尊ヲ第二ニ立給ヘリ且ツ饒速日命等ノ系ヲ委シク記シ玉ヘリ日本紀此紀ニ載給ハズ却テ深キ旨侍ル古事記ハ初ニ五柱ノ別天神ヲ立次ニ國常立尊ヲ立ラレタリ且二記ハ古來傳ル所ノ諸説ヲ備ヘズ自己ノ意ヲ以テ唯一決メ成タリト見ヘ侍リ又此紀日本紀ハ國常立尊ヲ首ニ立給ヘリ所謂國之所マ以則帝王之任也故爲ニ帝王之元祖ト是開卷第一ノ大事ニシテ國號ヲ以テ題號ト爲給ヘル微意モ亦茲ニ在リ帝王ノ御血脉開闢ノ最初ヨリ天地ト俱ニ立セ給ヘル本源ヲ唯一路ニ記シ玉ヒテ臣下ノ系ハ雜ヘ給ハス是信ニ帝王ノ實錄タル所也又此紀一分ノ私意ヲ加ヘ給ハズ上古ノ神語ヲ唯有ノ儘ニ集メ給ヘハ序文モ無ク撰者ノ名ヲモ載給ハス親王ノ作分ニ非ル旨ニシテ是萬代ノ達書タル所也ト云按ルニ此ラノ說半ハ可ニシテ半ハ不可ナリ古事記ハ別天神五柱ヲ初ニ書ク次ニ國常立ヲ記シ君臣ノ一ヲ雜ヘシルス日本紀ハ國常立ヲ首メトシ帝王ノ血脉開闢ノ初ヨリ立ツ處ノ君道ヲ唯一路ニ記シ玉ヘリ國號ヲ以テ題號トスル微意存スト云ハトキエテ宜シ古事記ハ書體上代質素ノ體ニシテマアリノマ、ニ記シ史法文章ニカ、ハラズセシトコロマコトニ實錄ニシテ證トスルニ足レリ此書ナカリセハ上代ノ古言等求ムル由ナシ日本紀ノ訓點等多クコノ書ヲ據トス然レモコノ書ハ帝王統紀タ、ズ君臣ノ一ヲ雜記スルユヘ帝王ノ國史トシガタシ故ニ後ニ日本紀ヲ撰マシム日本紀ハ史法ヲ正ウメ文章ヲ撰帝王ノ統紀ヲ第一トスルユヘニ國史ノ最トシテ國號ヲモ題號トス古事記ハシカラズタゞ古キ事トシシルスノ意ニテ古事

記ト題セリ日本紀ハ國常立ヲ初トシ神世七代ヲ序テ日神ニ至リ帝王ノ統紀ヲ本トシテ記シ諸神ノ一ハ記サズ古事記初ニ天御中主ヨリ書キ出シテ五柱ノ別天神ヲ出シ次ニ國常立ヨリ七代ヲ記シテ天照太神ニ至ル末ニ至リテ君臣ノ一ヲ雜ヘシルシ諸神ノ系譜等ハ日本紀ヨリ委シ然レモ帝紀ヲ本トセサルノユヘ國史ノ最トセザルトコロ也日本紀ハ國常立ヲ初トシ七代ヲ序テ此古事記ハ天御中主ヲ最初トシテ五柱ノ別天神ヲ初ニ記シ諸神ノ尊ヲ天御中主ヨリノ受禪ノゴトク記ストコロ古事記日本紀ノ意齟齬スル處ニ深々道理アリ委シクハ本文ノ其章々ニ於テ辨ズルユヘ爰ニ畧ス 舊事紀古事記ハ諸説ヲ交ヘズ唯一ニ決メナシタリ日本紀ハ一分私意ヲ加ヘ玉ハズ古代ノ神語ヲ有ノマ、ニ集メ玉フユヘ序モナク撰者ノ名モナキト云テ心得ガタシ舊事紀ハ右（上）ニ通リナレバ論ニ不及古事記ハ安麿阿禮ガ傳ヲ其マ、記シタルモノナレバソノ說一通リノハズナリコレヲ以テ私意ニ決スルモ云ガタシ阿禮ガ說ハ先代舊辭ニテ古説タルヲ右ニ云如シ日本紀ハ一分ノ私意ヲ加ヘズ上古ノ神語ヲ有ノマ、ニ集メ玉フト云フ一モ心得ガタシ勿論日本紀ヲ撰ムノ日諸家ノ記錄ヲアツメテ撰玉ヒ撰者作爲ノ一ニアラズ古説ヲソノマ、アゲ且ツ一書ノ說ヲ設ケテ諸家ノ說ヲ悉アゲ玉ヘリ然レモ書體文章古代ノマ、ト云一ハアラズ古代ノ書ノマ、ナラバ古事記ノ如キ書體ナルベキニ日本紀ハ史法ヲソナヘ悉漢土ノ書例ニナラヒ文章ヲ綴リ文字ヅカヒ熟字等ミナナクアナタノ史漢文撰（マ）ノ文句ヲヌキトリテ用タリ

コレ古代ノマ、ノ神語ヲ有ノマ、ニ書ストハ云ガタシ書ノタテモ帝王ノ統紀ヲ立ルヲ本トシテ本文
 専ラ帝王ノ統紀ヲシルシ其餘ノ一ハハブケリ然レモ神代ノ一モラシガタキ一帝王ノ統紀ニアヅカラ
 ザル一ハ皆一書ノ説トシテ註ニ記シ決シガタキ一ハ諸説ヲツク又コレ撰者ノ私意トニハアラザレモ
 彼ヲ本文トシコレヲ一書トシソノ前後ノ次第ミナノ撰者ノ意ヲフクメリ一書ノ説ヲ設ル尤諸説ヲ
 ステズ決シガタキ一ハ説々ヲノストイヘモヲモトスルハ帝王ノ統紀ニアヅカラサル一及帝王ノ統紀
 ニサ、ワルコトモアルユヘソレヲ本文ニ載テ國史ノ法ニソムクユヘワザト本文ヲハブキテ一書ノ註
 ニ記セルモノトミルヘシ古事記ニ一書ノ説ナリ異説ヲアゲザルヲ以テ一スジニ決シタルユヘ撰者ノ
 私意トハ云ガタシ古來ノマ、ナル文體ハ日本紀ヨリ却テ古事記ニアリ日本紀ハ帝王ノ統紀ヲ立ント
 スルヨリ文體ニ撰者ノ意ヲフクム古事記ハソノ統紀ニモカ、ハラズタマアリノマ、ニ記スルユヘ却
 テ日本紀ヨリモ實録ナリ日本紀序ナク撰者ヲ註セサル一ハ予アラハス日本紀撰者辨ニツマヒラカ
 ニ論ス日本紀ト古事記何レ優劣ノナキ實録ナレバ學者心ヲ委シテ二書相ナラベ合セ考熟復スルトキ
 ハ古意旨ヲ自ラ知スベシカ、ル大切ノ書ヲ如何ナル一ニヤ先輩モナラザリニシテ註解ヲモナサズ講
 習討論ニモ及バズタマ日本紀ノミヲ見テコトタリストシコノ書ヲ徒ニスル一カヘス一モ殘念至極
 セリ日本紀而已ニテコノ書ニワタラザル片ハアヤマル一多シ故シ先輩ノ註釋ノ末書モナク漸ク延佳

神主ノ改正ノ本ニ頭書セシノ世ニ行ル、ノミナリ

○或説ニコノ古事記ニ白川神祇伯ノ家ニツキ十二ケノ傳アリナド、云説アレドモ偽ナリ又古事記ノ
 私記古事記御註ナド云書古來アリタルナド云説アレモ各妄説ナリソノ書目何レ引書ニモ見ヘズカ、
 ル造言信ズヘカラズ然レモ親房ノ元々集ニ古事記釋註曰トテ其文ヲ引ケリ古ヘハカ、ル書モアリタ
 ルニヤイカナル書ニテヤアリケン覺東ナシ今絶テ不傳

○日本書紀ハ帝王ノ統紀ヲシルスヲ主トシコノ國史ニアラズタマ古事古言ヲ記スト云ヲ旨意ニシ
 ルトキハ自ラ記文アキラカナリ故ニ此書ヲトクニハ又意味アリ日本紀ヲ解スルトハ其意大ニ異レリ
 學者心ヲヒソメテソノ意ヲウカバフベシ

○梨木祐之曰古事記ノ見様ニ傳アリ此ハ古語拾遺ト同シ格ニテ日本紀ニ無レ之説ヲ舉タリ舊事紀ニ
 モナキ一ヲ載テ似タ一デモ一二字ノカハリデモ皆カハリタ分ヲ載タゾソレユヘ日本紀ニ合メ見レバ
 甚クヒチガフニナル上中下三卷ノ内上卷バカリヨミテハ其味不レ知中下卷ヲ讀テ日本紀ニ合セテ見
 レバ其違ヒメノ舉タル一見ユ或問曰日本紀ハ後ニ出來古事記ハマヘノ書ナリ如何祐之答曰ソレユ
 ヘ古事記ノ説ハ帝紀ヲアム片ニ取用ズユヘ違フタモノ也

古事記上卷并序

へ古ハ字彙ニ公土切孤トアリ説文ニ古故也ト云増韻ニ遠代也説文ニ从二十口一識前言也徐曰十口、
所傳是前言也トアリ古ヲイニシヘルフルキトモ和訓ス又禮記禮運註疏云伏羲爲上古神農爲
中古五帝爲下古トアリコ、ラノ古ノ字ハカヤウナル上中下ノ三古ニカ、ハラズタビヒロク古ト
ミルヘシ

へ事ハ字彙ニ時吏ノ切音嗜世務大曰政小曰事紀綱法度曰政動作云爲ヲ曰事 説文事職也爾雅勤
也註云力者由事事故爲勤也韻會ニ三公之任曰三事六卿之任曰六事又尙書ノ洪範ニ五事ト云ハ
貌言視聽思ナリ事ハコトモワザトモ訓ズ古事ノ二字ハタマナニトナクフルコト、云ナリ

へ記ハ字彙ニ吉器切音季誌也トアリ又前漢書ノ註ニ記書也トアリ説文記疏也徐曰疏謂一分別記
レ之也廣韻志也トアリ記ハシルスト訓ス此題號ハ別ニ心ナクフルコトヲシルスト云コ、ロニテ古事
記ト云古キレナニトナクカキツラ子タルモノナリ

へ上卷トハ此記上中下ノ三卷アリスベテ書ヲ上中下ナド、ナツケツケルハアナタノ書ニモ例多シ
然レモミナ卷上トシルスシカルヲコノ書ニハ上卷トアリカヤウニシタ例未タシラズ勿論引書ナドニ

ナニノ上卷ニアリナド、書ク事ハアレバ如此題號ニ上卷トシルスノ例ヲボヘズイカバシタルモノニヤ上代ノイサヤウニアタノ書例等ヲ委シク考ズミダリニシルシタルモノカ右ニ云通コノ書ハ日本紀ナド、ハカハリテ書法アナタノ經史ノ例ニヨル事モナクカナ書同然ニカキタルモノナレバサヤウナ例ニモカ、ハラズ三卷ノ書ヲ上卷中卷下卷トナシツケカキタルモノナルベシ

ハ并^{ナリ}序^ヲ 序トハ文撰注濟曰序舒也舒^シ其物理^ヲ孔安國尙書序ニ序^ハ者所^ハ以^テ序^ル作者之意^ヲ 爾雅云東西牆爲^レ序如^レ世牆序在^ニ堂奧之外^ニ即喻^フ序文冠^ル倭^ノ詩之表此端^ハ序義也又序訓^レ叙述^ニ始終之義^ヲ 歷然不^レ混此則次義也又序訓^レ緒如^レ繅繭^ニ得^レ緒則餘^ハ糸可^レ理^ル 并^レ序^トハ序ヲアハセタルニテ本文ニ序ヲアハセタルナリ本文モ序文モ同人ノ作ナリ自^レ序加^ハ序ナド云モ同シ自^レ分^ニ編集ノ書ニ自^レ分^ニ序ヲ書クトキ自^レ序ト書クナリ并^レ序トハ文章ヤ詩ナドニ序ヲカクトキソノ詩文章モソノ序モ同人ノ作ナルトキ并^レ序トス和哥ナドニモ如此^ニアリ萬葉集第五梅花哥二十首并^レ序トアリ契冲ノ説ニモ并^レ兼并^{ナリ}後ノ哥ノ題ヲコ、ニカチアハスルユヘニ并^ト註スナラビニ序ト讀ハ江家序アハセタリト讀ハ管家ナリ今詩文集ナドニ并^レ序トシルシアルハ其詩文ヤ序ノ作者自^レ分^ニ并^レ序トカキタルニテナシ自序ナド、シルストハカハリテ其詩文集ヲ撰ムトキソノ集ノ撰者ガソノ詩文ニソノ序ヲ并^レセタルト云心ニテ并^レ序ト註シタルモノ也如此書物ノ序ニソノ書モ自^レ分^ノ作ソノ序モ自^レ分^ノ作ナルトテ并^レ序ト

カキタル例未^レ知然^レハコノ并^レ序ノ二字ハ後人コノ書ヲ閱テ本文モ安麿作序文モ安麿作ト云^フニテ并^レ序ノ二字ヲ加筆シタルモノカ然^レモ古語拾遺ナトモ序文ニ古語拾遺^一券^ヲ加^ハ序トアリコレ古語拾遺本文モ序モトモニ廣成ノ作ナリコレヲ以^テ思^ヘバコレハ我國ヤウノ^ニテ古代カヤウニモ致シ來リタルモノニヤ今吟味スルゴトク一々西土ノ書法ノ例ニアタラス^トモ多シコレ古代ノユヘナリ

臣^マ安^マ萬^マ侶^マ言^マ 臣^マ誰^マ言^マト書キ出スハ臣^マ下^マヨリ奉^ル表^ノ文體也タトヘアナタニテ^ニモ出^ル師^ノ表^ノマツクチニ臣^マ亮^マ言^マトアリ勅^ニヨリテ書^ヲ編^ニ付^テ書^テ上^ル時ニ表^ヲソヘテ出^ストヒ

タトアリ延喜式ナドモマツ口^ニ延喜格式ヲ奉^ル表^ヲノセテ臣^マ忠^マ平^マ等^マ言^マトアリ又令^ノ義^ノ解^ナドニモ臣^マ夏^マ野^マ等^マ言^マ書^マアリ又姓氏錄ノ表ニモ臣^マ萬^マ多^マ等^マ言^マト書^出シアリ西土ニテモ勅^ニヨリ編^テ上^{タル}書^ニハ表^ガソフテアリタトヘバ蒙^求ナドノマツクチニ臣^マ良^マ言^マトアル類也然^レモ新撰姓氏錄令^ニ義^ノ解^{延喜式}等^ハ先^ツ表^ヲノセ其次ニ序アリ此古事記ハ此文一ツニテ外ニ序ナシコノ表^ノ體^ニ書^{タル}文章一ツヲ載^テ外ニ序文ナキ^ト例^少シコノ序又表^ノ文體^ニ初^ニ臣^マ安^マ萬^マ侶^マ言^マト書^キ出^シ終^リニ又臣^マ安^マ萬^マ侶^マ誠^ニ惶^ニ誠^ニ恐^ニ頓^首々々トメテ表^ノ體^ナリコレ此書編集ハ和銅五年ニテ古代ノ^ニテサヤウナル差別ナクノ表^ナガラ序^ニ用^{タル}モノカ又コノ文表^ノ體^ナレバコレ安萬侶古事記^ヲ上^ル表^文ニ^ソ序^文ニ^テナ^キヲ後人題號ノ下ニ并^レ序ノ字ヲ加筆シタルモノカトヲボユ秀根説ニ類聚國史^ヲ按^ズルニ文ノ

(青筆、頭註)
臣ヲマクヲトヨム古今序ヨリヲコル
マクヲハマロラノ假名誤ナリト契仲
説也荷田在滿鴨眞淵説同シ眞淵云マ
ロトハ臣ノ自稱ノ詞カドノシキト
云ハ才智ノアルコトユヘマルヒト云ハ
愚ナ方ニテ自稱卑下ノ詞ニマロト云
後世小兒ノ名ヲ何丸ト云モ此意ナル
ベシ此説是也

(青筆、附箋)
秀興後按臣ヲマクヲト訓ズル古今
序ニ出ツ古今序ニマクヲ詞ハ春ノ花
ノ匂ヒウスケト云榮雅抄ニマクヲ
詞トハ貫之以下撰者ノ哥ノト也眞名
序ニ臣等詞トカキテヨム枕詞ニアラ
ズ臣ヲマクトヨム大臣ト書テマウチ
キミトヨムマウ、マク同韻也心ハワ
レラガ詞ニ我等ガコトバ花ノニホヒ
ナキコトハデト云云

秀興按本文首書ニ記ス契沖眞淵等
ノ説是也榮雅等ノ説不可用臣ヲマ
クヲトヨム義ナシ本文ハ臣安萬侶
トヨミテマクヲトヨムベカラズ

部ニ日本後紀ノ序文ヲノス臣緒嗣等云ト書出ノコノ序文ノ如ク
表ノ體ニ書ケルヲ類聚國史ニ日本後紀ノ序ト記ノアリ然レバコノ
例ヲ以テミルトキハコノ古事記モ序文ナルト明ケシ○臣ヲマクラ
ト訓ズルハ古言トミヘタリコノ訓ニツキテモ説々アリテマクラハ
マハマコトニテ眞座ト云義ニ座ハ居處ノ古語タリ臣下ハ君ノ
居處トナツテ君ヲ安ズルノ故也枕ト云ニ通ズ枕モ一身ノ居處ト
ナリテ安ズル處ナリトコノ説附會ノコトニトルニタラズ又アル説
ニ臣ハマカル、心君ノタメニ鞠躬スル心ト云ヘリ秀興按ニ文撰ノ
表ノウチニ臣等ノ字ヲ菅公ノ點ニマクラト點セリ然レバ臣等ノ二
字ヲマクラト訓スルトキハラハ等ノ訓ニテ臣ノ訓ハマクナリ又神
代紀下ニ侍者ヲマカダチト訓ズ等ノ字又タチト訓スマカマク訓通
スレバマクラマカダチ相同シテ臣下ノ稱ニ君前ニ伺候シテ敬肅
スルノカタチヲ云ノ意ナランカ○安萬侶ハ名ナリ末ニクハシ○儀
制令曰凡皇后皇太子以下率土之内於天皇太上表同稱ニ

臣妾各對揚稱名云云

夫混元既凝氣象未效無名無爲誰知其形

(朱筆書入)
○文迂十四幽通賦ノ渾元渾物註善曰曹大家曰渾大也元氣運轉也物萬物也云云大元ト云ニ同シク天地元氣ノ大モト也

夫トハ發語ノ辭也混元トハ渾沌ト云モ同ジク混ハ渾沌元ハ元氣也天地未分ノ大元ヲ云既凝トハ
一氣ノ一マロカレニコリテワカレ所ヲ云○文迂四十八司馬長卿封禪文ニ外運渾元註ニ濟曰渾元
造化之氣ト云云○氣象未效トハ氣ハ陰陽ノ氣ナリ象ハカタチナリコノ象ノ字ノカタチハ形ノ字
トハカハリテ形ハシカトキハマリタルカタチ象ハカタドルカタチ也未效トハ一氣未分ノトキユ
ヘソノシルシトスル處イマダアラズソノモヤウカタドルトモナラズアトカタノミエヌ體ヲ云效ハ
字書ニ象也トアリ又功也驗也トアリ一氣未分ニソモヤウカタドルベキシルシモナクトラマヘ處
モナキ體也○無名無爲ハ老子ニ出タル字ナリ天地モヒラケズ陰陽モワカレヌトキユヘコレヲ
陰コレヲ陽ト名ツクベキコトナク又動キ靜ナル處ノシワザハタラキモナキ也右ノ通りコトユヘコト
コロヲ誰モシルモノハナシ混沌未分體ノ形ハシルヌハズナリ親房ノ東家秘傳ニ一物未生前ナレ

バ可^{ナク}字之處ニモアラズ可^シ象之無^シ形トイヘリ古歌ニスムハ空ニゴルハ土トワカレニシソノ古ヘハ何ソシルラント云リ人ノ知ルベキニアラズコノ文日本紀發端ニ古天地未部^(イマ)陰陽不分混沌如雞子溟滓而含牙ト云ヘル段合セ考フヘシ

然^レ乾^ニ坤^ニ初^ニ分^テ參^テ神^ヲ作^リ造化^ノ之首^ト

コレマデハ混沌未分天地ヒラケヌマヘヲ云コレカラ天地ノヒラクルヲ云テ段々ト次第ヲ云ナリマヘ一句ニ混元ノ一元氣ノコリテイルトキハ名モナク爲ルヲモナク誰カソノ形ヲシランシレヌナリ然リトマヘヲウケテ一ツハ子テケレドソウハアレ^レ天地ヒラケテカヤウト云出スナリ
○乾坤ト云ハ天地ト云モ同シ也ソノウチ天地ト云ハソノ體ヲ云乾坤ト云トキハ天地ノ性情ヲ云コトバナリ初分トハ清陽ハタナビキテ天トナリ重濁ハ地トナリテ天地ノヒラケワカル、ヲ云○參神トハ三神ニテ此本文マツクチニ出テアル天^ノ御中^ニ主^ト高皇產靈神^ト皇產靈^ト三神ヲサスコノ三神ガ造化ノ首ト云也造化トハ淮南子ニ大^ニ丈夫^ニ無^シ爲^シ與^テ造化^ノ道^ニ遙^ク高^ク誘^ハカ^レ註ニ造化ハ天地ナリトアリ造化ト云ハ天地ノチカラニテ萬物出來ソレガ化シテウツリユクナキモノガ出來アル物ガナクナルミナ造化ナリスレバウチツケテ造化ハ天地ナリト云註ハヨキ註ナリ首ト云ハ第一番ト云一始ノ字初

字ナド、ハカハリテモノヲ一ツトラマヘテ云首トハカシラノ一也コノ三神ハ造化ノカシラ第一番ノ神ナリ作ヲ古板ニハナシト點ノハシメヲナシトヨメリ延佳ハ首トナリト點ス延佳ノ點ヨロシ作ハ字書ニ爲也トアリ造化ノハシトナリタリコノ天御中主高ミムスヒ神ムスビノ三神ハマサシ^(イマ)氣化人體ノ神ナリ然ルヲコ、ニ造化ノ首ト書ク一深クユヘアリコ、ノ文ヲ以テコノ三神ハ人體ノ神ニアラズ造化ノ神靈ナリナド云ハフカク不^レ考^レ說^レナリ委^シク本文ノマツクニテ辨ズルユヘコ、ニ畧ス扱^クコノ三神ト云ニツキ異說アリ三神ハ天地人ノ三才ヲ云三才^トハ^ニ皆^テ自^ラ神^{ナリ}日月星ノ如キハ天ノ神雨師風伯ノ如キハ地ノ神伊弉諾伊弉冊ヤ天照太神ノ如キハ人ノ神也此三ツヲスベク、ツテ云神代ノ卷ハコノ三ツヲスベテトキタルモノトイヘリコノ說前後不^レ合^セ說^レナリコノ序文ハ本文ニ出タル事實ノ大要ヲ一ツ一ツ上^レゲテ神代ヨリ人皇ニ至ルマテヲ云ヘリコノ書天御中主以下三神ヲマツ最初ニカキタルユヘニコレニ合セテ御中主等ノ三神ヲ先云ソレカラ段々ト書キツラキタルモノゾソレユヘコノ說ハ不用

陰^ノ陽^ノ斯^ニ開^キ二^ノ靈^ヲ爲^シ群^ノ品^ノ之^ノ祖^ト

陰陽トハマヘノ乾坤ニ對^シテ書天地ワカレ陰陽ノ二氣ヒラケテナリコ、ニ開^ケテトハマヘ初^ニテ分^ル

ト云ニ對メ云ニ靈トハ二神ト云フニ同シ伊弉諾伊弉册ノ二神ヲサシテ二靈ト云群品トハ萬物ト云ニ同シ諸册ノ二尊ハ八洲ヲ生シ山川草木ヲモ生シ玉フユヘニ萬物ノ祖ト云フゾ二靈トハ上ノ陰陽ニヨツテ陰陽二氣ノ靈ト云フニテ上ノ句ノ三神ト云ニ對メ二靈ト書ク陰陽ノ二氣ト云ハズ二靈ト云ハ神靈ニメ二尊ヲ云群品ト書テ群人トモ書ザルハ品ハ一物ノ物ニカ、ル人バカリテナシ人ニ云ニ不_レ及萬物ノ祖ナリト云意ゾ神代紀一書ニモ悉生_ニ萬_物トアリ ○扱諾册ノ二尊ハマサシク人體ノ男女ノ神ニメ一女三男ノ父母ノ神ナリ然ルヲコノ序文ニ二靈ト記シ又群品ノ祖ト記スフカクユヘアリ先輩ノ説ニ諸册ノ二尊ハ造化人體ヲ相兼ル也造化ノ二尊トハ陰陽二氣ノ神靈也人體ニ男女夫婦ノ神也造化ノ二尊ノ功用ヲ以テ天地ヲ開キ國土ヲ生シ山海川草木萬物ヲ悉ク生シ人體ノ二尊ハ御子ヲ生シ玉ヒテ日神ヲ以テ天位ニ即ケ玉ヒ初テ君道ヲヒラキ人倫ノ道ヲ天下ニ立萬世ニタレ玉フコレ造化人體兼備ナリコレヲ未生ノ二尊已生ノ二尊云トナリ秀興按ルニ先輩ノ説ソノ理トキ得テヨク通ズ然レ_レ人體ト造化ヲ相兼ルト云或ハ造化ニモ二尊アリ人體ニモ又二尊アリト云或ハ未生_ニ已生_ニノ二尊ナド云フソノ理通ズトイヘドモソノ實ヲ得ガタシ二尊人體タルハ云ニ不及_ニアキラカナリ人體男女ノ形ヲ得ルニ至リテ二尊ノ神聖トイヘ_レ何ゾ今日ノ男女ニ異ンヤ眼橫鼻直ニ_ノ五尺ノ形體タリ然_レ造化ヲ相兼ルト云ソノ實スミガタシ又造化陰陽ノ二氣ヲ稱メ二尊ト

云フコレ又心得ガタシイサナギイザナミハ人體男女ノ神ノ名ニメ造化陰陽ノ二氣ノ名ニアラズ未生已生ノ稱モ古書ニ證文ナクト部家ノ新説タリ已ニ生スルノ後ニコソ諸册ノ名アリ未_ニ生_{以前}諸册ノ名アラシヤカヤウナルハ佛説ニ近クノ空理、虛談ノ如シ然レ_レコノ序文ニ二靈ト書キ群品ノ祖ト云又コノ古事記日本紀_ニ二尊ノ事實ヲ記スルハ洲壤ヲ生山海草木萬物ヲ生ズルノコトコレ造化ノ言ヲ以テ人體而已_ニテハソノ理解シガタシコレヲイカント云ニ蓋_{コノ}二尊吾國開基ノ大祖ニメ八洲ヲ經營シ人道ヲ網_ニ紀_シ人ハ云ニ不_レ及山川海陸鳥獸草木器財ニ至ルマデ各ソノ境域ヲ分チ法度ヲ定ソノ宜シニ製シ玉フテ天地ヲ經緯シ玉フ其功ナラズ事ナシ天地ヒラケ人民生シ山川草木アラハル、トイヘ_レコレガ境界ヲ分法度ヲ定人道ヲヒラクノハナキトキハ洲國モヒラケザルニ同シク萬物モ生セザルニヒトシ故ニ天地萬物二尊ヲ待而後ニソノ生ヲアラハシ功ヲトグル也二尊我國ヲ開キ人道ヲサトシ御子日神ヲ以テ初テ君トシ天位ニ即ケ玉フソレヨリ君道萬世ニ燦然タリ二尊ソノ德神聖ニメソノ功マサニ造化ノ陰陽二氣天地ノ間ニ萬物ヲ化生スルガ如シ故ニ後世二神ノ神功ヲ尊崇メ造化陰陽二氣ノ神靈ニ配シ神_ノ祭_レリ故ニ神紀ヲ記スモ亦二尊ノ德行造化ニヒトシキヲ以テコレヲ造化ニ配シ造化ト合一ノ文法ニ記セリカヤウニ云ヘハ神紀ヲ記スル人ノ私ノゴトクキユ_レレバサニアラズコレ我國上代ヨリノ傳言ニ二尊ヲ以テ尊信メ造化ニ配シソノ功用

造化トヒトシク稱シ來レリソノ傳説ノマ、ヲ記セルモノナリコレ我國ノ自然ニ誰ガ私ト云ニアラズ誰ガ造化ニ配セシト云ニアラズ上代ヨリノ傳言ナリ祖先ヲ以テ造化ニ配スルノ漢土ニモソノ例多シコノ意ヲ以テ見ルトキハコ、ノ文句自ラアキラカナリコノ書及日本紀ニコノ意ヲ以テ推スベシシカルトキハ先輩ノ造化人體兼備ノ説モヨクキコヘタリシカレドコノ論ヲナサズタマニ先輩ノ説ノ如クノミナルトキハ空理ニシテソノ實得ガタシアトヨリシテ人體ヲ以テ造化ニ配シソノ徳ヲ以テコレ神トシ祭ルノ意ヨク思フベシ或説ニ神トハ其子孫先祖ヲ齋ルノ稱神代トハ後世上代ヲ敬スルノ言ナリ祖先ヲ祀リテ以テ神代トストイヘリ宜哉コノ意考ヘ合スベシコ、ニ萬物ト云ズ群品ト云ヘルハ人體ト萬物ヲ兼テ云ナリ

所^{ユヘ}以^ニ出^ル入^ル幽^ニ顯^ニ日^月彰^ニ於^テ洗^目浮^ニ沈^ニ海^ニ水^ニ神^祇呈^ニ於^テ滌^身

所^{ユヘ}以^ニトハ上^ラウケテ云コレヨリハ神代ヨリ人皇ニ至リテ事々ヲ一ツ／＼アゲ文ニカケリコ、ニハイサナギイザナミノヲ云幽顯トハ幽冥隱微ノヲニソ今日目ニミエヌカクレタル處ヲ云造化ノ藏ナリ顯トハ顯露當然ニテ目ニミヘタアラハレタココレハ人ノ事ナリ神代紀ニモカクレノコトアラハニ幽事顯露事ト云ヘリ出入トハ幽ト顯トアヒマジハルノ意ニシテ造化ト人事ヲサツソツ錯綜スルゾ顯ヨリ幽ニ入り幽

ヨリ顯ニ出ル日月目ヲアラフニ彰ハルト云ハ此書及ヒ神代紀一書ニ出タル通り 伊耶那岐命左ノ御目ヲ洗ヒ玉ヒテ天照太神ヲ成玉ヒ右ノ御目ヲ洗ヒ玉ヒテ月讀命ヲ成^{マシ}玉フト云一ヲ文ニ書キタルモノゾ日月トハ日神月神ト云フ意ニテ天照太神月讀尊御出生ノ一ヲイヘリ神代紀ナドニモ一書ノウチコノ二神ノ一ヲウチツケテ日月既生トカケリコレ人體ノ日神月神ヲ直ニ造化ノ天日天月ツクミテ云フコレマヘ陰陽二靈ノ一ヲイヘルニ同シ故ニ二神ヲマサニ天ノ日月トシテコノ神ノ御誕生以前ハ天ノ日輪月輪ノ一ハ不^レ云コノ二神ノ出生ヲ直ニ天ノ日月ノ出生ニシテ記スコト諾冊二尊ノ下ニ云フ通りナリ纂疏ニ左眼右眼ハ人之日月也故三五曆記謂磐古左右眼爲^ナ日月云云コレ右ニ云トキ諾冊ノ二尊マサニ造化二氣ノ神靈トシ天地萬物皆此神ノ生ズルト云トキハ天ノ日月則御子ナリコレ人事バカリニテスマヌ一ユヘ幽顯ニ出入スト云コレ人體ヲ以テ造化ヘ歸シテ云一ナリアラハル、ト云彰ノ字ハモノ、ハツキリトソノアヤモヤウノシカトアラハル、ノ義ニテ日月ハツキリトアキラカニアラハレ玉フト云一ゾ海水ニ浮沈シテト云ハコレモ此書ナラビニ神代紀一書ニ出タル通り諾尊ノ日向小戸橋ノ阿波岐ガ原ニテ御禊ノ一ヲ云浮沈トハアハキガ原潮水ニテミソギヲナ(頭註)シ玉フトテ水底ニテソ、ギ水上ニテソ、ギ玉フヲ云浮テソ、ギ沈テソ、グナリ神祇アラ賈逵國ハルトハアハキガ原ニテ御身ノケガレヲソ、ギ玉フトキ八十禍津日神大禍津日神神直語註曰彰著也

毗神大直毘神底津綿津見神底箇之男命上津綿津見神中箇之男命上津綿津見神上箇之男命等ヲ生
ミ玉フヲ云コレ諾尊ミソキシテ身ヲアラヒ玉フニヨリ生ズル神ユヘ神祇身ヲアラフニアラハルト
云ヘリ滌ノ字アラフト點セリ上ノ洗ハアラフトヨミ下ノ滌ノ字ハス、グトヨムベシ呈ハ廣韻ニ現
也露也トアリテアラハル、ナリ

故太素杳冥因本教而識孕土產島之時

上ノ文ヲウケテ故ニト云太素ハ列子ノ字ナリ上古ノコトヲ云コ、ハ神代ヲサシテ云ヘリ列子曰太
初形之始太素質之始ト云ヘリ文選三十一張廷尉綽太素既已分吹萬著形兆註良曰天地未分
曰太素潛夫論曰太素之時元氣竊冥未有形兆トアリ其外文迂ノ註ニモ太素ハ天也ノ又ハ自然
ナリノト云註ミヘタリヒツケウ天地開闢ノ初上古ノコトヲ云トミヘタリ杳冥ハハルカニクラキ也文
迂西京賦ニ雲霧杳冥ト云云註濟曰杳冥陰昏貌トアリ又文迂從冠軍建平王登廬山香鑪峯ノ
詩白雲上杳冥註ニ翰曰杳冥深暗貌トアリ又楚辭ニ杳々冥々而薄天トアリハルカニクラクノウガ
、ヒシラレヌ體ナリ右ニ云通り上古ハ杳冥トメシレテ本教ニヨリ土ヲハラミ島ヲ生ムノ時代ノ
コトヲシルトナリ本教トハ神教ト云ガゴトシ我邦神代ヨリノ教ニシテ古老ノ云ヒ傳ヘナリ神代ヨリ

口カラ口ヘ傳ヘ來リタル飭ナキ其正味ノ處ヲ云土ヲ孕島ヲウムノ時トハ二尊八洲經營ノ時ヲ土ヲ
ハラムトハ嶋ヲ産ト云ニ對メハラムト云土ハ國土ナリ嶋ヲ産トハ此書及神代紀ニ云ヘル諾冊ノ二
尊大八洲及處々ノ小嶋ヲウミ玉フ事ヲ云名玉集ノ哥ニモぬぼこたれおのころ嶋にありまして神を
父母國をうめればト云リコレ古老ノ言ヒ傳フル處ノ上代ヨリノ教ニヨリテ我國太素杳冥トイヘ
八洲生ル時ノコトヲシルト云コトナリ或説ニ土ヲ孕ムトハ天地ノ間ニ此土地ヲハラムヲ云トイヘリ
古板ノ本ニハ杳冥ノ冥ノ字宥ニ作ル疑ラクハ傳寫ノアヤマリカ○識ハ識別トテ一ツ、ワケテシ
ルコトナレ知ノ字シルト云トコ、ラニテハ同シ

元始綿邈賴先聖而察生神立人之世

コレ前ニ對メ書ク元始綿邈トハ上ノ太素杳冥ト對ニ云元始トハ大始ト云モ同シク大モトノハジ
メト云コトゾ綿邈ハハルカニトヲキコトヲ云文撰十七文賦函綿邈於尺素註良曰綿邈遠也文迂二
十二何敬祖遊仙詩然心綿邈註銳曰綿邈遠貌王逸楚辭註曰縣縣細微之思也又曰邈遠也遙遠ノ體ヲ
云元始ハルカニトヲケレ先聖ニヨリ賴テ神ヲ生シ人ヲ立ルノ世ヲ今日察ストナリ先聖ト云ハ
神語聖語ト云フ如シトイヘマヘノ本教ハ語ノコトヲイヘ此先聖ト人ヲサシテ云ヘバ神語聖語ナ

ド、語ノ一ニトクハアシ、又アル説ニ爰ノ先聖天照太神ヲサシ奉ルト云ヘリコレタシカニ文義解シガタシ先聖トハ先代ノ神聖ニテ古來ノ神聖タチノカゲニテト云フゾ我邦上古ヨリ世々ノ有徳ノ人ヲサシテ先聖ナリコノ先聖ニヨリ神ヲ生シ人ヲ立ルノ世ノ一ヲモ今日カラ察スルナリ生レ神トハ造化ノ神ヲ生ズル一ヲ云立レ人トハ國土經營シテ人倫ノ明ラナル一ヲ云トナリ又或説ニ神ヲ生ズトハ神世七代五代ヲ云人ヲ立ルトハ人皇以來ヲ云ナリシカレモコノ書神ト云人體ノ人ヲモ神ト云ヘハ神人ハ通ノ用ユ然レハカヤウニ分ケテミルニ不及神ヲ生シ人ヲ立ルトハ文ヲ互ニスルニメ上文ノ土ヲ孕ミ鳴ヲ産ムニ對ノカケリ神ヲウムトハコノ書本文ニミヘタル諸神ノ生ズル一ヲサシ人ヲ立ルトハ諾冊二尊人道ヲ開基シテ人倫ノアキラカニシ玉フ一ヲ云上ノ句ト此句ハ二尊創業ノ一ヲ云二尊ヘカケテミルベシ或説ニマヘノ幽顯ニ出入スト云幽顯ニカケテ孕レ土産レ鳴幽ニカ、リ生レ神立レ人トハ顯ヘカケテミルヘシトイヘモコノ説イリホガ鑿ナリヒツケウ二尊創業ノ時代ト云一序文ユヘカヤウ文章ニカキタルモノソ上古大始ハモノゴハルカニ遠クカスカニクラクシテシリガタケレ代々有徳ノ人ノ傳説ヲ得今日千載ノ季ニ神代二尊創業ノ時世ノ一ヲモシルト云意ナリ太素杳冥元始綿邈ト云ヘルコト上古ノ體ヲヨクイヘリ古語拾遺ニ神代之事説クニタレリ似ニ磐古ニ疑レ氷之意取レ信實難ト云又延喜式ノ歷運記ニ神代ノ一ヲ云ツテ時世邈遠事迹神異具ニ于舊記ト云ヘリコレラ

ノ意ヲフクミテミルベシ神世太古ノアリサマカクアルベキ一ゾカシ○又按コノ古事記ハ聖德太子所撰ノ舊事本紀ノ殘篇ノ章ヲ阿禮傳ヘタルヲ安鷹筆記セシモノナレバコノ文段本教ト云フハ彼太子ノ舊事本紀ヲサシ先聖トハ聖德太子ヲサスガ後ノ君子ヲ待テ其説ヲ決スベシ

寔知懸鏡吐珠而百王相續

寔ハ實ノ字ト同シ實ニ知ルト云一マコトニ知ルト感發ノ前ノ土ヲ孕ミ鳴ヲウムノ時神ヲ生シ人ヲ立ルノ世ヲ祭マストアル識ル察スルニテリ合セテ云フコ、ニヲイテ實ニ證文ヲ取テ云ヘリ懸鏡トハ天照太神ノ天ノ石窟ニ籠リタマフ石コリドメノ命ニ仰ツケアリテ鏡ヲ鑄サシメ玉ヒソノ鏡ヲ五百箇眞賢木ノ枝ニ懸テ祈禱シ玉フ一ヲ云吐ハク玉トハコレモ本文ニ出タル通り日神ト素尊トウケヒノ素尊日神ノ五百箇御統ノ玉ヲコヒ取玉ヲサガミニカミテフキウツルイブキノ狹霧御子ヲ生ジ玉フ一ヲ云或説ニ懸レ鏡吐玉トハ明知聖德ヲ云トナレモ前説ノ如ク其事實ニアテ、ミチバスマスゾ百王相續トハ神代以降帝統連綿ノ百王萬代天業ヲ續玉フヲ云日神岩ヤニ入り玉フ天下明ヲ失フトキ鏡ヲ作り賢木ニカケテ祝詞ヲイタシソノ徳日神岩戸ヲ出玉フテ其明六合ニミチ天位コ、ニ立テ又素尊ノ誓ヒニヨリテ正哉尊御出生アリテ天津日嗣ヲ受玉フソレヨリ今日ニ至リ萬世天位ノ



御相續ナサル、コヲ云ヘリ

喫劍切蛇以萬神蕃息歟スルコトヲ
スルカ

喫劍トハ天照太神素尊ト御誓ノ片素尊ノ十握ノ劍ヲ乞取リタマヒテサカミニカミテ三女神ヲ生シ玉フコヲ云切蛇トハ素尊出雲ノヒノ川上ニテ八岐ノ大蛇ヲキリテ寶劍ヲ得玉フコヲ云コレ前ノ懸鏡吐珠ト云ニ對ニ書タルモノナリ萬神蕃息ストハ萬神ハ八百萬神ト云モ同シク諸神ト云フニテコ、ニテハ神代ノ天下萬民ヲヒロクサストミヘタリ蕃息ストハ蕃ハ息也滋也多也ト字書ニモアリシケルナリ息ハ字書ニモ生長ナリト註セリ素尊ヲロチヲキリ玉フユヘ萬民ソノ害ヲマヌカレテ萬民シゲリホコエテ天下安全萬民繁昌スルコヲ云或說ニコノ所玉ト劍ト鏡トノコヲ云コレ即三種ノ神器ニアヅカル百王相續ハ君道ニカ、リ萬神蕃息ハ天下臣民ヘカ、リ三種ト君臣ノコヲ云トナリ

議安河而平天下論小濱而清國土

安河ニ議リトハコレモ本文ニミヘタル通り天照太神正哉尊ヲ葦原ノ中國ニ降臨ナサシメ玉ハント

テ八百萬神ヲ天ノ安河原ニツドヘテイロト御詮議アリテ大己貴ノ方ヘ勅使等ヲツカハサレテツイニ天下ヲ太平ニナサレタルコヲ云ヘリ小濱ニ論メトハ小濱ハ出雲ノ國伊那佐之小濱ナリ天上ヨリ經都主命武甕槌命ノ二神ヲ大己貴ノ神ヘ討手ニツカハサレ二神出雲ヘ下リコノイナサノ小濱ト云地ニテ大己貴ノ神ト段々問答アリテ遂ニ大己貴降參セラレ邪神ヲ悉ク退治シハライムケ國土ヲキヨメラル、ヲ云

是以番仁岐命初降于高千嶺神倭天皇經歴于秋津島

是ヲ以テトハ上ヲウケテ上ノ句ニ云通り安河ニ議リ玉ヒテ經津主武甕槌ノ二神ヲツカハサレ出雲ノ小濱ニテ大己貴ニ論談アリテ天下平ニ國土清淨ニナリタリコ、ヲ以テ天孫降臨ナリ番仁岐命ハ天照太神ノ御孫ニ、ギノ尊ヲ云天津彥火瓊杵尊ト云ユヘ彥ホノニ、ギノ尊ヲ畧メホニギノ命ト記ス文字ハカナ書テ萬葉ガキニシタモノ也神名ヲ畧メ記スル例古語拾遺ニ彥火火出見尊ヲ畧メ彥火尊ト記シ彥波瀲武鸕鷀尊不合命ヲ畧メ彥瀲尊ト記スコレニ同シミコトモ日本紀ニテハ君道御代々ノ日嗣ニハミコトニ尊ノ字ヲ用其外ニハミナ命ノ字ヲ用然レハコ、モ尊ノ字ノハズナルヲ命ノ字ヲ用ル尊命ノ字ヲ以テ尊卑ヲ分ツハ日本紀ガ初ニテコレヨリ後ノ例トミヘタリ此書ハ尊

ヲ分タズミコトニハ君臣ニ通ノ命ノ字バカリヲ用尊ノ字ヲ用ルハナシ高千嶺トハ竺(マク)紫日向
 高千穂クシフルノダケヲ云降ルトハ大己貴降參ニノ國土平均ニノ天孫ニ、ギノミコト天上ヨリシ
 コノ高千ホノダケヘ初テ降アルヲ云ヘリ番仁岐ノ番ノ字ハト點スル本アレバアシ、ホナリコノ
 書本文ニ日子番能邇々(ヒコホノニ、ギ)藝命ト書セリ神倭天皇トハコレヨリ人皇最初神武天皇ノヲ云日本紀ニハ
 神日本磐(イワ)余彦天皇トアリ前ノニ、ギノ尊ノ如ク畧ノ神倭天皇ト書ケリ天皇ヲスメラミコト、訓
 ズルハ儀制令ノ義解ニ至ニ風俗所稱別不依ニ文字ニ假如皇御孫命及須明樂美御德之類也トア
 リ天子ノヲモ天子ノ天皇皇帝ノト文字ニテハイロノ差別アレバ日本ノ風ニ云トキハスメラミ
 コトノ皇孫命ノト云ヲナリヨツテ日本紀ニモ天皇トカキスメラミコト、ヨメリ秋津島トハ日本ノ
 惣名ヲ云ナレバ神武紀ヲ考ルニ神武天皇國ノ狀ヲ御覽ナサレテ蜻蛉トナメルガ如キト仰ラレテコ
 レカラ始テ秋津嶋ノ號アリトアレバ大和ノ國ノヲ神武帝大和ニ都ヲ定テ皇位ニ即キ玉フソレヨリ
 及ノ秋津洲ノ名日本ノ惣號ニ通セリモトハヤマトノヲトミエタリヤマト、云名モモトハ今ノ大和
 一國ノ名ナレバ神武帝皇都ヲ定玉フヨリ及ノ日本ノ惣ニナレルト同ジ經、歷リトハ神武帝初メハ
 ツクシ日向ニ御座ナサレタレバ東征ノ思召タチアリテ大和ノ國ニ都セント思召ツクシヨリ東ヘヲ
 モムキ玉ヒテソレヨリ今ノヤマト五畿内邊ヲアレコレト御メグリナサレ遂長ス子彦ヲ亡シテ大和

ニ都ヲ定玉ヘリコノヲツマミテ秋津島ニ經歷シトカキタルモノナリ

化熊出爪天劍獲於高倉

(青筆書入) 荷田在滿説ニ出爪ノ爪ノ字穴ノ誤歟化熊出穴トミレハ義通ズル也

コレモ皆神武天皇ノ故事ヲ云化熊出爪トハ此書ノ中卷ニ到ニ熊野村ニ之時大熊髮出入即失トアリコ
(附箋) 春秋照公左氏傳晉韓宣子
 謂鄭子產曰寡君寢疾夢黃
 熊入于寢門是何厲鬼也子
 產曰舜殛鯀于羽山其神化
 爲黃熊三代祀之晉或未之
 祀乎
 神ト云ハ山鬼蛇神ノ類ヲ云毒氣ヲ吐トハ景行紀ニモ神毒氣ヲ吐トミヘタリ瘴癘ノ邪氣人ヲ襲フ
 一ヲ云ナリミナ疫氣ノ類ニシカヤウノ山野ニハ瘴氣ト云ガアルモノナリコ、ノ化熊ト云モ本文并
 神武紀ヲ考ルトキハ瘴氣ノ類カ山ノ邪神魑魅ノ類ヲ云フベシ天劍ト云ハ布都ノ御魂ノ劍ノヲ云
 高倉ハ熊野ノ高倉下ガヲナリ神武帝熊野山中ニテ瘴氣ニアヒ御難義ナサレ天皇ヲハジメ軍卒ミナ
 毒氣ニフレヲヘフシタリソノトキ熊野ノ高倉下ト云人靈夢ヲ蒙リテ則天照太神ノ靈感ヲ得テフ

ノミタマノ劔ヲエテ神武帝ニ奉リタレバ天皇初メ士卒ミナ毒氣ノエヒサメテヲキタルコノ書中
卷神武帝ノ條下ニアリコノヲ以テ文ヲカマヘ序ニカキタモノナリ姓氏録ノ序ニハコノヲ云テ
神劔下授ト記セリ○本文ニ大熊髪トアレバ熊ノカタチノ者アラハレタルカ此書景行ノ記ヲ按ル
ニ足柄山ノ神白鹿トナリテアラハレタルコアリ又イブキ山ノ神白猪ノ化リアラハレタルト云
アレバコレモ熊野ノ邪神熊トナリ出タルモノナラン

生尾遮徑大鳥導於吉野

生尾トハコノ記中卷ニ出タル通りニ神武帝吉野へ行幸ノトキ尾ノ生ル人自井出來リテ神武帝ニ
御目見ヲシタルコアリコノヲ云日本紀姓氏録ニモコノヲ出テアリ尾ノ生シタル人ト本文ニアル
ヲ以テコノ處ニ生尾ト文ニ書タモノナリ遮徑トハ天皇行幸ノ御徑筋へ出迎フヲ云遮ハ字書ニ
モ蔽也要也トアリソノ徑ヲフ意ニヤ本文ニ其出タル井ニ光リアリ名ハ井ビカト云トアレバソ
ノ光リ徑ヲフ、フノ意ニテ遮徑ト書タルニヤ大鳥トハ八咫鳥ノコナリ神武天皇山中ニテ道ニマド
フテマシマストキ天神ノ教ニヨリ八咫鳥出テ神武帝ヲ吉野ノ方へ導キ奉リタルコ此記中卷日本紀
古語拾遺姓氏録等ニクハシクミヘタリコノヲ云姓氏録ノ序ナドニハ此ヲ云テ靈鳥子飛ト

記セリ日本紀ノ所見ハ神武帝ノ御夢ニ天照太神教へタマフテ八咫鳥ヲツカハシ以テ導トセントア
リテ即八咫鳥到リタリ日臣命コノ八咫鳥ノ行ク方ニシタガヒ諸軍勢ヲ導テユキタレバ遂ニ菟田
ノ下縣ニイタリ玉フトアリ日本紀竟宴集ノ歌ニモ磐余彦見ル夢サメテ八咫鳥我トゾ一人道ヲシ
ヘシ葛井宿禰ガ日臣命ヲ得テヨメル哥ナリ

列舞攘賊聞歌伏仇

コレモ神武帝ノコノ書ノ中卷ニ出タリ神武ノ條下ニクハシ又日本紀ニモ出タリ忍坂ノ大室
ニテハ八十建トモヲ饗メカテアイヅヲサダメヲキテミナ哥ヲウタヒ劔ヲスイテ舞フタリ其歌ヲ
アイヅニモノノ歌ヲキクト各劔ヲヌキテ八十建トモヲキリ殺シタルコアリコノヲイヘリコノ書
ニハ弟ウカジ勅リヲウケテ如此ハカラフトアリ日本紀ニハ日臣命ナリトイヘリ此記ノ中卷及神
武紀ヲミルニ忍坂ノムロニテ八十建ヲ誅スルトキ相圖ヲ定メ歌ヲウタフテソノ歌ヲ聞テアタヲ誅
スルコハミユレヒ舞ヲナスコハミエズ按ズルニコレハ久米舞ノ濫觴ナリ貞觀儀式江家次第等ヲ按
スルニ久米舞ニハ劔ヲスイテ舞フコアルユヘコレヲ以テコノコノ序文聞歌ト云ニ對ニ列舞ト書
タルモノナルベシ舞ノ字ハ舞ノ字ト同シ賊ハアタトヨム全體賊ノ字ハ字書ニ食苗節蟲曰賊ト

アリホツク蝨賊ナド云テイナムシノコナリ字書ニ凡偷盜劫殺皆曰賊ト云ヘリ惡トウモノヲイナムシニ比ジヤウノ賊ト云トミヘタリ攘ハラクハ字書ニモ推也攫也除也祛逐也止也卻退也トミヘタリ仇ハ字書ニ音求讎也トアリアタカタキナリ

即チ覺シテ夢ニ而敬マフ神祇ヲ所以稱ニ賢ニ后ト

コレヲ或説ニ前ト同シク神武帝ノコトヲ云神武帝靈夢ヲエテ八咫鳥ノイタルコトヲ云トナリ秀興按ルニ左ニアラズコレヨリハ神武帝ノコトニアラズ第十代崇神天皇ノコトヲ云コノ書中卷ニ出タル通りコノ崇神帝ノ御代ニ天下疫病流行ノ人民多ク亡タリ天皇コレヲ愁ヒ玉フフ甚シトキニ大物主ノ神ノ夢ニ告玉ハク大田々根子ヲ求メテコノ人ヲシテ大物主ノ神ヲ祭ラシメタマハ天下安カラント告タマフユヘニ天皇夢サメテ四方ヘ人ヲ遣シ大田々根子ヲ求メ出テコノ人ニ大物主ノ神ヲ祭ラシメ玉ビケレバ天下ノ疫氣ヲサマリ平ラカニナリ萬人ニギハヒタリソレユヘ萬民コノ天皇ヲホメ奉リタリ后ハ即君ニテ賢后ト云ハ賢君ト云モ同シゾ類書纂要ナドニ元后即天子也トアリコノ文上ノ即ト云ハコノニト云意ニミルヘシ覺夢トハ前ニ云トナリ大物主ノ靈夢ヲ得玉フコトヲ云神祇ヲ敬フトハ夢ノ告ヲ信シテ大田々根子ヲ求メテ祭ラナサシメ玉フコトアリコノ記中卷及日本書紀ノ崇

神紀ヲ按ルニコノ天皇ハスグレテ神祇ヲウヤマヒ萬民ヲナデタマフコト他ニコエタリ故ニ天神地祇共和享而風雨順時百穀用成ナリ家給人足天下大平矣ナリ故稱謂ハクニシラスメラニ御肇國天皇ト崇神紀ニアリソレユヘ賢德ノアルヨキ君トホメ奉ルトナリ○延喜ノ竟宴集ニモ伊勢守十世王コノ天皇ヲ得テヨメル歌ニ田々根子ヲ求メザリセバ夢ニ見シ大物主ノ神アレナマジト云ヘリ

望シテ烟ヲ而撫ナツ黎ニ元ヲ於今傳ニ聖ニ帝ト

コレ十七代仁德天皇ノコトヲ云コノ書下卷ニミヘタリコノ天皇高山ニ登リ玉ヒテ國中ヲ御覽ナサル、ニ烟タ、ズコレ國土貧究マシニノ萬民朝夕ノイトナミモトボシクノ飯ヲカシクマシモ少キユヘ烟タ、ズト思召ソレヨリ三年ノ間天下ノ課役ヲヤメタマフテ萬民ヲメグミタマフソノ後三年ヲ經ケルヘテ後ニ國中ヲ御覽ナサル、ニ國中ニ烟ミチテ人民富タリソレヨリ百姓ニ課役ヲ科セタマフニ百姓榮ヘタルト云ヘリコノ故事ヲ以テ前ノ崇神帝ト對シ書タモノナリ烟ハケブリノ訓義契沖ノ説ニ氣振ケガレノ意振ケガレハ起ルナリトイヘリ望トハ天皇高山ニノボリ國中ヲハルカニノゾミミンナハスコトヲイヘリ黎元トハ天下萬民ノコトヲ云司馬長卿封禪文ニ以浸ウルホス黎元ヲ註濟曰黎元百姓也トアリ又文廷第二十ノ詩ニ哀フク此黎元無罪無辜註善曰孝經鉤命決曰天有二顧眄之義受ク圖于黎元ニ孔安國尚書傳曰黎

衆也高誘戰國策註曰元元善也トアリ撫育ノヲニノ萬民ヲナデヤシナヒ玉フナリ傳ニ聖帝トハコノ書下卷仁德ノ卷ニ故ニ稱ニ其御世ニ謂ニ聖帝也トアリマヘノ賢后ニ對ノ聖帝トカケリ元慶竟宴集ニ皇太后宮大夫藤原國經ノ歌ニ烟ナキ宿ヲメグミシスメラコソ八十トセアマリ國シラシケレ又延喜竟宴ニ藤原時平ノ歌ニ高ドノニノボリテミレバ天ノ下ヨモニケブリテ今ゾトミスルトコレミナコノ天皇ヲ得テヨメル歌ナリ

定境開邦制于近淡海

コレハ十三代成務天皇ノ故事ヲ云コノ書中卷成務ノ記ニ定賜大國小國之國造亦定賜國之堺及大縣小縣之縣主也トアリコノヲイヘリ諸國ノ境ヲ分チコレヨリコレマデハ何レノ國ト定メソノ國々ヲ開キ初テ國造縣主等ヲ定メ玉ヘリ近淡海トハ此天皇ハ淡海ニ都ナシ玉フユヘ也淡海志賀高穴穗宮ト云淡海ハ今ノ近江ナリ昔ハ淡海ト書ケリ後ニ文字ヲ改メテ近江ト書ク淡海ハアハウミナルヲ波宇切布ナレバアフミトツ、メタリコレ近江ノ湖水ニヨレリコレ鹽海ナラチバアハシキ海ト云意ナルベシ近淡海トハ和名抄ニ近江ヲチカツアフミトアリコレ近ツアフミトハ遠淡海ニ對ノ近ツト云コレ大和ノ國ヨリ指ノ遠近ナリ遠淡海ハ今ノ遠江ナリ遠州モ猪鼻ノ

湖アルヲ以テ淡海ト云ヘリ今ハ近江ヲチカキヲ畧メタマアフミトノミイフ遠江ノ名既ニ遠シエラヒタレバ近シトイハチドマギレヌユヘナリコノ天皇近江ノ宮テ國縣ノ境ヲタテ國造縣主ヲ任ジ玉フヲ制シ玉フト云フノ意ニテ制于近淡海ト書ケリコノ成務天皇ハ十三代前ノ仁德天皇ハ十七代ノ帝ナレバ仁德帝ヨリ前ニコノ成務帝ヲ云ベキナリコノ次第チガフガトシコレハ序ユヘ文章ヲナスタメニ對ヲトルタメ前ノ仁德ト崇神ト賢后聖帝ト對ニシ又コノ處モ近淡海トコノ次ノ遠キアスカト云ト對ニトルベキタメニ成務帝ヨリ仁德帝ヲ先ヘ書タモノ也

正姓撰氏勒于遠飛鳥

コレハ二十代允恭天皇ノヲ云コノ書下卷允恭ノ記ニ天皇愁天下氏々各各人等之氏姓忤過而於味白禱之言八十禍津日前居玖訶瓮定賜天下之八十友緒氏姓也トアリコノヲ云遠飛鳥トハコノ天皇ノ宮ノ地名也遠飛鳥宮ト云大和ノ國ノアスカト云ヘルトコロ也遠キアスカト名ツグルユヘハコノ書下卷履中ノ記ノ處ニ出タリ日本紀允恭紀ヲ按ルニコノ時ニ至リ京官ソノ外諸國ノモノモ何ノ天皇ノ末何レノ神ノ裔ト云立テコトノ外姓氏ミダリカハシキナリ年久シクヘダチタルヲニテ何モ證據モナク其虛實ワカチガタキユヘソレユヘニ諸氏ノ人モアツメ

クガダチヲシテ神ニチカヒソノ虚實ヲサダメ玉ヘリクガダチトハ後世ノ湯起請ト云ノニテ湯ヲ沸シテソノ中ヘ手ヲ入レサグル也實ナルモノハサ、ハリナク虚偽ヲイフモノハ手焼タル、ナリコノ天皇ノ盟、神探湯ニヨツテ天下ノ姓氏アキラカニナリタリユヘニ竟宴集ニモ式部卿是忠ノ得允恭天皇テヨメル歌ニモ甘樫ノ丘ノクガダチ清ケレバ濁レル民モ姓スマシキトアリ姓氏録ノ序ニモ允恭御宇萬姓紛紜時下詔旨盟神探湯首實者全冒虚者害自茲氏姓自定更無詐人ト云ヘリ姓ノウタガハシキヲ正シ氏ノマジレルヲ撰ミテ分明ニシタマフ遠飛鳥ニ勒ストハ勒ハ字書ニ勒ハ歴徳切馬鑣銜也銜曰勒無銜曰羈一曰刊也又抑也刻也トアリ刊也ト註ニヨリテタバスナリ遠飛鳥ノ朝ニテタバシ玉フト云フゾ○姓氏ノコハ別ニ考アルコナリ和訓ニウジカバ子ト云ウジトカバ子ト云ト二通りアリタトヘバ源朝臣ト云源ハウジ朝臣ハカバ子ナリ齊部宿禰ト云齊部ハウジ宿禰ハカバ子ナリ鴨縣主ト云鴨ハウジ縣主ハカバ子ナリ本朝ノ人ニハコノウジカバ子ノ二通りアルゾ日本紀ニハ姓ノ一字ヲ以テカバ子ト訓ズ又姓氏ノ二字ヲヒキアハセカバ子トモヨメリ又姓氏録ノ序ニハ氏骨ノ二字ヲ以テカバ子ト訓セリ後世又尸ノ字ヲカバ子トヨム○氏ヲウジトヨムシカレバ源ノ忌部ノ鴨ト云ハ皆氏ナリ朝臣ノ宿禰ト云ハ姓ナリ日本紀ノ所見ミナ如此ニミヘタリ然ルニ拾芥抄ニハ姓尸トカキテウジカバ子ノトシ藤原ノ源ノ

齊部ト云ヲ姓トシ眞人朝臣宿禰ト云ヲ尸トセリ是ハ後世ノコニ尸ノ字ヲカバ子トヨム訓同キユヘニ用ユトミヘタリ字書ニモ尸與屍同ジトアリカバ子トヨム字ナリ尸ヲカバ子ニ用イ姓ヲウジニ用テ拾芥抄ニ姓尸ト記サレタル也右ハカバ子ニ皆姓ノ字ヲ用タル也○壺井氏ノ説ニカバ子ト云和訓ハ皮骨ト云ノ轉語也諸ノ種姓ノ和訓ウジト云ハスジト云コレ人ノ身體ニヨレバ筋ハ皮骨ノ間ニアリ古ヘ諸ノ種姓參錯紛亂シテ貴賤ノ序ヲミダル故ニ氏骨ノ甲乙ヲ定玉ヒテ種姓ノ尊卑ヲ分テ各甲乙ノ氏骨ノ器ニ分テ入テ其程等ヲ定玉フ是ヲ氏骨ト云朝臣宿禰連ノ類ナリ往古允恭天皇ノ御時鬪雞ノ造ト云者罪アリテ是ヲ下等ノ氏骨ニ下シ入テ鬪雞稻置トナシ玉フ例アリ又天武天皇ノ御宇ニハ色ノ姓ヲ制メ萬民ヲ八等ニ括メ尊卑ヲ分テ玉ヘリ後世氏骨ヲ増加シ二十四等ニ分ツ拾芥抄ニ詳ナリト云云日本ノ姓氏ノコアナタノ例ヲ以テアハヌゾ漢土ノ例ニカ、ハリガタシ天子ヨリクダサレタルデナケレバウジニアラズウジニハ必カバ子アリ○姓ノ字義ハ説文ニ姓人所生也春秋傳天子因生以賜姓白虎通姓生人所稟以生也字彙ニ息正切音性姓氏左傳註以此爲祖父之相生雖三百世此姓不改族屬也與其子孫共相聯屬其旁支別屬則各自爲氏史記註天子賜姓命氏諸侯命族族氏之別名也姓者所下以統繫百世使不相別也氏者所以別子孫之所出故世本言姓則在上言氏則在下也

○氏上旨切音是姓氏左傳因生賜姓ムクヒテ昨ムクヒテ士命シノメ氏正義シノメ猶家也釋例別而稱スレハ之曰テ氏合テ而言ハ之曰族周語賜姓曰妣ト氏曰有夏ト註堯賜禹姓曰妣ト封ト之於夏ト又氏曰有呂ト註以國爲氏

雖トモ步トモ驟各異文質不同トモ莫トモ不稽古トモ以繩風猷於既頽トモ照今以補典教於欲絕トモ

多田氏ノ説ニ步驟ハ前蹤ヲ云風猷ハ政ヲ云トナリ

前ノ段マデニ神代ヨリ允恭天皇マデノ故事ヲアゲテ云フコレヨリ上ノ一ヲウケテ云步驟トハ歩ハ字一書ニ歩ハ徐ユルヤカニユク行也トアリ驟ハ字書ニモ馬疾トク行也歩ハユルヤカニユク一驟ハインギユク一ナリ驟ノ字ヲハシル、ノ、カケル、ノ、トモヨメリ淮南子ニ縱志舒節以馳大區ニ可以步ム而步ム可以驟ス而驟トアリ○白虎通ニ三皇步五帝驟三王馳ハトフ五霸ニ騫ト云コレソノ時代ノ一ニテモノカハルヲ

(附箋)

○文迂四十九晉紀論晉武

帝革命 千會升

○文質異時興建不同註

ニ善曰春秋元命苞曰王者

一質一文據天地之道

天質而地文也

○尙書大傳曰文質再而復

云文一質ハ文トハ物ノアヤモヤウノアル一ヲ質トハモノカザリナキノマ、ノ一ヲ云文質ノ字ハ論語ニモ出テアルナリ各異ノ不同トハ步驟文一質ソノ時代ニヨリテ一同ニナク各異ナルゾ或ハ文ナル時モアリ質ナ時代モアリ或ハ歩ノ時モアリ又驟ノ時モアルナリコレ古今時代ノ一同ニナクソノサマカハルト雖ト云一ヲ如レ此文章ニ書タルモノナリ延喜格ノ序ナドニモ於ハク是朴キテウ往彫リ來步ツキ盡驟ル至ルトアルモコ、ラノ意ト同シク時代ノ一ニヨリ

濟曰言帝王之興或以文或以質其位不同也

古今モノ、一ヤウニナキ風義カハル一ヲ云ヘリ時代ノ一ニヨリ古今風儀不同ナリトイヘモト云一也稽古トハ書經ノ字ナリ稽ハ字書ニモ考也計校也

トアリ古代ノ一ヲカンガヘハカルナリ風猷トハ文迂三十八爲ニ范始興カ作求ツク立ツク太宰碑表任彦昇夫存樹レ風猷レ沒レ著ニ徽烈ヲ註向曰猷道トアリ風トハ風教ナリ毛詩序風教也トアリヲシユルト云

一既ニ頽クツレタル

ニタバシトハソノ王者ノ民ヲ教道スルトコロ時ウツリ代カハルニシタガヒ衰ヘテ教道

ノクヅレタルヲ古ヲ考ヘテソノ道ノクヅレタルヲタバシ玉フト云一ナリ繩ハ増韻ニ彈治也マツ云

ヘリタバシヲサムルナリ照レ今トハ上ノ稽古ト云ニ對シテ云ナリ今トハイツニテソノサシアタル

トキノ當世ヲ云古ノ法ヲヨクカンガヘ又今日當時ノ風ヲテラシアハセカンガフルゾ典教トハ唐

韓愈詩ニ周公所不堪酒灰垂典教ト云云典ハ字書ニモ主也經也常也法也教ハ説文上所施下所教也廣

韻訓也又法也論也授也トアリ典教トハ我國先王ノ教ヘノリヲ云ヘリ先王ヨリ教化法則ノ絶ント

スルヲ補フトナリコノ一段ハ前ニダンノト神代ヨリシテ神武天皇以下代々ノ天皇ノ御功業ヲ一

ツアゲテ扱古今時代ノカハリメハ或ハ文ナ時モアリ或ハ質ナ時モアリ或ハ歩或ハ驟トソノ時代ノ

風俗カハレズイツノ代ニテモ天皇ノナサレカタ古代ヲ考ヘテ教道ノクヅレタルヲタバシヲサメテ

又ソノ今ヲテラシミテ典教ノタエントスルヲ補ヒタマハヌト云一ハナシト云一ソレハ上ニ云國郡

ヲ定メ姓氏ヲ撰ミ或ハ崇神仁德ノ仁政ヲ以テ天下ノヲサメカタミナ右ノ意ナリ上ニ段々云テヲキソレヲウケク、ツテ云フナリ

暨飛鳥清原大宮御大八洲天皇御世

コレヨリ天武帝ノコトヲ云天武ハ四十代ノ帝也右ニ云通り神武帝ヨリ代々四十代ヲヘテ天武天皇ノ御世ニ及デト云フゾ暨ハ字書ニモ奇寄切音忌及也トアリヲヨブナリ飛鳥清原宮トハ天武天皇ノ宮ノ名ナリ大和國高市郡ナリ清原ヲ日本紀ニ淨御原ト書クコ、ハ序文ユヘニ文章ノ對ユヘ清原ト二字ニツ、メテカケリ天武紀二年二月丁巳癸未天皇命有司設壇場即帝位於飛鳥淨御原宮トアリ大八洲トハ日本ノ古名ニ後世マテモコノ古名ヲ存ス公式令ノ詔書式ヲ按ルニ明神ノ御大八洲天皇詔旨ト云云義解用ニ於朝廷大事之辭トアリ神代ノ故實ヲ存シテ後世トテモ朝廷ノ大事ニハ神代古名ヲ用ルナリ今日ニ至リテナヲコノ故實ヲ以テ立后立太子ノ宣命ヲミレバ大八洲シロシメスノコトバアリ御昇壇記ト云ヘルモノニ見ヘタリ御ハ統御ノ意ニテ大八洲ヲ統御シ玉フト云フ大宮トハ朝廷ト云モコ、ラニテハ同ジフゾアスカノ清ミハラノ大宮ニ御座ナサレテ大八洲日本國中ヲ統理シ玉フ天皇ト云フナリ天皇ハスメラミコト、訓スマヘニ云ガ如

シ

潛龍體元海雷應期

(書入) 古板海ヲ游ノ字ニ作ル疑ラクハ海ノ字ノアヤマリナラン

コレヨリミナ天武天皇ノ故事ヲ云潛龍ハ易ノ字ナリ乾ノ卦爻ノ辭ニ初九潛龍勿用トアリ潛ハ藏也深也ニテヒソマルトヨム龍ノ地中ニカクレ伏ノ居ルヲ潛龍ト云惣テ天子ヲ龍ニタトヘテ龍顔ノ又ハ逆鱗ノト云故ニ天子ノ末ダ位ニ即キ玉ハズ時ヲ得ズヒソマリテ御座ルトキヲ龍潛ノ日ナド、云天皇ナラビニ皇太子ナドノ位ヲ廢メヒソマリ居玉フヲモ云トカク王者ノヒソマリカクレテキルヲ云後漢順帝紀令陛下龍潛蕃國註從太子廢爲王故曰龍潛蕃國トアリ元ヲ體シトハ公羊傳ニ人君體元居正云云又春秋隱公胡傳ニ體元者人君之體也トアリ文遷東都賦體元立制繼天作註善曰左傳曰元年春正月公即位春秋元命苞曰元年者何宜爲一謂之元何曰君之始元也杜預左氏傳註曰凡人君即位欲其體元以居正トミエタリヒツケウ御即位ノコトヲ體元ト云タルモノナリコレハ天武天皇ヲサシテ云タルモノ也天智帝ノ弟タリ天智元年ニコノ天武天皇立テ東宮トナリ玉フ然レモ故アツテ位ヲ廢シ出家シテ身退キ玉フユヘニ潛龍ト云ソノ後段々子細アツテ天武帝軍ヲ起シ大友ヲ亡シテ位ニツキ玉フユヘ體元ト云タモノゾ海雷トハ易震卦ノ下象海雷震君子以

恐懼脩省ト云リ説卦傳震爲雷爲長子ト云云 按皇太子ヲ以テ洵雷トスコレモ又天武帝ヲサスナ
 リ續日本後紀第一仁明天皇太子タリシトキノ上表ノ文ニモ久辱洵雷トアリ應期トハコレ洵
 雷ト云ヨリ以テ上ノ體元ト云ニ對ソイヘリソノ時ニアヒ玉フ皇太子帝位ニツキタマフヲ云ソ
 ノ期ニ相應ジ時ニアヒカナヒテ即位得玉フヲ云ヘリ ○或説ニ洵字古本作遊字或作遊字爲是遊雷
 者雷鳴廻四方也遊雷又隨其時節動言天人合應也然レ洵字ヲヨシトス遊ハアヤマリナリ ○或説
 ニ潛龍ハ天子ノ體元德雷ノ震フ應ニ時宜天地ノ和太平ヲ云トナリ ○或説ニ元ヲ體シトハ天ノ
 元氣初陽新生勢也體元一體ナリト云リ

開夢歌而想纂業投夜水而知承基

コレモミナ天武天皇ノ故事ヲ云ヘリコノ夢歌夜水ノコトモ天武帝ノ故事トヲボサルレモコノ日本
 紀ニ無所見ニ其外ノ書ニモ未タ所見ナシ故ニソノコトサトシガタシ博聞ノ君子ヲ待テ解スベシ開ノ
 字ヲ延佳カ説ニ疑ラクハ聞之誤ナランカト云ヘリ古板ノ本モ開ニ作ル纂業ハ纂ハツグト云字ニテ
 業ヲツグト云フ業トハ帝業ナリ帝業ヲツクバコレモ御位ヲツギタマフヲ云文迂東京賦ニ況纂ニ
 帝業ニ而輕ニ天位ニ註綜曰纂繼也トアリ後漢書章帝紀纂ニ承尊明ニ註纂繼也アマツヒツギト訓ノヨ

シ日本紀顯宗紀ニモ纂大業トアリ承基ハ基ヲウクルト云フニテ基ハ文迂ノ註ニモ基ハ本也トミ
 ヘタリ文迂三國名臣序讚歴世承基又西京賦繼體承基トアリ又文迂四十九晉紀總論世宗承基
 太祖繼業註翰曰繼業謂相繼以成帝業也承基ハ上ノ纂業ニ對シ書文ヲタガヒニシタルモノ基ヲウ
 ケルトハ御位ヲウケタマフト云フニテマヘノ業ヲツギト云ト同シ意也右ニ云通りコノコト所見ナキ
 ヲ何レモ解シカタシ契沖ナドモコノ故事所見ナキヨシヲイヘリ今書面ニ付テ暗推スルニ天武帝
 夢ニ哥ニテモキ、タマフコトアリテ御自身ノ御即位アルベキコトヲ思召シ又夜中ニ水邊ナドニテ何ゾ
 ウラナヒビニテモナシ玉フテ寶祚ヲ得玉ベキコトヲ知シタルコトアリタルトミヘタリソノ故事所見ナ
 キユヘ如何トモスルコトナシ

○夢歌 風水翁曰天武天皇崩後八年九月日御齋會ノ夜奉仕人夢想トノ御製ヲ賜リシ哥一首萬
 葉集第二六六丁ニ見ヘタリ契沖ノ説ニ夢中ノ御歌ユヘ心得ガタキ文句ナレモ大概ヲ考レバ王子達ヲ
 大切ニ思召ストノコト也伊勢ニマシマス王子ハアリケルニヤ天皇崩之後八年九月九日奉爲御齋會之
 夜夢衷習 賜御歌一首明日香能清御原乃宮爾天下所知食手之八隅知之吾大王高照日皇子何方爾
 所念食可神風乃伊勢國者與津藻毛靡足波爾鹽氣能味香乎禮流國爾味凝文爾乏寸高照日御子
 ○又或説ニ懷風藻ノ大友皇子ノ傳ニ大友靈夢ノコトアリコレヲ考ヘ合スベキナドイヘリコレヲ

ノ説可否未シラズ

然天時未臻蟬蛻於南山入事共給虎歩於東國「伊賀伊勢美濃等國」

右ノ如ク天位ニ即キ玉フベキ御身ナレド未ダ天ノ時至ラズシテ直ニ即位シ玉フヲ得玉ハズ臻ハ漢書相如傳ノ註ニモ師古曰臻至也トアリテ至ルナリ南山ト云ハ吉野山ノコトヲ云蟬蛻トハ蟬ノカラノヌケテ出タル如クニ南山ヲモヌケ出玉フト云フゾ蟬蛻ノ字ハ楚辭曰濟江海今蟬蛻淮南子曰蟬飲而不食三十日而蛻又韋昭曰蟬蛻出於皮殼也文撰四十七漢高祖功臣頌視幾蟬蛻註濟曰如蟬蛻去其殼又文迂ノ註ニ如蟬之脱身トモアリ日本紀天智紀天武紀ヲ按ルニ天武天皇ニハ天智天皇ノ元年ニ既ニ東宮ニ立セ玉ヘリ其後天智天皇御不豫ニツキ東宮ヲ召テ御讓位ナサレント仰アリ時ニ天武天皇ノ仰ニ御自身ニハ御多病ニテ天下ヲシロシメスナリガタシ御位讓リノコトハ大友皇子ニシ玉ヘ御自身ニハ出家遁世ノ志アリト仰テ御位ノコトヲ固ク辭シ玉ヒテ剃髮ナサレ法服ヲ着テ吉野山ニ入セ玉ヘリコレ天智帝天武帝ヲ儲君トナサレタレモソノ後思召アリテ皇子大友ヘ御位ヲ御ユヅリナサレタキ思召アリテイロノ隱セル御謀トウアリタリトミヘタリ天武帝其趣ヲ知シメシタルユヘニ御讓位ノコトヲ固ク辭シテ出家ナサレ吉野山ニ入りテ御座ナサレタリソノ後天智帝

崩御アリタリ大友皇子ヨリ天武帝ヲ害セントスル謀アルコトヲキコシメシテ天武帝ヒソカニ吉野山ヌケ出玉フコトアリコレヲ蟬蛻於南山ト云ヘリ人事共給トハ人事トハ天ノ時ト云ニ對ノ書クソノコロノ諸臣天武帝ノ御味方ヲ申シサマノト大友ガタノ謀ヲ告知セ奉リ道路ヲマモリテ天皇ヲ吉野山ヌケ出シメ玉ヒソレヨリ東國ヘヲモムキ玉ヘリ東國トハ天皇伊勢ノ國マデ至リ玉ヒソレヨリ大友ト對陣ニナリ合戦ニナリタリ共給トハ國語ニ周語事之共給於是乎在リ韋昭カ註ニ共具也給足也トアリ共給ノ給ノ字古本ニハ洽ノ字ニ作リアマ子ウシトヨメリ給ノ字ヨロシ虎歩トハ文迂等ニ多キ字ナリ文迂五十三辨亡論ニ虎歩ニ原濕トアリ註ニ向日虎歩言猛トアリ惣シテ軍卒ノコトヲ虎ニタトヘテ虎賁ナドモ云ヘリソノ勇猛ヲ云タルモノナリ

皇輿忽駕凌渡山川六師雷震三軍電逝「二千五百人爲一師」
「一萬二千五百人爲一軍」

皇輿ハ天子ノ御車ナリ文選ノ註ニモ濟曰皇輿帝車也トアリ忽駕シトハ駕ハ字書ニモ天子行曰駕トアリスミヤカニ行幸アルコトヲ云フ天武帝吉野ノ宮ヲ出御アツテ山ヲコエ川ヲワタリ道スカラ嶮阻艱難ヲシノギテタチマチ東國ヘ行幸アルコトヲ云山川ノ山ノ字古本ノ本ニ脱セリ補入ベシ六師トハ六軍ナリ文迂四十四檄ニ吳將校部曲文陳孔璋萬里肅齊六師無事註翰曰六師六軍也

天子之兵也雷震トハ官軍ノ多勢スサマジキ勢ヒヲ云 文廷第四南都賦ニ車雷震而風厲トアリ
 註ニ善曰雷震言多也風厲言疾也○翰曰雷震風厲驅車之聲毛詩曰戎車焯々如霆如雷詩傳
 曰雷出地奮震驚百里云々三軍トハ六師ニ對ノ云天子ヲ六軍トシ諸候ノ軍ヲ三軍トス三軍ト云
 ニハ人數積リアリ又上軍中軍下軍ノ備ダテ等ノアレビコ、ラニテ三軍ト云ハソレニハカ、ワラ
 ズ三軍ト云テ惣軍ノヲ云ゾ電逝トハ三軍ノトクス、ムヲ電光ノトキ如シトナリ文廷三十
 四卷七啓八首ノ詩ノ中ニ飛軒雷逝トアリ註翰曰飛軒軼車也雷逝言疾也トアリコレ官軍ノ威
 勢ノ強キヲカヤウニ文章ニ書タモノナリ

杖矛舉威猛士烟起絳旗耀兵凶徒瓦解

漢書註師古曰兵凡兵器也

コレミナ官軍ノ勢ヒノ強キヲ云杖矛ハ杖ハ漢書ノ師古カ註持ナリトアリ杖矛ノ字漢書酈食其傳沛
 公雪足杖矛トアリ矛ハホコナレバ官ノ持トコロノホコナリ官軍各ノ劔戟ヲタツサヘ持ツトコロノ
 武器ニ威勢ヲ舉ルト云フ也猛士ハタケキサムライニテ軍兵ドモノヲナリ金鉄ノ軍兵ドモイサミス
 、ミ爰カシコヨリ煙ノ如クハセアツマリ天武帝ヲタスケ奉ルト云フゾ文廷五十三ノ卷ナドニ猛
 士如林ナド、凡アリ絳旗ハアカハタナリ文廷五十六ノ卷玄甲耀日朱旗絳天註ニ濟曰絳赤色

耀日絳天トハ言ニ其盛也トアリ耀兵トハ兵器武器ソノ武威盛ニカ、ヤクトコロヲカヤ
 ウニ文章ニ書ケリ凶徒トハ朝敵ノヲ爰ニテハ大友皇子ノ軍ヲサス大友カタノ軍卒瓦ノトクル如ク
 ニ敗北シタルト云フゾ瓦解トハ史記秦始皇本紀ニ天下土崩瓦解正義曰言秦ノ國敗壞若ニ屋ノ
 崩頽衆瓦解散也トアリ

未移浹辰氣弥自清乃放牛息馬愷悌歸於華夏卷旌戢戈儻詠停於都邑

浹辰トハシバラクト云フシバラクモ間モウツサズ靜謐ニナリタト云フ浹辰ハ左傳ニ出タル字ニテ
 左傳曰君子曰莒特其陋不修其城郭浹辰之間而楚克其三都註ニ杜預曰浹辰十一日也
 文廷註濟曰浹及辰時也自甲及癸爲一時又左傳註ニ自子至亥十二日也トアリ又文廷五十三
 弁亡論軍未浹辰而社稷夷矣註翰曰浹辰十二日也云云不經二十日而吳之社稷已滅云云
 氣弥トハ弥ハ字書ニ彌ニ同シトアリ彌ノ字ニテシカトスミガタシ延佳ノ考ニ弥ハ沱ノ字ノ誤カト
 アリコノ説ヨシ沱ハ字書ニ徒典切田上聲陰陽之氣亂トアリ兵革ノ災ニテ天下サウドウシ陰陽ノ氣
 マデ亂タルヲ天皇軍御利運ニテ凶徒忽ニ亡ビ浹辰モヘザル少シ間ニ陰陽ノ乱レタ氣マデ自ラ清ク
 ナリタルト云フ放牛息馬トハ周ノ武王ノ古事軍ヲサマリテ天下ノ平ナルサマヲ云書經ノ武成ニ

歸馬于華山之陽。放牛于桃林之野。示天下弗服。蔡註：武王勝商渡河而西馬散之華山之陽。弗復服。牛放之桃林之野。而弗復服。車甲。而藏之府庫。倒載干戈。包以虎皮。天下知武王之不復用兵也。トアリ軍治リテ天下大平ニナリテモハヤ軍用ハイラスユヘニ軍卒ノ乘リシ馬モハナチャリ兵糧等ヲ運ヒシ牛モヤスメルト云フカヤウ古事ヲ以テカキタモノゾ愷悌ハイクサトケテトヨムモト詩經ノ文字ニテ詩經ニ愷悌君子人父母トアリ豈弟ト同シ注豈樂也弟易也トアリ又愷悌軍勝之樂也ナド字書ニモ見ユコレニテヨクキコヘタリ後世ニテ云ヘハ軍ニ打勝勝ドキヲアケ各イサミ悦ウタヒマフサマヲ云華夏トハ都ノゾ文迂ノ註ナドニモ華夏ハ中國也トモアリ又天子所居曰華夏。トアリ都ノゾ云ゾ天武帝大友ヲ亡シテ都ヘ歸リ玉フト云フナリ卷旌戰戈トハ上ノ放牛息馬ト云ニ對シ書ク官軍勝利ヲ得テ旗ノ手ヲ卷キ干戈ヲ納メテメダク歸陣ノ體ナリマコトニ弓ハ袋ニ劍ハサヤニヲサマリテメタキ御代ニナリタルト云フゾ戰戈トハ毛詩ニ載戰干戈トアリ都邑ハコレヲ二字ニテミヤコノゾ周禮ナドニ四縣爲都四井爲邑トアリ左傳ニ凡有宗廟先君之主曰都無曰邑ナド云フモアレドコ、ラニテ二字ニテミヤコノゾト心得テヨシミヤコニカヘリト、マルゾ停ハ字書ニ唐丁切音廷止也息也トアリ官軍都ニト、マリ定リテ天下大平ニナリタルト云フナリ

歲次大梁月踵夾鍾清原大宮昇即天位

文迂東都賦ノ註天位帝位也

歲次大梁トハ酉ノ年ノゾ月踵夾鍾トハ二月ノゾ也歲トハ歲星ノゾ也ソノ歲星ノメグリニテ十ニ支ニソレノ名アリ大梁ト云ハ酉ナリ歲星ノメグリニヨツテトシテ定ルユヘ歲ヲホシトシトモヨムゾ加茂保憲ガ作ノ曆林問答ニ酉曰大梁梁強也言白露降萬物堅強也故曰大梁云々又曰大歲者歲星之精降天地之間觀察萬物臨見八方故名歲之君慎之者保逆之者亡巡行於十ニ支也子歲ハ在正北丑歲在丑餘方皆爾十有二年運終而復始其方主歲故爲一年之君トアリコノ歲星ノアリトコロノ方ニヨリテノゾナリ夾鍾ハ二月ノ律ノ名ナリ十二月各律アリ二月ノ律ヲ夾鍾ト云律曆志曰言陰夾助太簇宣四方之氣而出三種物也位於印在二月ト云云酉年二月ト云フ如此カケリコレ文章ユヘナリ文迂五十六石闕銘歲次天紀月旅太簇トアリ註ニ天紀星紀也又左氏傳梓慎曰歲在星紀而淫於玄枵註杜豫曰歲星也斗牛之次也トアリ天武二年癸酉二月ナリ清原大宮トハ天武帝ノ内裏ナリ天武紀上ニ元年九月癸卯自嶋宮移崗本宮是歲營宮室於崗本宮南即冬遷以居焉是謂飛鳥淨御原宮トアリ昇即天位トハ天武帝御即位ノゾ也日本紀廿九下天武紀二年二月丁巳朔癸未天皇命有司設壇場即帝位於飛鳥淨御原宮云云天武元年

申ノ歳ニキヨミバラ内裏出来シテ翌年二月コノ宮ニテ御即位行レタリ

道軼軒后德跨周王

(書入) 周王一説文王武王ヲカチテ云又説文王ヲサス
武王殷ヲ伐ツノ本朝不取所也故ニ文王ヲサスト云

コレヨリハ天武天皇ヲホメ奉リテ云道德ノ二字ヲワリテ對ニトリタモノナリ軒后トハ黄帝ノ一ナ
リ史記五帝本紀ニ黄帝者少典之子姓公孫名曰軒轅トアリ后ハ君ト云フゾ黄帝蚩尤ヲ亡シ天下
ヲ治メ萬民ヲ撫デ玉フソノ道大ナリ天武帝天下ヲ治メ萬民ヲ安ンジ玉フ政黄帝ニモスギ玉フト云
フ一軼ハ字書ニ杜結切音經過也トアリスギルナリ周王トハ周ノ武王ヲサス武王殷ノ慕惡ヲ伐亡
シ天下ヲ安シ萬民ノ苦シミヲタスケ玉フソノ德スグレタリ天武帝ノ德義武王ニモコヘ玉フト云フ
一ゾ跨ハ字書ニ苦化切越也トアリ

握乾符而惣六合

(書入) 十八史略曰我大祖聖武皇帝握乾符而起朔土云云

以下皆天武帝ヲホメ奉リテ云ヘリ乾符トハ三種神器ヲ帶シ玉フ一ヲ云フトイヘモコレ闡推ノ言ナ
リ乾符ヲ握ルトハコレ後漢ノ光武ノ故事ヲ以テ天武帝ヲ光武ニ比シテ云フ文選東都賦ニ聖皇乃
握乾符闡坤珍註ニ濟曰握持也乾符赤伏符也トアリ赤伏符トハ歴史綱鑑ノ後漢光武ノ篇ニ

建武元年自闕中奉赤伏符來詣王註ニ識記之書曰符赤伏其符之名漢德尙火赤火色伏藏
也トアリコレニテヨクキコヘタリコノ一後漢書光武本紀ニ委シクアリ光武天下ヲ治メ玉フトキニ
關中ヨリ符ヲホリ出シテ奉ルソノ符ノ文ヲ見テ天命ヲサトシ光武即位セラル、一ナリコレヲ以テ
天武帝ニタトフ天武ノトキ如此符命アリタルニハアラズコレハ文帝ニテ天位ニツキ玉フベキ天命
ヲウケ玉フト云フ一光武ニ比シテ如此六合ヲスベトハコレ天下ヲ統御シ玉フ一ヲ云フ六合トハ呂
氏春秋ニ神通乎六合註高誘曰四方上下爲六合ニヘタリ

得天統包八荒

(附箋)
秀根按

漢書高帝紀讀曰自然之應得(天統)矣
註孟康曰十一月天統物萌色赤故云得
天統也臣瓚曰漢承堯緒爲火德
秦承周後以火代木得天之統序
故曰得天統師古曰瓚說得之
天武帝天ノ統序ヲ得テ天下ヲ保ツ

天統トハ天胤正統ノ一天武帝天位ニツキ皇統ヲ得サセラレタル
ト云フ一八荒ト云ハ八方ノ蠻夷ノ一ヲ云海内ハ云ニ不及八方ノハ
テノ一ノ夷マデカチスベテ王化ニ皈シ治メ玉フト云フ一ゾ八荒ノ
文字ハ淮南子曰四海之外有八澤八澤之外曰八挺八挺之外
曰八荒云云文選魏都賦以睦八荒之俗一ナドミヘタリソノ外
數多アル文字ニテ荒遠也ナド云註アリ八荒八方也ナド云註モア

ヲ得タマフト云フゾ

リテ八方ノ夷國ノ一ヲ云ヘリ或ハ四荒ナド

四荒之外不安其生註師古曰戎狄荒服故曰四荒言其荒忽去來無常也トアリコレニテヨクキコヘタリ

乘二氣之正齊五行之序

コレミナ天武帝ノ御德義ヲホメ奉リテ云天下太平ニ治リ造化マデ順ニナルト云一造化ニ法リテ政ヲナシ玉フゾ二氣トハ陰陽ノ二氣ナリ五行トハ水火木金土ノ五行ナリ天皇位ニツカセラレ能天下ヲ治メ玉フユヘニ天地陰陽ノ氣モ正シクナリテ寒暑時ニ順タガヒ不正ノ氣ノヲコナハレズ五行ノ次第モト、ノヒ天地造化ノ序モヨクソロツタト云一コレモト天皇ノ御德義ニ化シテノ一ユヘ二氣ノ正シキニ乘シ玉ヒ五行ノ序ヲト、ノヘト云天皇ノ御身ヨリ陰陽五行ヲト、ノヘタマフト云一コレミナ天武帝ヲホメテノ文章ナリ

設神理以弊俗敷英風以弘國

コレ皆天武帝ノ一ヲホメ奉ル文章ナリ設神理トハ文選曲水詩序ニ設神理以景俗敷文化以

柔遠註善曰神理猶神道也周易曰聖人以神道設教天下服トアリ敷英風トハコレモ文迂曲水ノ序ニ冠五行之透氣邁三代之英風トアリ神理トハ神道ト云モ同シ一マヘノ二氣五行ト云ヨリウケテ云コ、デ神道ト云ハ天地造化ノ神明ノ道ト云一ニテ天武帝天道神道ニ法リテ神道ヲ以テ俗ヲス、メ導ビキ玉フ一ゾ文迂ニハ景俗トアリ註ニ景光也ミヘタリコ、ハ弊俗トアリ弊ハ字書ヲ按ズルニ弊ハ俗字ニテ弊本字也弊子兩切將上聲弊勸也トアリテス、メルナリ英風トハ善美ノ風ニテヨキ風俗ヲ天下ニ敷施シテ國中ニヒロマルヤウニナサレタト云一ゾハコノ所ニ或説アリ二氣ノ正ニ乘ジ五行ノ序ヲト、ノフト云ヲ以テミレバ是神代國常立尊ヨリ面足惶根マデハ形ヲ取テハノベカタシ然ルニ神名ヲ設ケ日德ノ化ノメグリテ人及萬物ヲ生ル德ヲ准ヘテ書タルヲ云ナリ天照大神ヨリシカト人體ノ事實ヲノスルモノナリ天照大神ヨリ以前ノ一ハ造化ノ功ナレバ二氣ノ正ニ乘シ神名ヲ五行ノ次第ニツケ一ノ日德ヲ以テ國常立ヨリ面足マデ人體ノヤウニモ書キ又ハ德ノヤウニモ書ケリ神理ヲ設ケテ俗ヲ獎ムト云モノ古書ナルユヘ此コトハリアリコレ白川家ノ傳ナリカヤウニミルトキハ古事記モ日本紀モ神代ハ皆神理ヲ設ケテ俗ヲス、ムル書ニテ全體佛法ノ方便説ニナリ神ト云モノハミナ立物ニテ俗ヲス、ムル目當ト計リナリ博識ノ君子ハス、メラル、様ニモ及ハザル如ク神理ヲ設ルト云ハ五行ノ德ノメグリヤウヲ設タルモノニテ天照大神以後ヘカ

ハラズコレ白川家古來一子相傳ノヤウニテ雅富王相傳ノ大事勿論書ニモ筆セズ口授シ來レリ此傳ヲ不レ得バ俗ヲス、ムルノ道理スムベカラズシカレドコレヲ古事記日本紀一部ヘヲシ出シミルト神道ガ虛無ニナルゾ是ヲ古事記序傳ト云古事記ハ事ヲ專トスルニ目ヲ付テ學フベシ日本紀ハ理ト云ニ專ラ目ヲ付ケテ學ブベシ古事記ノ神代ニ十二ケ傳アリ其傳ト云ハ古事記ハ事實ノ書ナルニ而モ理談ノ處アリ古ノ書ヨク是ヲ分ケテ書テアリ夫トワケテハナケレド事談理談分明ニテ俗ヲ獎ルヲ一部ヘ不レ渡此十二ケノ傳ニテ古事記一部ヲ建立スト云ヘリ按ズルニコレ臆説ナリ二氣五行ノ文神代七代ニカ、ルベキヲナラズ神理ヲ設ルノ文ヲ如此方便ノ如キヲニアラズ皆附會ノ説ナリ白川家ノ傳ト云フトルニ不足ミナ虛誕ナリコノ文ハ右云ヘル通り文迂曲水詩ノ序ノ文ヲトツテカケルモノナリタ、天武帝ノ天下ヲ治メ玉フトコロ造化ニノツトリ玉ヒソノ德ニ化シテ天地ノ造化ノ順ニナリタト云フマデナリ

重加智海浩瀚潭探上古心鏡煒煌明觀先代

マヘマデニ天武帝ノ政ノヨキヲホメ申シコレヨリ天武帝ノ御智慮ノアキラカナルヲホメテツレカラコノ古事記ノ出來ルユヘニウツリ段々ト云ヘリ重加ハ字ノ通りニカサ子加フルト云義ニテ

前ニ段々ト天武ノ善政御德義ノヲ云テソレバカリニアラズソノ上ニカサ子加フルニト云フニテコレカラ御智慮ノフカク明ナヲホメ申スゾ智海トハ天武帝ノ御智慮ノ深遠廣大ナルヲヲタトヘテ智海ト海ニタトヘ云浩瀚ハ廣大貌ト云註字書等ニアリ天武ノ御智慮廣大ニテト云フナリ古板ノ本瀚ノ字ヲ汗ニ作レリ汗ハ字書ニ候幹切音翰人液也アセト云字ナリコレハアヤマリ也畧書ニ汗トカキタルモノナルヘシ瀚ノ字本ナリ潭ハ字書ニ徒含切音曇水深處トアリコレミナマヘノ智海ト云ヨリ潭トカク上古トハ我國ノ上代天武ヨリ以前ノヲ云フコ、デ上古トサスハ神代ノヲナルベシ天皇ノ御智惠廣大ナルユヘニ上古神代ノヲモ深ク探リ玉フト云フゾ心鏡トハコレ天皇ノ御心ノアキラカナルヨリ云帝ノ明德ヲ云煒煌ハアキラカナルナリ字書ニ煒烏賄切音委盛赤也光明也煌ハ胡光切音黃焜煌光輝炫耀貌トアリ二字ニテアキラカナルト云フゾ心鏡ト云ヨリ云ヘリ天皇ノ御心アキラカニノヨク先代ノヲモミ玉フト云フゾ先代トハ天武ヨリ以前ノ天皇ノ御代々ノヲニシテマヘニ上古ト云ハ神代ヲサシ先代トハ人皇ヲサスゾ觀ハ字書ニ觀董五切都上聲見也トアリコレヨリ末ニ段々古事記ノ出來ルユヘ阿禮ガ傳等ヲイヘリ

於是 天皇詔云朕聞諸家之所齋帝紀及本辭既違正實多加虛僞

前段マデニ天武帝ノ徳ヲホメテヲキコレカラ天武帝詔リシテ阿禮ニ舊記ヲ誦セシメ玉フヲ段々ト云ヘリ於是トハ前ヲウケテ云天皇ハ文帝ヲ云ナリ天武帝詔シテノタマウゾ朕ハワレト訓ス朕ノ字秦ノ始皇帝ヨリコノカタ天子ノ自稱トスルナリ字書ヲ按ズルニ朕呈錦切沉上聲古者上下共ニ稱答^ス絲與^ト帝舜^ト言稱^テ朕^ト至^ニ秦始皇二十六年^ニ始專爲^ニ天子^ノ自稱^ト漢因^ル之^ニトミヘタリ本朝モコレニヨリ朕聞トハ天武帝御自身ニ聞及バセラル、ニハト云フゾ諸家古來ヨリ持ツタヘタル處ノ記録モ多クアリ帝紀ハ帝王御代々ノ御記ノ本辭トハ上代ヨリ傳ル古語ノトミヘタリ下文ニ帝紀舊辭ト云又帝王日^ヒ繼^{ツギ}先代舊辭ト云又先紀舊辭モカケリコレ同シヲニテ帝紀ト云モ先紀ト云モ帝王日繼ト云モ同シヲニテ御代々ノ御記録ノ又舊辭トモ本辭ト云モ又同シ上代ノ古語也弘仁私記ノ序ノ説ニヨレハ帝王本紀及先代舊事紀トアレバコ、ニ帝紀ト云ハ帝王本紀本辭ト云ハ先代舊事本紀ニテ聖徳太子所撰ノ書也上代コノ二書アリタリトミヘタリ發端ニモ辨ズル通り入鹿ガ亂ニ記^ル（頭書）

○齋古板本賚ニ
錄モ多ク燒失セリソノ殘篇ヲモヘクヒヨリ出シタルコナリ御藏ノ御書物ハ右ノ通ツクル大書正偽
リナレモソノ外諸家ニ散在シテ右ノ二書モアリタリトミヘタリ齋ハ賤西切音壘持ニ俗作^レ實非^ニ也備也トアリ諸家ニ所持スルトコロノ紀錄モアリソノ諸家所持ノ記録モ多ク誤リアリテ正實ト正シ實事ニ相違シテ虛偽トムナシキイツハリヲ加ヘソヘテ傳フルト也帝王本紀ナド

云ヘル書古來ヨリ傳ルトイヘモアヤマリ多カリシトミヘテ欽明紀ノ註帝王本紀多有^{フルキナ}古字撰^ル集之^シ人屢^シ經^ル遷^ル易^ス後^ニ人習^テ讀^ム以^テ意^ヲ刊^リ改^ム傳^ム寫^シ既^ニ多^シ遂^ニ致^ス舛^ル雜^ル前^ニ後^ニ失^ル次^ヲ兄弟^ノ參^ル差^ル今^ニ則^シ考^ム竅^ス古^ノ今^ノ歸^ス其^ノ眞^ニ正^ニ一^ニ往^ニ難^キ識^ル者^且依^テ一^ニ撰^ル而^シ注^ス詳^ス其^ノ異^ヲ他^ノ皆^レ效^ル此^ノ此文ヲ以テ按ズルニ日本書紀撰習ノ日ニコノ帝王本紀等ヲ據トセラルニ帝王本紀ニ古人ノ名等多クアルウチニ後人追々寫シ傳ルニツキアヤマリ出來後人ノ意ニテ刊リ改メナドスルヨリタガヒ出來前後モ相違シ兄弟ノ次第ナドモタガヒアルニツキ日本紀ヲエラムニツキ古今ヲ考ヘタマシテソノ正キニモトヅキシレガタキハ一ツヲ上ゲテ異説ヲ註ニ詳ニスルトノ也シカレバコ、ニ正實ニタガヒ虛偽ヲ加フト云ニアヘリ考ヘヲモフベシ

當^テ今^ノ之^ノ時^ニ不^レ改^ム其^ノ失^ヲ未^レ經^ル幾^ク年^ニ其^ノ旨^ヲ欲^ク滅^ス

「古板本作終經ニ作ル是之」

今ノ時ノトハ天武御治世ナリ右ニ云トヲリ帝紀本辭ニアヤマリ多クタガヒアルユヘニ當時ニコレヲ改メテソノ失ヲ正サズハ幾年ヲヘザルウチニ近年ニ神代ノ古事上代ノ古言ミナ滅ントナリ其旨ト旨趣ニノ上古ヨリ相傳ルトコロノ意味旨趣ナリ

斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討覈舊辭削偽定實欲流後葉

斯乃トハ大事ニカケテ云ナリ邦家トハ國家ト云モ同シ經緯ハタテヨコトヨミテ機ノタテヨコヨ
リ云タフ家語孔子曰唐叔對ニ於晉以經緯其民註王肅曰經緯猶識以成之トアリ又文迂四十八
司馬長卿封禪文經緯乾坤註向曰經緯猶政治也トアリ經ハ機ノタテ緯ハヨコナリタテヨコヨ
以テ機ヲアル如キト云フ王化トハ帝王ノ教化ノ一字書ニモ躬行ニ於上風動ニ於下謂ニ之化トアリ
鴻基トハ鴻ハ大也ト云註ニテ大ナルモトキト云フ子夏毛詩ノ序ニ正始之基トアリ註基本也トア
リコノ御記録ハ國家ノタテヨコ帝王ノ政治教化ノ大ナル基本ジャトナリカ、ル大切ナモノユヘニ
タハシ改テ撰ミ玉ハントナリ撰錄ハエラミシス也討覈ハギンミシテタバズト討ハ尋也ニテタツ
子ギンズルズ覈ハ字書ニ考レ之使レ實也トアリギンミシテタバズシキハメルゾ帝紀舊辭ヲヨクタマ
シキワメテ撰錄シ偽リヲ削リステソノ實事ヲ定メテ後代ヘマデ傳ヘルヤウニナサレントノ思
召ナリ後葉トハ文迂羽獵賦曰又恐後葉復修前好註濟曰後葉後代也トアリ流ハ字書ニ水行也
演也覃也トアリ水ノナガル、如ク後世ヘノベヲヨバシテ傳ント云意ナリ

時有舍人姓稗田名阿禮年是二十八爲人聰明度目誦口拂耳勸心即勅
語阿禮令誦習帝皇日繼及先代舊辭然運移世異未行其事矣

時ニトハ當時ニテ天武御治世ノ時也舍人アリトハ天武ノ朝ニ仕フル舍人也舍人ノフハ日本紀ノ
所見仁德紀ニ初テ出ツ近習舍人ト云フアリソレヨク所々ニ舍人ノフ所見アリ天武紀ヲ按ルニ
天皇吉野ヘ入り玉フ片諸ノ舍人ヲアツメテ天皇ニ從ヒ奉テ出家セント思フモノハ留レ仕テ名ヲナ
サント思フモノハ還レト詔リアリ舍人半ハ留リ半ハカヘリタルトイフミヘタリ天武朝ニモ多ク
舍人アリタリトミヘタリ舍人ト云ハ内舍人ノ大舍人ノト云アリテ舍人ハ漢書高帝紀註師古曰舍人
ハ左右ニ親近スルノ通稱也後ニツイニ司族ノ官號トドコトモナクナリタリ和訓ノ意ハトテリハト
ノイノ義ヲトリテ也侍衛ノ臣ノ近親クノ稱トミヘタリ内舍人ト云ハ昔九十人アリテ刀ヲ帶シ宿
衛供奉雜使ヲ司ルモシ駕行ニハ前後ヲ分衛スルノ由職員令ニミヘタリ上古ハ五位以上ノ子孫年廿
一以上ノ人ヲ取テ内舍人トナシ玉ヒシゾ又大舍人ト云アリコレ輕キ官ニテ六位以下八位以上ノ
子孫年廿一以上ノ人ヲ擇テ大舍人トナス此大舍人ハ無位ノ人也コレハ行幸ノトキ供奉シ或ハ毎月
諸司ノ火鎮ノフヲ知ル役也又公事ノ時宮中駈使ノ役也コレハ昔八百人アリタルゾ又日本紀ニ帳

内ヲモト子リトヨミ又兵衛ヲモト子リトヨメリコ、ニ云ト子リハ内舍人ノ類ナルベシナレドコ、ニテハタバカルキ侍衛ノ臣近習ノ臣ノトミテヨシソノ舍人ノ姓ヲ稗田名ヲ阿禮ト云トナリ稗田氏姓氏録ニモ所見ナシ如何ナル系譜ニヤカバ子モ知レズ天武紀ニ稗田ト云地名アリ疑ラクハコノ地名ヲ居地ノ姓トスルカ根按稗田ノ地ハ大和ノ國ニ春日ノ近邊ニアリトソノトキ年齢廿八歳ニナリタルトナリシカレドコノ年天武ノ何年ニテ何ノ支干ノ年ト云コ所見ナキユヘニソノ詳考フルコ不得爲人聰明度目誦口拂耳勒心トハソノ阿禮ガ生レツキ格別發明ナルモノニテ彊記英才ナルモノトミヘタリ纂疏ニ引ク弘仁私記序云有舍人二姓稗田名阿禮年廿八天鈿女命之後也爲人謹恪聞見聰慧トアリ延佳モコレ頭ヘ考ヘ書セラルコノ文釋紀ニモ引キテアリ聰ハ字書ニ倉紅切音蔥能聽耳力也又察也明也トアリ阿禮ガ生レ付ツキ格別ナルモノニテヨクモノヲキ、ワケ見ルコアキラカニソ一度目ニワタリミレバハヤヲボヘテソラニテ口ニ云ヒ一度耳ニ聞タコハキツト心ニヲボヘシルストナリ勒トハ字書ニ勒歴德切入聲馬鑣銜也銜曰勒無銜曰羈一曰刊也又抑也刻也トアリシカレガ勒心トハ心ニキサミツケヲボユルコトミユルゾ如此ウマレツキユヘニコノ阿禮ニ勒リヲ下シテ御記録ヲヨミ習ハシメテ御記録ヲ撰セシメ玉ハントナリ帝皇日繼トハ前ニ云通り帝王本紀先代舊辭ハ先代舊事本紀ナリコノ兩書ヲ學バセ玉フゾシカルニ年代ウツリテ天武帝

モ崩御アリテ御代カハリタユヘ右ノ思召モイタヅラニナリテソノ事行レズ御記録ノ撰モ成就セズ
 ノウチスタリタト也運ハ字書ニモ運祚謂ニ曆數也トアリ

伏惟皇帝陛下得一光宅通三亭育

今案如云照臨天下而卜帝宅
 古板本亭ニ作ル亭通也養也易曰大亨以養聖賢

コレヨリハ安麻呂元明帝ノコトヲホメ奉リテソレヨリ古事記ヲ撰ルヨシヲノブ伏惟バトハ安麻呂ノ云イフンニテ上ノコトヲ申スユヘ伏シテヲホンミルト云皇帝陛下ハ當今ヲサシテ云コトニテコレスナハチ四十三代元明天皇ノコト也皇帝陛下ト云ハ秦ノ始皇ヨリ云イハシムル也秦天下ヲ并セテ其功三皇ニモスギソノ德五帝ニモコエタルユヘ三皇五帝ヲアハスルト云コトニテ皇帝ト云ハジメタリ漢モ又コノ例ニヨレリ陛下トハ蔡邑獨斷曰陛階也所由升堂也天子必有近臣立於階側以戒不虞謂之陛下者羣臣與天子言不敢指斥故呼在下陛下者與之言因昇達尊之意也コレニテ明カナリ臣下ヨリ天子ヲサシテ云言ニメソソノミハシノ下ノ人マデ云トノ意ナリ得一光宅トハ神武紀ニモ光宅天下トアリ書序曰昔在帝堯光宅天下又文選吳都賦ニ一六合而光宅註劉曰一六合而光宅者并有天下而一家也良曰光大也宅居也コレヲ註ニテアキラカ也

天下ヲ一統ニ御シ玉フテ御座ナサル、ト云フソ通ソ三亭育トハ三才ノ一三才ニ御德義ノ通ズルト云フ亭育ハヤシナフト云フ萬民ヲヤシナヒ玉フヲ敏達紀ニ亭育黎元トアリ字書等ニ亭育毒化育也トアリ列子亭之毒之又老子亭之毒之註王弼曰亭謂品其形毒謂成其質トアリ亭育ハ亭毒ノ意ニテ化育ノ一ヤシナフ義理ナリ

御紫宸而德被馬蹄之所極坐玄扈而化照船頭之所逮

コレ亦元明帝ヲホメ奉リテソノ德化ノ天下中ヘハシクマデユキワタルヲ云紫宸天子ノ御殿ノ一蠡海集曰紫色乃水火陰陽相交既濟流通之義也故天垣曰紫宮又曰紫微者紫宮微妙之所也是以天子之居亦曰紫宸面南拱北之情合矣又書言故事曰朝廷前殿曰紫宸一職官分紀敬本上疏曰紫宸殿前漢前殿周路寢路寢制如明堂以聽政人君所居皆曰路寢陛下所下以負黼扈音甫倚也黼扈天子坐則黼扈在後如背負之也黼扈制如屏風畫斧而無柄設而不之義居黃屋漢書註天子車上以黃繒爲蓋爲裏普輿服制青蓋黃裏饗萬國朝諸侯天子設朝而會於諸侯三年一朝曰述職人臣致敬之所紫宸如此ミヘタリ今禁中ノ紫宸殿ト云ヘルモコノ意ナリ御トハ天子ノ一ニハミナ御ノ字ヲツケル四海ヲ統御スルノ義ナリ紫宸殿ニ御座ナサレト云フゾ馬蹄ノ極ルトコロハ馬ノヒヅメノタツホドノ處ハ

テマデト云フソノ御德義夷狄ノ末々ハテマデニユキワタリミナソノ御德義ヲ蒙ルト云フゾ玄扈トハコレモ皇居ノ一ゾ令義解序ニ修機玄扈トアリ玄扈ハ黃帝石室ノ名也コレ玄扈ノ字ヲ以テ元明帝ヲ黃帝ニタトヘリマ天皇御殿ニ南面シテ御座ナサル、ト云フゾ春秋合誠圖黃帝玄扈洛上ニ坐スト初學記ニ見ヘタリ又藝文類聚ニモ見ヘタリ春秋合誠圖曰黃帝即位坐玄扈雒上鳳皇銜圖授寶注曰玄扈石室名也又云帝坐玄扈雒上臨觀鳳皇銜圖置帝前黃帝再拜受圖也河圖蒼頡爲帝南巡狩登首陽之山臨于玄扈洛納靈龜負書丹甲青文以授之比出也化船頭ノヲヨブ所ヲ照ストハ化ハ德化ノ二字ヲワリテツカフ天皇ノ御ノ德化陸ニ云ニ不レ及海中ニ至リテ船ノ通フホドノ處ヘハユキワタリソノ化照リカ、ヤクト也天皇大殿ニ御座ナサレナガラソノ德化天下四方ヘユキワタリ陸ハ馬テイノキワマルホドノ處人ノ通フホドノ所ハテマデ海ハ船ノ通フホドノトコロマデハ天皇ノ德化ユキワタルト天皇ヲホメ奉ルゾ船頭ノ船ノ字古板ノ本ニ舩ニ作ルハ誤リ也コノ意六月月次祭祀詞ニ青海原者棹枚不千舟艦乃至留極大海原爾舟滿都々氣氏自陸往道者荷緒結堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限云云ニ同シク海陸ノハテマデノコルヲナキノ謂ナリ

日浮重暉雲散非烟

前段マデニ天皇ノ御德義ヲホメ申シテコレヨリハ天皇ノ德化ニヨリテイロク目出度祥瑞ノアラハル、一ヲ云日重暉ヲ浮ベト云ハ天日モ光暉ヲ益シタマフト云一漢書兒寬傳曰日宣重光李奇曰大平之世日抱重光謂日有重日也五車韻瑞曰古今注明帝時爲太子樂府辭曰日重光月重輪星重暉海重潤漢明帝作太子樂人歌曰一日日重光二日月重輪云云雲非烟ヲチラストハ慶雲ノノ一ニテ目出度瑞ノ雲アラハル、ト云一チラストハタナビクコ、ロ也延喜治部省式祥瑞ニ大瑞ノ中ニ慶雲ヲノスソノ慶雲ノ本註狀若烟非烟若雲非雲トミヘタリコレニテ非烟ノ義キコヘタリ續日本紀ノ所見慶雲元年和銅六年靈龜元年等ニ慶雲ノ一アリ此以後ノ一不勝計コレミナ目出度祥瑞ナリ重暉ノ字ハ神武紀ニモアリ積慶重暉トアリ文迂楮淵碑文奕世重暉トアリコレラノ文字トハ意カワリテミユルゾ或説ニコノ二句ハ君臣ノ德義ヲホメル一也天子ヲ日德ニトル一吾國ノ俗ナリユヘ日重暉ヲ浮ヘトハ日德天子ノ御德義ニテ御代々相重リ德光ノマスヲ云雲非烟ヲ散トハ月卿雲客トテ臣下ノ一ヲ雲ニタトフレバ非烟ハ慶雲ニテ祥瑞ナレバコレニ賢臣ヲタトヘテ云トナリカ、ル附會ノ臆説論ズルニタラス

連柯竝穗之瑞史不絶書

柯字書ニ居何ノ切音歌枝柯

コレモ同シク祥瑞ノ一ゾ連柯トハ連理木ノ生ズル一并穂トハ稻一莖ニ二穂出來ル一ゾコレミナ目出度瑞ナリコレミナ太平ノ御代ニアラハル、瑞ナリ延喜治部省式祥瑞ノ篇木連理本注仁木也異一本同枝或枝旁出上更還合トミヘタリ文選三十七觀進表一角之獸連理之木以爲三休徵註濟曰連理木異一本同末王者之美瑞孝經援神契曰德至草木則木連理ト見ヘタリ續日本紀ノ所見慶雲元年和銅五年同六年ノ文ニ連理ノ一アリ此後ノ例不勝計并穂トハ延喜治部省式祥瑞ノ篇ニ日喜禾本註或異畝同穎或孳連數穂或一稔二米也孫氏瑞應圖曰嘉禾五穀之長盛德之精也文者異本而同秀質者同本而異秀トミヘタリ天武八年同九年持統六年文武帝ノ大寶二年嘉禾ノ一ミヘタリソノ以後不勝計一カヤウナル祥瑞數多アリ諸國ヨリ祥瑞ノ一ヲ注進スルヲ有司カキトメルニイトマナク書絶ツヒマナク記スト也史ハ史官ノモノニテ記録ヲトメル役也右ノ祥瑞凡續日本紀ノ所見右ノ通りナレモコノ祥瑞一々アテル所ノ事實アルニテモナシコレミナ文章ニテ天皇ノ德ヲホメ奉ルトテカヤウ文ニカキタモノゾ

列烽重譯之貢府無空月

烽ト云ハトブヒト訓ズコレハ夷狄ノヲソヒ來ルトキノ備ヘニ四方ノ邊要ニハコノ烽ヲ置ク天智紀
 ナドニモ三年ノ紀ニ是歲於對馬嶋壹岐嶋筑紫國等置防與烽云云烽トハノロシノ類ニテ寇ノヲソ
 ヒ來リタルトキ急ニ通ズルタメニ燒草高キ處ニ積ミヲキテ急ナルトキノソレニ火ヲカクルトソノ煙
 フミテ遠方ヨリモミナカケツケルゾソノ相圖ノタメナリ烽燧ナゾ云テアリ漢書註文穎曰邊方
 備胡寇一作高士橋其上作桔臯桔臯頭兜零以薪草置其中常低之有寇即火燃舉之
 以相告曰烽又多積薪寇至即燃之以望其烟曰燧張晏曰晝舉烽燧燧也師古曰張說誤也
 晝則燧燧夜則舉烽云云烽ヲ列ヌト云ハ烽ノイクツモツラナリイル遠方邊境ノヲ云重譯トハ
 譯トハ通事ノヲニテ異國ノ者ハ言語通ゼヌユヘ間ニ通事カアリテ通ズルゾソノ通事ノヲ譯ト云
 和訓ヲサト云契沖ノ說ニ異國ノコトバニ通ソ相交ハル要ナレバ治ノ意カ箴ヲサトヨムモ糸ヲ
 治ムル具ナレバヲサムルノ義ニヤ重譯トハ遠國ノ異國ハ譯モ一通リニテハ通ゼズ段々ト通事ニ
 通事ヲ重ヌルト云フニテ至テ遠キ異國夷狄ノヲ云史記西域傳ニ越裳氏重譯而來トアリ文迂二
 十晉武帝華林園集詩ニ越裳重譯充我皇家註善曰尙書大傳曰成王時越裳重譯而來朝曰道路

悠遠山川阻深恐使之不通故重譯而朝也又文選四十四喻巴蜀檄康居西域重譯納貢稽顙來
 享註善曰禮記王制曰五方之人言語不通北方曰譯說文曰譯傳也傳四夷之語向曰康居國名重譯
 傳易其言納貢獻於中國也コレラノ註ビニテアキラナリ列烽重譯ノ貢トハ四夷ノハシハ異

(附箋)
 ○後漢書和帝紀蠻夷及ヒ擇國重譯奉貢
 ○說文曰譯傳四夷之語
 ○漢書賈捐傳越裳氏重九譯而獻善灼曰ハ國府ナリコレハ公義ノ役所ニテ諸方ノ貢物ヲ納ル御藏ノヲ
 遠國史來因九譯言語乃通也云空シ月ナク滿タ、ヘテアルト云フ諸國ノミツギモノハ大藏省

ノ掌リニテヲサマルゾゴ、ノ文段ハ文選ノ三月三日曲水詩ノ序ニ據リ書キタルモノトミヘタリ
 曲水詩序ニ云并柯共穗之瑞史不絶書棧山航海踰沙軼漢貢府無虛月列燧千城通
 驛萬里註善曰左氏傳司馬叔侯曰魯之於晉也職貢不乏史不絶書府無虛月如是可也楊雄
 交別箴曰航海三萬東牽其犀良曰并柯連理木也共穗嘉禾也皆太平之瑞也言於國史上
 書之不絶言常有之濟曰言遠方國山作棧道海濟舟航踰度沙漠貢土物府庫之內每
 月無絶也翰曰燧烽火也千城言郡縣多也

可謂名高文命德冠天乙矣

文命ト云ハ夏ノ禹王ノ子也史記夏本紀ニ夏禹名曰文命トアリ天乙トハ殷ノ湯王ノ子ニテ史記殷本紀主癸卒子天乙立是爲成湯注稱ニ天乙者ノハシロクカケ譙周云夏殷之禮生ニケルニシ稱王死セルニス稱廟主皆以帝名配之天亦帝也殷人尊湯故曰天乙禹王ハ天下ヲ治テ四海ニ名高キ聖人ナレバ當今ノ御名禹王ヨリモ高クソノ御德義湯王ニモコエ冠タリト云タモノ也コレミナ元明帝ヲホメ奉リテ云タモノゾ

於焉惜舊辭之誤フルキコトノハ正先紀之繆タカヒサカフヲ錯以和銅四年九月十八日詔臣安萬侶

謬古板

撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者謹隨詔旨子細採摭

コレヨリハ安マロ古事記ヲ撰ズルノ旨趣ヲ云右ニ段々云通り當今元明帝賢主ニマシノテ天下化ニシタガヒ德名高ク祥瑞アラハル、コエ古キ御記録ノアヤマリ多キヲ殘念ニ思召先代ノ記録ノアヤマリヲ正シタク思召和銅四年九月十八日ニ安麻呂ニ仰付アリテ昔天武ノ御宇ニ稗田阿禮

ガ誦セシ勅語舊辭ヲ撰錄セヨトノナリコレ舊辭トハフルコトニテ上代ヨリ傳言スル處ノ古語テコレ先代舊事紀ヲ云誤忤トハアヤマリタガヒナリ字書ニモ誤ハ五故切音晤謬也トアリ忤ハ五故切音誤逆也違戻也トアリ先紀トハ先代ノ記録ノナレバ舊辭ト云ヘルニ對シテ前ニ云トロノ帝王本紀ノ謂ナリ繆ハ字書ニモ靡幼切音謬戻也糺繆也トアリ古板ノ本ニハ繆ニ作ル字書ニ繆ハ字書ニ靡幼切繆去聲詐也差誤也妄言也トミヘタリ錯ハ七各切蒼乖也誤也雜也トミヘタリ和銅ハ元明帝ノ即位二年ヨリノ年號也續日本紀第四曰和銅元年春正月乙巳武藏國秩父郡ヨリ和銅ヲ獻ズ勅曰云云故ニ慶雲五年ヲ改テ和銅元年ト爲トアリ和銅四年九月十八日ニ安マロニ右ノ通り仰付アリテソレヨリ撰ニトリカ、リ翌年和銅五年正月廿八日功ナリテコノ古事記ヲ奏覽ニ入レタリ稗田ノ阿禮カ誦スル所ノ勅語舊辭トハ右段々云通り天武ノ朝ニ阿禮カ勅ヲウケテ誦ミ習フタルトコロ紀錄モノゾ定テ古ヘヨリ傳リタル紀錄ニ阿禮ガ手ヲ入レタル草稿ニテモアリタルトミヘタリ勅語舊辭トハ勅語ハ古ヨリ代々ノ天皇ノ勅リノ語舊辭ハフル言ニテ畢竟前ニ云上古ヨリ傳來ノ御記録先代舊事記帝王本紀ナドノ類ナルベシコノ趣ヲ撰錄シテ獻上スルヤウニトノ詔アリタリ或說ニハ阿禮存生ニテコノ時マテイタリ老衰ニテ居タリ安麻呂阿禮ニ會シテエラムトイヘバコノ說覺束ナシ中ノ者トハコノ者ノ字ヲテヘレバトヨムト說々アリ或說ニ官符ニ者ヲテイレバト

ヨムハ皇明通記ノ註者胡語然辭トアリ意ヨクキコヘタリ上ヲウケテ尤トウケガヒ下ヘ達ル事然
 リトイフモノナリトイヘリシカレ氏皇明通記ニ云ヘル者ハ夷狄ノ語ニテ華語ニアラズ外國ニテ者
 ト云ハ中華ノ然ノ字ノ義理ト云ノ註ナレバコレハ取り用ラズ契沖ノ云何々ト云詞ナリ登以切知
 ナル故ニチヘリトイフベキヲチトテト二四相通ジテカクハイフナリ衣ホステフナドイフヲ、テフ
 ヲ、チフトモヨメリ、テウモ何々トイフトイフ詞ナリ准ラヘテシルベシ以テヘリハ句ノ下ニツキ
 テ句絶ノ詞ナルヲ今ハ句ノ初ニアケテ、テヘレバトヨムヲボツカナシ右ノ通りニ詔リアリタル
 ユヘ安マロ謹テ詔ノ旨ニシタガヒコノ書撰録ニカ、リ子細ニトリ撫フトアリ採撫トハ孔安國尙書
 序ニ采ニ撫郡言ニ註翰曰撫拾也トアリコマカニトリヒロイテ撰録スルトナリ

然上古之時言意竝朴敷文構句於字即難已因訓述者詞不逮心全以音連
 者事趣更長是以今或一句之中交用音訓或一事之內全以訓錄即辭理
 叵見以注明意況易解更非注亦於姓日下謂玖沙訶於名帶字謂多羅斯如
 此之類隨本不改

コレヨリコノ書ヲ記スルノ例ヲ云ヘリ上古ノ時言意竝朴文ヲシキ句ヲ構ト云フハ右ニ段々云通り
 ニコノ書ハ古來ノ記録凡ニモトヅキ阿禮カ誦セシ本紀舊辭ニヨリタルモノナレバコノ古代ノ記録
 凡ハ後世ノゴトク花ヤカナルハナクタバアリノマ、ニソノ言意味凡ニスナホニ文句ヲツバリテ
 (書入) 朴ハ質朴ニテソノマ、ニ カザリナキ文章也字即難トハ和語ヲ漢字ニ釋シテコトヲ記スルニ和語ガ
 テカザリナキコト 十分ニ漢字ニ合ヒカテ取廻シガタキアルゾソレユヘニ何ニテモ記ス
 ルニ漢字ヲ釋シテソノ字ノ訓ニテ書クトキハソノ和語ノ心ニソノ字ガヲヨバヌナリ又字ヲ釋セズ
 ソノ音ヲカリテ萬葉假名ノゴトクニ和語ヲ記スルトキハソノ文體殊外長クナルト云フゾ訓ニ因テ
 述ルト云ハタトヘバコノ書ノ發端ノ天地ノ三柱神ノト書キタル如キ類也コレミナ漢字ヲ釋シ
 用テソノ訓ヲ用タルノナリ上古ノ書ハ我國ノ古語ヲソノマ、記シタルモノユヘニ悉漢字ニ釋シガ
 タク詞ノ意味云ツクサレヌト也以音連ルト云ハ久羅下那洲多陀用弊琉ト書キタル如キ類ナリカ
 ヤウニ字ヲ釋セズソノ字ノ音バカリヲ假用テカナ書ニシテ字義ヲ用イサル也カヤウニバカリ音ヲ
 連テカナ書ニシテソノ事ノ趣長々シクナリテ書ホドカレヌナリソレユヘコノ古事記ヲ記スハ右ノ
 譯ユヘ兩方用テ一句ノ中ニ音ト訓トヲ交ヘテ用或ハ又ソノ一事ヲ全ク訓ニテ録ストナリ此皆上古
 質素ノ時ニメ文字サバキトウノモ委シカラザルユヘ文章ノ體モ右ノ如キ也古書ノ體ハ右ニ云ゴ

トク文字ノ釋モアヒカ子又音ヲ假リ萬葉カナニ永々シクカキタルモノ也阿禮カ記録モ定テソノヤ
 ウナ書體ニテアリツラントヲモハル、ゾソレユヘコノ古事記ヲ書スルニハ一句ノ中ニ音訓ヲ交ヘ
 用又ハ一事ヲ訓バカリニ記スト古代ノ書ト書體ノカハリタルコトハ也音ト訓ト交ヘ用ルト云
 ハ妹須比智邇ノ大斗乃辨ノト云如キ類也妹ノ大ノト云ハ訓ヲ用タルニテ須比智邇ノ斗乃辨ト云ハ
 音ヲ用タル也一事之内全以訓録ストハタトヘバ天地初發トシルスガ如キ也ソノ内和語ノ通シガ
 タキハ註ヲ以テ音訓ノサカイヲ分ツテ和語ノフルコトヲシルス也タトヘバ訓ニ高下天ニ云ニ阿麻ト
 疏字以上十字以レ音トアル類也又スミヤスキハ註ヲセヌトナリ匡ハ字書ニ普、火切音頗不レ可也
 反レ可爲匡也如此アレバカタキトヨムフ如何ナリ古書ノフ如何トモシガタシソノマ、ニテヲクベ
 キ也姓ノ日下トハ姓ニ日下部ト云アリコレヲクサカベトヨミ又名ニモ大帶日子ナド云テ帶ノ字ヲ
 タラシトヨムナリ此レヲハミナ古來カラコノ文字ヲカヤウニヨミ來タユヘソノ通りニ改メズ古
 本ノ通りニシテヲクト云フゾ本トハ古本ノフニテ阿禮カ記録ノフナルベシ○契冲説ニ俗ニ長キフ
 フナガタラシ云ヒナラヘルハ古語ノ遺レルニヤ帶ハ長キモノニ云ヘリ

大抵所記者自天地開闢始以訖于小治田御世故天御中主神以下日子

波限建鵜草葺不合尊以前爲上卷 神倭伊波禮毗古天皇以下品陀御
 世以前爲中卷 大雀皇帝以下小治田大宮以前爲下卷 竝錄三卷謹以
 獻上臣安萬侶誠惶誠恐頓首頓首

コレヨリハコノ書ヲ三卷ニ分ル次第ヲ云大抵トハ文迂ノ註良曰大氏猶大、都也トアリ又史記索
 隱ニ大抵猶言ニ大畧也トアリ漢書註ニ師古曰大抵猶言ニ大凡也トアリコノ書ノ大氏上ハ國、初
 開闢ヨリ書キ出テ小治田ノ朝マテヲ記スルト也小治田ハ三十四代推古天皇ナリ大和ノ國小墾田
 宮ニマシ、タルユヘカク云コノ書三卷ノ内上卷ハ神代ニシテ天御中主ヨリ書キ出メ葺不合尊マデ
 フシルスシカレ、日本紀ノ如ク神代ト人皇ト紀ヲ分ツフナク開闢ヨリ筆ヲタテツメ推古ノ朝マテ
 一ツラスキニ書セリ又日本紀ニハ國常立尊ヨリ神世七代ヲ書キ出テ天御中主ハ一書ノ説ニ記スコ
 ノ書ハ發端ニ天御中主ヲカキ出メ次ニ神世七代ヲ記スコ、ラニハ譯ノアルフニテ吟味ノアルフゾ
 神倭伊波禮比古ハ神武天皇ノ御名ナリ品陀御世トハ十六代應神天皇ノ御事ナリ御名ヲ品陀和氣命
 ト申シ奉ルユヘナリ中卷ニハ神武ヨリ應神マデヲシルス下卷ハソノ次仁德帝ヨリ推古ノ朝ニテ筆
 フトメタリ仁德天皇ヲ大雀命ト申シ奉リシナリ小治田大宮ハ推古ノフニテ大宮ト云ハ朝廷ト云モ

同シ意ナリ都合三卷ヲ録テ獻上スト云フゾハ臣安萬侶誠惶誠恐頓首々々トハコレミナ上表ナド
(朱書入)
此書開闢ニ初テ推古ノ朝ニ筆ヲ
終フ蓋撰者安麻呂阿禮カ舊記ニ據
レリ阿禮ハ天武ノ朝ノ舍人ニシ
詔ヲ奉テ舊記ヲ習其書自ラノ意ヲ
以紀ヲナサバ當時天武ノ朝マデヲ
記スベキニ推古ノ朝ニ筆ヲ止メシ
ハ阿禮單ニ舊記ニ據ケルニヨツテ
コレ亦推古ノ朝厩戸太子所撰舊事
本紀ニヨルノ一證ナルベシ

ノ終リニハミナカヤウニ書ク一臣ヨリ上ヘ奉ルニハツ、シミウヤマ
 フテカヤウ書臣トハコレハ上表等ノ位署ニハ必臣ノ字ヲ加フルゾ
 安萬呂ハ名ナリ多クハ麻呂ト書セリコ、ニハ萬侶ト書セリコレミナ
 音ヲ假リテノ假名カギナレハ文字ハイカヤウニカキテモ字義ニ意ナ
 シ誠惶誠恐トマコトニヲノ、ギマコトニヲソレルトヨミ上ヲタツト
 ンデ申上ル也上表ノ終リニハミナカヤウニ書セリ頓首トハ首ヲサゲ
 平伏スル一文字書ニモ頓ハ下ノ首至レ地也トアリ

和銅五年正月二十八日

廿古板本
コレハ古事記撰録ノ功ナリテ上リタ日ナリ和銅ハ右ニ云通りニ元明帝ノ年號ニテ
五年ハ壬子ノ年ナリ

正五位上勳五等太朝臣安萬侶謹上

○太ヲ大ニ作ルハ非也太ノ字ヲヨシトス

正五位上ハ位階ナリ安曆和銅四年四月正五位下ヨリ正五位上ニナリ玉フ一國史ニアリ勳五等トハ
 コレハ勳位ナリ勳位ト云テ勳功ニヨリサヅクル一上代アリ軍功ノ爵ニシテ勳一等ヨリ已下十二等マ

デアリ軍防令義解曰將軍府具錄ニ行軍以來行狀以爲書記仍大將以下連署即申勳之日
 更依此書以爲勳狀云云國史所見和銅六年秋七月丙寅詔曰授以勳級本據有功若不
 優異何以勸辨今討隼賊將軍並士卒等戰陣有功者一千二百八十餘人並宜隨勞授勳矣カ
 クノゴトクアレバ正シク軍功ノ爵ナルヲ文位ニ必勳位ノツキタルヤウニ心得タルハ非ナリ古記ノ
 所見或文位ト勳位ト兼帶ノ人アリ或ハ文位ナク勳位バカリノ人アリ又文位アリテ勳位ナキ人ア
 リ文位アル人必勳位兼帶スルニテハナシ又諸神ノ位階ニモ或ハ文位勳位兼帶モアルナリ太朝臣
 ハ太ハウチ朝臣ハカバ子ナリ太ヲヲホトヨムベシ又書ニヨリ多ニ作リタル所モアリコレフトナ
 ド、ヨムハ甚非也太ハ地名ニテ地名ヲ姓トシタルモノゾ大和國城上郡ニアル地名ナリ意富臣ナド
 凡ミヘタリ假名ニテハオホナリフトスルハ誤ナリ太朝臣ノ譜系ヲ考ルニ姓氏錄曰太朝臣其先出
 レ自神武皇子神八井耳命之後也トアリ又釋日本紀引弘仁記序曰安麻呂王子神八井耳命之後也蓋
 神八井耳命者神武長子綏靖之庶兄也太朝臣之姓氏未考ニ何世始賜焉トアリ此記ノ中卷ニモ神
 八井耳命者意富臣嶋田臣祖也トアリ日本紀綏靖紀ニ神八井耳命ヲ云テ多臣之始祖也トアリ扱安
 麻呂官位昇進ノ次第上代ノ一委ク考フベカラスサレバ續日本紀ノ所見ハ文武天皇慶雲元年正月
 癸巳自正六位下叙從五位下元明天皇和銅四年壬午正五位下ヨリ正五位上ニ叙シ靈龜元年

正月癸巳從四位下ニ叙シ元正天皇靈龜二年九月乙未氏長タリ養老七年七月庚午卒ス是ヨリ先
ニ民部卿ニ任シタリサレ厩年月所見ナシ又弘仁私記ノ序ノ説ニヨレバ舍人親王ト同シク養老年中
ニ日本紀ヲ撰ズルコトアリ國史ニハ所見ナシ

家塾錄

家塾錄

尾張 藤益根

凡童子入塾、今文孝經、授句讀、日一二行、或四五行、才有頓漸、不必強之、讀用俗音、不用倒置、熟讀數編、上口爲期、次論語日授十行、或二十行、次毛詩日授五篇、或十篇、熟讀宜誦之、次尙書、次易、次春秋、次禮記、日授四五十行、日宜覆讀、人力有限、不必諷七經、惟毛詩宜諷誦之、七經既畢、宜讀文選、既讀文選無字不可讀、宜讀爾雅、以知訓詁、則無書不可解矣

凡書生檢經義、於孝經、則鄭玄玄宗註、孔安國僞文、雖然宜通讀之、論語何晏集解、皇侃疏、毛詩鄭箋註疏、尙書孔安國傳及註疏、易古註疏、禮記古註疏、春秋則左氏傳、杜註、公羊傳、穀梁傳、經義無所意解、不成用也、古註皆爲意解之本、其餘註說、人人意解、泥之則不得吾意所解、宜悟入此意

凡書生、當讀史記前後漢書三國志、以至六朝正史、若不跋涉、長夜漫漫、難辨是非、宜甞勉焉、然後隋唐以下、至明清正史、當看人材事迹典章、其於史漢、則雖不必如讀經之編數、亦須刻意熟看、文章自運、得力許多、非管知事迹典故也

凡讀諸子、孟荀新序說苑管覽呂覽淮南老莊列抱朴韓非孫吳論衡等、可資博覽、唐建四庫、經史子集、子數百家、餘暇可看、後世學者固陋、志於該博者鮮矣、九流百家、不通涉者、識量狹窄、不得真儒也。凡書生、受論語句讀畢、讀唐詩、讀法不用倒置、直下諷誦、授以聲病、搆思結選、五七言絕句爲先、其法字與意一時下之、若音當揚則下響字、音當抑則下喞字、教以五音、其協和散亂、自然悟入、日課一首、漸知可否、課以律體、夫泥於倒置、意先字後、以故其害甚多、而不知有其害、專泥於倒置也、泥於倒置者、非眞作者。

凡書生、讀七經畢、宜作文章、不能自運、不可稱學者、所學古文字、必有來歷、私意造語、必得俗習、宜專禁之、泥於倒置、不辨五音協不、五音不辨、第一闕典、亦不可稱文章、宜刻意以悟入、夫士有百行、讀書自明、百行既修、猶暗自運、不可稱君子矣、詩若文、自運成立、是爲大業、不能容易得之、學者宜思焉、明有趙謙字古則、稱古先生、所著有學範六篇、一曰教、二曰讀、三曰點、四曰作、五曰書、六曰雜、其所緝錄簡要、有益書生、宜讀用焉、然古程氏學、所載書、以古書混於性理雜書、非余所取、宜除其書用其範。凡書生、暮春一日課業、曰賦、曰論、曰經義、曰五言排律、賦以觀博物、論以察識量、義以辨意解、詩以知才、自卯至酉、許以燭三條、試人才學莫如此課、書生童子輩、此日課百二十咏、以爲一日業。凡書生、暮春行鄉飲酒禮、教少事長義也。

凡學者、在於此土、歷代典章、不可不知、而近來儒者無有知之、不得稱真儒、不讀六紀十二典、不能知典章事迹制度、余分科六、曰紀典、曰儀註、曰政事、曰職官、曰輿服、曰古語、倘不能通涉者、不得稱學者。凡書有雅俗二、今學雅者把筆皆俗、以是學法帖、雖字形擬似、骨肉皆非、學者不知之、以俗爲雅、淺識可笑、非余所取、俗習所化、無一人悟之、故初學先教執筆、執筆漸熟、始可與言書而已、書論數部、暇日亦不可不知、漢溪書法通解把筆圖、最佳、容易看之、亦不能眞悟矣。

凡畫、與書法略同、然畫自有畫法、近世畫者不知運筆、惟用指端、故所畫欺魄遊魂、無有精神、君子爲之、宜刻意精密眞悟、運筆有以直筆偏執者、雖筆直、不知直腕之意、故無精神、宜用意知焉。

凡和歌、此土韻語、學者當必言之、言之有曲直之異、直者爲正、曲者爲邪、近世邪曲櫛比、無知正道、臺閣中守正道亦惟一家、當須虛心學之、進退起居、觸物有作、其精粹具實德者、一生得一首爲足、是君子所爲、非稱一藝者。

凡樂、律呂五音、天地自然音聲、非人力所造作也、學者不可以不知、然性有知不知、雖吹律有不能奠其聲、學而熟之、則得聽五音、熟不宜用意修焉、所傳諸曲、有六朝隋唐及韓、前代舊聲、非淫靡之音、通謂之雅、非周雅也、其器吹彈有法、宜擇良師受之、夫人聲所發、必有私意、自然正聲、非師承悟入不能得焉、其私意所發、勞而無益、雖善熟之、非舉體之聲、知者不取之、彈絃亦然、非自然腕力、不能得正聲。

凡天文、五行、醫術、各有專門、後世學者無知之者、以爲方術一伎、非學者所修、以不知不恥之、其推步數術、勝克禍福、治療疾病、徒費寸陰、宜附專門、然其天文、堯典記之、聖人所知、五行、洪範所傳、在漢劉歆父子精微傳焉、醫術、黃帝所論、扁倉所善、仲景傳方、後世學者、不能知其大要、可謂疎漏矣、近世醫者惟知以方書調藥、非真醫也、醫診脈知微能察未然、不救未發、非真醫也、其察未發、非診脈、不能得之、今醫不知診脈、有以已不知嘲之者、可謂固陋矣、學者略知察脈、宜加攝養焉

紀典學に關する文書

一此方書籍何を讀可申哉と御尋ニ付家翁ニ學得ハ趣紀典ノ學問ノ一共書付入貴覽ハ

夫此方學問ヲイツノ時カラニヤ和學ト唱申ハ是ハ漢學ニ對シ申ハ事ニテ總テ和ノ日本ノ扶桑ノト申事容易ニ人々申間敷ト也加様ニ申習シ廣ク成タルヲナレハ今頃世間ヘ流布シ和學ト申サヌ様ニモナラヌヲナレモ心得タル人ハ申サズ夫故拙者流ニテハ和學ノ一ヲ紀典ノ學ト申ハ先左様ニ心得アルヘキト也勿論神學ト申事モ此内ニコモレリ何故ニ和學ト不申ワケテモ紀典ヲ學ヘハ自ラ明也扱神學神道者ト申ハ固陋ナルヲナリ家翁少クヨリ此方學問ニ心懸深クハ宜敷事モヤ有ト諸流ノ神道粗學ハレ其奥義口決モ大略傳ヘ得ラレハ奧秘ト申テハ神籬磐境或ハ住吉傳ナト皆々境見ヲ飾リ作リタル物ニテ益モ無御座ハ故見破リテ不被用ハ是モ紀典ノ學ニ深ク入レハ自ラ其理分明ニ相見

ハ
一紀典ノ學ト申ハニモ其類六色アリ一ヲ紀錄ト申二ヲ儀註ト申三ヲ政事ト申四ヲ職官ト申五ヲ輿服ト申六ヲ詞語ト申ハ此六色ニ通達アレハ此方ノ故事明ニ相成用ニモ可立學者トナレリ然モ人ノ才ニ限アレハ六色ニ悉ク通達詳ナリト申事ナラヌト也扱人ニモ得手不得手アレハ六色ノ内ニ一色ハ精シク通シ餘ノ五色ハ涉リテ居レハ自ラ識見明ニ成ト也

一紀ト申ニモ正史假字史雜史故事傳記小説地理氏族ト申八品ノ分チアリ

正史トハ書紀世ニ日本書紀ト申候古本等考合セ 續紀世ニ續日本紀ト申候 後紀是ハ今亡申候類聚國史ノ中ニ纔ニ殘アリ紀略ト申書右二色ニテ補ヒ用ヒ候寫本ニ日本後紀ト申御座候是ハ眞續後紀世ニ續日本後紀ト申候 文徳天皇實錄三代實錄是ナリ假字史トハ古事記ヲ始水鏡大鏡增鏡續世繼物語或ハ榮華物語慈鎮和尚ノ愚管鈔北畠准后ノ神皇正統記ノ類ニ至迄假名文字ニテ書タル歴史ヲ申也 雜史トハ舊事紀ヲ始後記後記略記百鍊鈔一代要記ノ類數々ノ書舉ニ暇ナシ 故事トハ古語拾遺ヲ始メ江談之類ニ至マテ古事ヲ書付タル書物はモ數々ニテ書舉カタシ 傳記トハ聖徳太子傳ノ如ク一人ツ、ノ傳也記トハ諸家ノ日次ノ記ニテ其數舉カタシ小説トハ今昔物語宇治拾遺ノ類其數舉カタシ地理トハ諸國風土記ノ類ナリ 氏族トハ新撰姓氏錄ヲ始メ系圖譜學ナリ此八品ヲ紀錄ト申一家ノ一也

儀註ト申ハ弘仁内裡式延喜儀式ヲ始メ西宮北山江次第ニ至マテ朝廷ノ公事儀式ノ學問也今公事ト申公事根源ノ類ニ留ルコニアラス
政事ト申律令格式トテ律ノ殘編令義解集解類聚三代格延喜式ヲ始メ政事ノ學問也
四ニ職官ト申今世ニ申職原ナリ令ノ官位職員ヲ始職原抄公卿補任ニ精敷學問也
五ニ輿服ト申裝束車馬ノ飾等ニ精キ學問也其書ト申テハ衣服令彈正式ヲ始メ雅資裝束抄ニ飾抄其數多し

六詞語ト申詞ハコトハニテ世ニ云歌學ナリ萬葉集ヲ始メ代々撰集總テ古言ニ委敷通スル也語トハ物カタリナリ物語ハ此方ノ文ナレハ歌ノ詞物語等ノ詞ニ委敷通スル是ヲ總テ紀典ノ學ト申。和學ニハ如此六色ノ品々有之ハ其先々紀典ノ學ニ志ノ人ハ紀六部典十二部ニ通シ其上ニテ自分得タル專門ノ業ニ心懸有ヘキコ也紀六部トハ前ニ申ハ正史ナリ典十二部トハ古事記舊事紀古語拾遺新選姓氏錄萬葉集律令三代格弘仁内裏式延曆儀式延喜式是皆古書ニテ先々通シ可申書也

一右紀典ノ學通シハハ自ラ文字ニ通シ漢土ノ書モ讀可申去ナカラ經史ニ通スレハ文字精ク相成ハ故學令ニヨリ孝經論語毛詩尙書周易禮記春秋素讀終リテ義理ヲ用ハ古註ニヨリ可申ハ只今一統ニ宋學行ハレ素讀ト申ハ四書扱小學ノ近思錄ノト申ヲ用ハ是ハ新敷ハ故此方古書ノ意ニ不合一ニテ引用ヒハニモ齟齬イタシハ事故不用方ニ御座ハ前々之通七經ヲ用扱文選ヲ讀文字能讀ハハ、史漢書者勿論歷代ノ史ニ通シ被申ハハ、識モ自ラ明ニ相成ハ總テ學問ハ博物ヲヨシト致シハよしサリトテ筋モ分リ不申ハハ其道ニ立入コモ迷多ハ故如此其筋々ヲアラマシ書付入貴覽ハ委ハ愚書付シ家熟科錄ト申書ニ學問ノ致方科ナト書付ハ紀典ノ書物ハ紀典通載ト申書ニ不殘書載ハ乍去此書ハ未草稿ニテ難入貴覽ハ

一紀典ノ學前件之通能學可申事ニ存ハ扱自身イタスワサト申ハ先和歌ハ出雲ノ神詠ヨリ起リ天

地鬼神モ感動イタサスル徳御座ハ事ニテ各詠出致ヘキト也詠出致トテワガマ、ニ三十一字ヲナラヘハハ僻事ノミ多テ魔道ヘ落入識者ニハ被笑申ハ事也正風ニ心ヲ寄セ可申事也扱正風ト申事知レタル様ニテ風人ノ分チ難キ事と承申ハ夫故世ニ申和歌ノ達人モ多自運ニ迷申輩十二八九ハ有之中古臺閣ニテモ家定リテ二條冷泉ノ二流有之ハへとも二條冷泉本同しくハ家傳之書物并ニ正風ヲ正敷受傳ヘ有之ハ流ハ冷泉殿トソ承ル委敷由來を申セハ南山ノ竹ヲモキリツクシ可申ハ既ニ御承知ニテ冷泉ノ門ニ被入ハ御方ノ事故畧申ハ

一書ハ姓名ヲ記ニタルト申小伎ニハへ共右ニ雅俗ノ二色有之善手跡ニテモ俗ト惡敷手跡ニテモ雅ナルト差別有之其位有之由心正シクハへハ筆モ自ラ正シク雅ナルト也

一音樂ハ樂家代々其藝ヲ勵ミ素人ノ容易ニ達ハ事ニ無之ハ去ナカラ拙テモ其筋宜敷と惡敷と差別有之ハ素人タリトモ筋宜敷學ヘキ事也聲音ノト不解ハとも學者ノ恥ヘキトニ無之ハトモ讀書ニ氣疲レタルを轉シ一弄イタシハへハ養生ノ一理ニモ相成ハ故人々ノ勤事ニ無之ハへとも志有之ハハ、可學ト也和琴ト申ハ伊弉諾尊御製作ノよし是ハ御神學ト申此方ノ宗席頌歌ニ彈シハ夫故人々學ハ事無御座ハ地ニ墜不申ハ其御家トテハ四辻殿ト申秦箏モ兼タル御家ナリ箏ハ隨分學シハ事ニハ故大納言殿ハ古今稀ナル聲音ノ達者ニテ幸親ク承リハ事ニテ御傳モ暫承ハ事也右ノ門ニ不入シテ彈

カタキト也扱三管ト申左方右方京方ト只今三方有之ハ是も委申ハへハ長キトニテ大要申ハへハ京方ト申ハ古ノ雅樂ノ樂家ナリ京方ニテ笙ハ豊原家ヲ豊ト唱申ハ笛ハ大神家ヲ山井ト申ハ齋栗ヲ安倍ト申ハ右ノ家神樂ノ家ニテ大和舞ナト申盛徳ノ舞モ有之御遊ノ節此三家重ニ預リハ事ニテ左方右方ハ隋唐拍ノ舞ヲ司リ鼓吹司ノ樂ニテ鄙シキト也當時豊隱岐守順秋ト申上藝ノ笙也山井備中介景貫ト申上藝ノ笛也 今上ノ御師範ナリ安陪マ雅樂助季康ト申齋栗ノ名人百餘年已來無之上手ト被呼ハ人也右ノ門ニ入テ學ヘキト也左右方ニモ師家トテ弟子トリスル家モ有之ハへ共筋ヲ正セハ右ノ流流ニ隨ヘキト也詩歌ノ歌ハ方被傳ハ御家モ綾小路殿持明院殿ト申是も其門ニ不入シテ歌ヒカタキト也琵琶モ西園寺殿右ノ別ニ橋本殿園池殿ナト有之樂家ニモ山井右方ノ林ト申家ニモ有之入門致シ學ヒ被申ハ事也

一裝束衣紋ト申事抑衣紋ノ起ハ花園大臣有仁公ヨリ始リ大炊御門殿江傳レリ其後山科殿ノ家トナリ代々内藏ニモ被任御裝束調進ニテ衣紋ノトニ預レリ堂上大方右ノ流ヲ被用ハ扱高倉殿ハ豊臣大閣ノ節家ヲ被起故ニ武家ノ衣紋ハ大方此流ナリ著用ニ傳受モ有之カワリタルトナレモ既ニ左様ニナリ來リ右ノ御家江傳ヲ受ヘキトハ受不申ハテハ致シカタキトナリ

右之事共世遍ク存タル事ニテモ御座有ヘキナカラ序故認申ハ以上

河村氏家學拾說

寬政辛亥二月

一宮御社中

一四〇

河村培二郎益根

刻孝經鄭註序
論讀式
論吳漢兩音

刻孝經鄭註序

孝者、百行之本、五教之宗、故自天子、至于庶人、未有不由斯道、而成其德者也、是聖人所以述作而垂訓後代、嚴然著明矣、逮于天平寶字、勅令天下家藏一本、精勤講習、經所謂明王之以孝理天下也、逮于天長十年、

皇太子始讀孝經、從是厥後、東宮若幼主、始讀書、必用孝經、擇博士置侍讀、畢則設饌賜酒、博士獻題作序、御製親寫天札、詞臣獻詩、名曰竟宴、嚴行其儀、禮也、台記玉海、若東鑑等、載讀孝經、當時搢紳亡論、戎馬之徒、尚不廢孝經、可以知也、逮于應永年中、宋儒之書、傳入於我、國郡稍習其書、以廢孝經、特搢紳之家、奉其故事而已、於是孝經不行天下、蓋四百年、可謂聖人之教、有所不行矣、可歎之甚哉、夫經文秦燬之後、出河間顏芝、劉向參校古文、定此十八章、而孔安國傳於古文、鄭康成註於今文、兩家之註、并行于世、學令、立置兩家、逮于貞觀二年、革置唐玄宗註、稱曰御註孝經、制曰、安國之本梁亂而亡、今之所傳、出自劉炫、辭義紛蒼、誦習尤艱、康成之註、比其註書、義理專非、又稽之鄭志、不註孝經、故玄宗廣酌儒流、深廻叡思、爲之訓註、以闡微言、自今以後、宜立學官、以充試業、據之、則孔鄭之廢、始於貞觀、然安國之傳、行於世、康成之註、廢於時、今所傳群書治要載存十七章、遂刻于家塾、以示同好、是於經文、不失其真也、庶幾遂行天下、家貯一本、人知孝悌、以助教化、猶如寧樂時也、惟愚不肖、在於草莽、妄執涓埃而

已

寬政三年辛亥冬至

尾張 藤 益 根 撰

論 讀 式

凡讀式有三、一曰詔書、二曰勅書、三曰經典、詔者、朝廷臨大事則用之、其讀法用古言、是謂之訓、訓者義取古言可爲法也、勅者、百司承旨、而爲程（マ）式奏事請施行者、其讀法、錯音倒置、是取施行而易通也、經典以音直下、不錯以訓、斯謂之古讀範、中古有點圖者出、以讀勅書式、讀經典百家、就容易失經常、是走活法而避死法、所以招害遂深也、至于今日、流弊已極、古訓亦廢、獨以倒置、爲不刊之法、世之卓然有力唱古者、亦未能復焉、泥於舊染、未知其弊也、其讀勅書式、用倒置之法、宜哉從事之便也、周公聖人、與群下矢誓、其誥煩而悉、以訓於衆故也、若夫咎繇之謨、畧而雅、斯與舜禹共談故也、學者橫經親對聖賢、然聽其發聲、冗語啞然、上下改序、天地易位、而後爲句、始通其義、各自以爲經國大業、以此可修、窮理正心、以此可謂、豈不悖哉、余攷古大學、博士一人、掌教授經業、課試學生、助教二人、掌同博士、學生四百人、掌分受經業、音博士二人、掌教音、解者曰、音博士、无生、學生、先就音博士、讀五經音、故不別置、釋奠都堂講論、曰執經、曰執讀、傳曰、音博士、讀七經之音、執讀是也、座主博士、通七經之訓、執經是也、有司曰、謹具請行事、傳曰用音、大祝讀祝文、傳曰音讀、其古之爲讀如此、戰國已後、萬事壞廢、學者因循流弊、不攷掌故、有識之士、如是而可乎、余及長、慨然歎息、勇革舊染、頓廢倒置、其始茫然無所解、積歷三年、一旦有悟、一字生一字、一句生一句、則讀經史百家、猶如觀字母省文、於是乎得直下解義之法、又有悟音升

降闔闢，於是乎得五音和諧之法，古學者，學有淺深，才有高卑，其文章自運，雖工拙不同，而於五音和諧則一也，戰國已後，至於今人，各以所見，發作文章，上逐漢魏之蹟，下逼宋明之膚，然五音散亂，不得和諧矣，臨文誦讀，舌本曾次，殆若逆坂走丸，敗絮過棘，不得快活透脫也，是泥於倒置之法，不問直下之義也，蓋字出於音，音屬於字，義之所藉而爲生也，故字之連屬爲句，非音之和諧爲貫，何以得稱文章乎，一字生一字，一句生一句，纍纍乎如串珠，班班乎如等級，然後可謂文章矣，余也固陋學淺才短，然從一解於此，所作文若詩，從頭字下，字取其音，音取其諧，其拙劣無響，分以不才故也，海內豪傑髦俊，若有一省於此，必得爲全才也，夫欲知五音和諧，無若廢倒置，倒置爲弊，能使五音散亂，其害不一，漢試學童，諷書九千字以上，乃得爲吏，近來絕無諷書，是以倒置之法，授之句讀，上下迂回，不得其正，邪橫勉強，所以不行也，童而不諷，長而作文，偶有所記，字無所統，其如下字，以例填之，假令無有錯置，於音不諧，是其弊一也，學者平生熟於倒置，其心自然迂曲，一墜薰蕕，不知其臭也，立意論文，從此中生，總隔一層，其弊二也，不廢倒置，無救其弊如此，故家塾廢倒置之法，以授句讀，五十字若百字，分稟性頓漸，不必拘多少，以上而休，明日背文復之，無一遺忘，則授其次，如是習熟，又時時會於一堂，課諷其文，童蒙互競而勉焉，若有忘失，心知所恥，雖督責不嚴，日進其業，餘暇每字，求其訓，而論直下解義之法，則其臨文如步平地，不承屈曲迂回之弊，今也在塾中者，一日聞其說，明皆直下解義，非若余三年用力之久，始得其解也，由是觀之，

非人難能，惟泥舊染，不知爲之也，或難之曰，彼此音韻乖異，惡得辨和諧，不若倒置之爲便也，余曰，非，譬之十有二律，互爲宮位，宮位一定，五音乃協，彼此異音，是宮位之不同也，宮位一定，是五音之所同也，若能潛心於此，以審音韻不同之同，自然懸解，悟之於方寸之內，而辨之於呼吸之間，則五音和諧，明如皦日，殊方異域，音韻乖離，而其於五音一也，知之不難，而皆不知之，是泥於倒置之法，總不能出其範圍也，余不辭固陋，說而排之，非復好奇而然，將以救其流弊也，若夫不能用力乎此，徒論是非者，不足與言之也

論吳漢兩音

夫王仁之讀經史也，必傳魏晉之音，以之授於太子也，不用俗語若韓語，以倒置其讀，明矣，爾後往往人熟其音，奕世二十，歷歲四百，其間惟其傳業者，東西兩史氏，世奉其職，以備其員而已，逮天智帝，諸皇子諸臣，嫻於文辭，蔚然成章，以垂後世，其我與彼往來，肇自南朝，及于隋唐，大凡南朝都于建業，卽江左之音，本是吳音，其音傳於我，名曰吳音，及隋唐，南北一統，我傳其北音者，頻頻輩出，蓋羽翼及袁晉卿是也，北朝，於古長安漢之地，故名曰漢音，逮

桓武帝，定制，漢音用儒書，吳音用釋書，博士家隨其制，然吳音行于世最久，平生言語，若品物名號，皆

然、史稱

仁明帝、耽經史、能練漢音、又曰、善真貞三傳三禮爲業、(缺割)兼能談論、然不學漢音、不辨四聲、總用世俗謬訛之音、此稱漢音者、蓋晚唐音、非所謂北音也、當時雖皇帝之貴、費叢思於音、可以知也、蓋兩音雖本出於彼、遂成於此、共爲我生來之音、不能對彼而通、亦以足於此用讀書、此學者與譯人所以異業也、定制旣分漢吳、然於成用、其理一也、且其熟於吳、最舊矣、人易通曉、不必擇漢吳、於事無害、讀書者、不可不知也、其審察焉

偶
談
全

偶談

藤益根

人の行實は孝悌の道より外なし此道にかけたる人は萬事一も成かたし少敷才ありとも此本をまもらされは家ほろひ身うしなふ文武ともに此道によれり周禮の六行孝悌睦婣任恤は箇條に分て孝悌のあらましを教る也孝悌は天の道なり所謂舒之幙於六合卷之不盈於一握といふにひとし孝於父母弟於兄長は孝悌の一握なり此一握を得て治國平天下は孝悌の六合を幙へる也韓非の堯舜をさみし蘓秦の曾子をおとすは語勢にまかせて譬喩するなり泥む事なかれ何事も孝悌の心より出たるにあらされは一旦は幸を得て榮ふるも終をとけかたし抑讀書文才ありて孝悌の道にかなはざる人有是遠を求て近きに失る也心に少しの違あれは毫厘千里の誤たるへし孝悌の本たるに心なくては文才ありとも君子といひかたし或は天性篤實無學なる人孝悌の道にかなへるありしからは讀書無用にて孝悌をさへまもれはよろしかるへきや是にては此道をひろむる事をしらす所謂孝悌力田表於門閭一箇の人のみ故人は讀書文才なくてはよろしからす十室之邑必有忠信如丘者焉不如丘之好學也とは此意にて其餘六

言六蔽學問なくてかなはぬことみるへし今村學者程朱を學ひ文才もなく識もひろからず理のみ講して道をしるとおもへるはあやまりなり人々心に孝悌を守り博く書に通し文道を傳ふ用をしり詩性情をのふるにたらは耻なかるへし凡四民をのく業有て專一學問する事かたしと嘆く學問によりて家業を破るも是孝悌の道にそむけり心に孝悌をまもりて少の暇を得ることに其程々に書を讀文才をやしなひなは學に淺深才の短長ありとも君子儒といふべきなるへし

古童蒙に句讀を授る孝經論語五經と次第し文選を讀史漢に通し詩文を學ひける歴代の史諸子百家人々の力にまかせ一生の業なるへし今四書の句讀をうけ孝經の名をもしらざる人有孝悌を教る道にあらず平城の朝には戸々に孝經一部を挾へき詔もありて孝を先せらる學令にも孝經論語五經と出たり學問の道古風を失る嘆息すへし

漢儒經書の註詁訓といふ孔穎達疏に詁者古今異言通之便人知也と有て其字義にくわしく通るを云詁訓を疎にして誼を先にするは宋儒なりまして此方の言と字とは異なれば詁訓を疎にしては其誤多し字義にうとく精密ならされは義にそむき古書に通しかたく文章を著にも誤て字を下す先輩往々見へたるは詁訓の學にくわしからざる也漢儒の詁訓を先とせる左あるへき事なり楊雄不爲章句訓詁通而已といふは別の事なるへし

詁訓をくわしくしりそのうへ熟讀すれば意解といふ事ありて經義をよく解しうれば一事のみならず萬事にかよひて活用を得る事あり是まことの經義に通すといふへし漢儒の經傳を本として意解をそふれば是にて用を得へし新異の説をよろこひて經學とおもへるは本意にあらず異説を知るのみは禁する事にもあらし

古へ書を讀に點圖といふ有て四聲を點する法に習て字の四方左右上下にしるして假名をつけず假名をつけたるは古はなし淳和仁明の帝などは音にて書を讀給ひし事みゆ後に此點といふ讀方になりたるや文選白氏文集等の古き讀方もはるかに後の事なるへし菅江の儒など専ら五經を訓せられしを傳へて羅山の比まてはまゝ残りたるなるへし今道春點といふは訓長し其後省略を先にして古訓すたれゆくおしむへし省略の訓を先にして音多く讀たるをきこへたゝしきやうになりたる世にて是も漢學者のたゝしき讀方とおもへるはなげかし書を讀に音にて讀へきは地名人名の名目のみにて其餘は古訓にしたかひてよむべき是を古の讀方といふ又古の讀法は音にて讀下すへし予十年前より此讀法を心に修練しけるか漸便利を得て詩文も皆直下に文字の出るやうになれり巧拙は其人の力なからも此法にあらずは著述おほつかなし或は是を信して音にて直下す少しく年を経て自由を得つゝ大に悦て言けるは訓にて書を讀はまことにわらへのたはれことのやうにきこゆとてわらひける學者此に心の

つかすして古訓のななき訓をよみけるは歌書など讀やうに覚え省略の訓に讀ける是そたゞしき讀方とおもへるは習俗に染たる心よりあさまし直下の讀方よりみれば訓讀皆わらへのたはれことなりしかれとも古訓のよみかたは優にやさしくまことにまされるなり凡直下の讀法佛者の經を誦するに似て似す意を上下して義を解す習を去り直下に義を解す發明なくは誦經とひとしく益なかるへしくわしくは後に記すへし

やまとふみは音にてよむ事なくみな訓にてよむ是も本文にかなを下しけるは印刻の比の事にや古字の書紀續紀文徳實錄三代實錄古事記萬葉集みな假名を下さす書紀の註何此云何といふは養老の私記にや先人集解を著し給ふとき此疑を残して削らす今傳ふる私記といふ書文字の下に假名の註を下せり古へ如此しるせる事にや古事記南朝の比の書寫三代實錄大永の比の書寫にも假名をつけすしからは其後の事とみゆ朝鮮墨刻千字文をみるに文字の下に諺文をしるして註のことし旁に訓をしるせるはいかにもうるさし今の習となりて便宜に覺ゆるはいたき事なり書紀のうちにも音讀にすへき文字ありて其字には皆四聲の點を加ふ本聲にはあらず人皆うたかふ近比西國の人書紀校正したる凡例をみるに此點無用とて省けるよしみゆおしき事なり先人著せる集解には蕃人の名などは此しるしを下さす原本にゆつれるなり凡此點推古天皇十二階の名音にて讀しとみゆ訓をもちひす今其しるしを擧

其餘は推てしるへし大徳の大。平聲濁音のしるしなり大本聲は去聲なれとも此方の習にはこゝにて平にて濁れりたいとくとよむまじきしるしなり大仁の大。平聲の清音仁去聲たいんと讀へきしるしなり大禮。二字とも平聲清音のしるしなり大信の信。平聲しるしあり本聲は去なり大義の大。平聲のしるし義。平聲の濁音のしるしあり本聲は去大智の大。平聲濁音是しるしにて古の讀かた今もつたはれり今だいとくをたいとく大智をたいちとよみけるは古の讀方にたかひ此點をさとらざるなりこれにて書紀の點様推しるべし今京言葉に先生の先上聲によふ平聲によへは田舎なまりといふ我郷の人皆平聲によふ是本聲にかなふといへとも呼習にたかへは人々笑ふ古書の讀習をたつねさるは笑へし但經史直下の讀法皆字の本聲にしたかふをよしとす讀習にかゝはるはあしゝ書紀のうちかへりてにはを付たるに或は一有て二なく上ありて下なきこれをそのかみの印のつけかたなり落たるにてはなく一端をしるせるなり今にては是を委しく付るは愚なりといふへし但先人著せる集解俗にならひて一二上下レのしるしをもらさすそのかみの法に習はす俗にしめしやすきゆへなり

予幼少より讀書をこのみ廿六七に及て假名の讀かた本にあらざるをさととりて音にて直下に其意を解るも上より解す法あるへしと音讀直下すること七年やうやく熟したればさとれり一旦は上より解る法も得されは疑ひおこりて益なきこととおもへり一夜王維集と唐類函と一冊つゝ左右に有けるをと

りて夏の時なれば蚊蟻に入て夜をふかす緑樹重陰蓋四隣の句を幾度も吟しければ初て蓋の字に心付て重陰の蓋ふ四隣なる事をさとれりさとてははなはた近き事ながら上下する讀法にては緑樹重陰とさりてさて四隣を蓋と解るゆへ蓋の字遠く隔て聞ゆ直下にては重陰より直に蓋の字出て四隣は其所をいふさて文はいかゝとおもふに皇太子納妃といふ一句を讀む皇太子の妃をいふといふより納の字隔り皇太子の納る妃にて大子にしたしく納の字をかけり是にて直下皆破竹のことく解りそのうへ音のとゝのふとゝのはさるといふをしれり

詩の音といふは假名つけて讀はあらはれず音にて讀は詩の國風雅頌皆音振あらはれて風にも二南は格別たゞしき音にて邶鄘衛などは曲折ありて音振にくせあり文選古詩種々あれとも皆古詩の音ありてまされり三唐のうち盛唐はすなをなり宋明みなゞ其音振ありてわくるといふはつまひらかすきたる事なれとも先一句に五音かなひ一篇とゝのふといふ事有右にかなはずは詩とは言かたし五音唇舌牙齒喉宮商角徵羽に律をあはするといふ事にはなし源流にもみゆることく人に呼吸の意氣ありて陰陽のかなへるといふことく一句直下するに唇舌のこゝろなくなるとなくよみ下して舌にもかゝらす唇をわさと開合にもおよはず次第に音出るを是をとゝのふといふ假名よみにて作りたる詩にも自然の妙はありて一句ほとつゝは是に叶へる有ともはしめより其心なきゆへ全編は其音とゝのふ事か

たし近比の作者誰人もみなゞ此難有て残り多き事なり直下の法を得て作らは自然に此難をのかるへし是詩の肝要にて作者是までこゝろつかねはなんかし

或云此方の音唐音とたかへはわかるべき理なしといふ是は其境をしらざるゆへ此難おこれりいかにも音たかへるゆへわからずとて猶更かへりてにはの法を用はいよゞ遠かるへし唐詩を音にてよみならひ此方の詩をよまは唐詩は口にたまりなくすらゞと音出つ此方の詩はよみつらねかたくとゝこほるのみなりしからはとゝこほらざるやうに出來たる音は唐詩にもかなふへし唐詩ならても見在わかるゝ神のことし法を悟りて讀覺ゆればたゞちにしるへし通事音を學ひてうゐしき音にて四聲もわかちかたきより自然に古へよりつたへたる音は猶まさるへし

文は詩のことく平仄あるにもあらねと五音とゝのはさるは直下しかたし皆上より次第に出て解し安きは彼方の文なり此方の文一枚とよめは舌強く心塞りよみ得かたし五音とゝのはさるゆへなり五音とゝのふは詩の句も同じ詩は平仄正數有て五音とゝのひ文は平仄はあらねと五音とゝのふへしそれゆへ文字の聲も同じしは稀也灑掃應對進退なと去聲を多く用たるは論語にも外にはなし但此句は去聲のみにて五音とゝのひてよみ安し是にて悟るへきなり其五音とゝのふは必宮より出て次第に音樂のことく調にあらず近くとふれば大人小兒の語のことく大人の音もとよりひくきもたかきもわ

かきもひなひたるも有ともいふ皆そのほと／＼に五音あり小兒の語は次第と／＼のふとはいひかたし是と同じく次第有を調といへり律にかけて音の上下をいふにあらす是は音樂のうへにて論すへし總て五音の道は人たるもの／＼性にてそなはれるなり五臟有て其外細にわくれは脾は宮心は徵肺は商腎は羽肝は角と位して人の五音皆是より出て本つく所は脾なり宮なり是にかよへるは徵なり商羽角其たすけと五音と／＼のふもし怒は肝驚けは腎悲は肺皆主となりて音出平和のうゑにあらす詩の聲治亂によりてわかてるも是なり但五音のと／＼のはさるにはあらす上にいへると是は又別條なり五音と／＼のはさるとは前にいへることくその次第のあしく五行にたとふれば其尅する聲つらなりて生しかたきゆへと／＼こほりてよみかたきなり此を悟らは解し易く音といふゆるかせになりかたき事も分明なるへし先音有て其音を聞は其義のあらはるとしるへし

此方の詞は其詞にて五音備りと／＼のふといふへしたとへはやさかにのみすまるといへは此九字五音と／＼のひて開合妙なる事なりしからは漢文をも訓點にてよめは五音備りて音を用るにも不及事なるへきは此詞の五音の法にては漢文字とは又かはれるゆへ文誼とそむけるなり詞の五音はと／＼のひても文字にかよはしかたきとしるへしやさかにのみすまる其製わかちがたし伊勢物語に有よしなれとも人しらす近きに笹倉某諸國經歷して對馬住吉神社に至り其製とて残るやさかにのみすまる祭の日

榊にかけて有けるよし眞清田神主かたらる其圖まことにめつらし勾玉八ッ隅にありて其餘は玉管をつゝれりいかさま是にかけて曾の程に飾となり左右へ綬のことくたる／＼とみゆ知人まれなればこゝに附録す

文字傳來のまへは此方の語にンとはねる音なしとて大神をオ、カミとよむ人有て古とおもへるは僻事也かやうの訓は字有し後に出たる訓なればオ、ンカミと讀へき音便にて古人オ、ミカミとは讀まし御、時御、歌のたくひオ、ミときはよみかたしオ、ミウたとはよみたり後オ、ンウたとはよむなり槩略推しるへし

詩は性情をのふるにて聲にあらはすなり此方にも文字ある人は皆作るへき事にて古人臺閣の人々をはしめ作らせ給ふを村學者詩を知らすして花鳥風月無益とおもへる人ありけるは鳥獸にたとふれば聲をたてざる啞といふへし鳥獸すら時を得てなきさへするを人として性情を聲にあらはす事かたさはいたまし詩經よりはしめ唐詩明詩その世の詩にいたるも其意は同じく一なり後の人情に近くあれは漢魏を覺へるより近體味多く人になへり然とも文選の五言古格別にて意味ふかく能熟讀すへきなり盛唐まことに最上乘學ひて其境にいたる事も得かたし得かたくとも心をかくへき本なり其餘歴代作者人々好る所もありて各學へる難なかるへし文は貫通の器にて學ひ得へき事なり歴代變化有けるに古文を本とす唐の韓柳六代の弊をすくふとて一家を成す格別なり宋の歐蘇世の大匠たり明に

至り修辭といふ李獻吉李于鱗格別なり王元美大家なり汪道昆富り皆一種の替り有て優り凡明の文辭は古文に泥て世風を傳へかたきあれとも又まされりといふへし此分の人の文をまなふも古文史漢を熟讀して句法文法腹中に有て筆を下さは自ら勝るへし但剽竊を専らとし文を綴るは本意にあらず朱舜水我國の文を評し文中比衰と有之六代の風ながら延喜已前文章よろし後世は前にもいへること音韻にかけたる事有てよろしからす六代の風を學ふは文選を熟覽して其味を得へし總して詩文は明人清人名無人たりとも此方の名有人よりまされり彼は音節と一のほり此は音節みたれ有てよみかたし名高き人はからの人にもまざるとおもふ人有は識のくらしきなりすへて音節にかゝれるゆへ此方の人詩にうとくしては猶更文に風韻なく書しるせる理も溫柔の味なく固陋に落入り故に彼あらはれし人々一人とて詩に精しからぬ人なし杜子美のことく文をつたへぬ詩人はあれとも詩に心かけぬ文人なし

今人書を學をみるに把筆用力の法をたつねす漫に字形を書覺へ其能熟するを能書とす字形を學ふは布置とて是もくわしく書論に出たりまつ心を用へきは執筆用力の事なり是を問ざるは本を失といふへし把筆撥鐙平覆の二様有て其餘十三法もあり但一種をよく悟り得は其餘形かはれりとも力の入は同じ事なり撥鐙法を近く學範に載把筆一法近く萬寶全書に載す容易に讀て深意を得されは形は

其法のことくとも力の入ことなければ無用といふへし撥鐙もと腕力手背力をいるための法なりよく心をつけてさとるへしそのうへ永字法をよく解し得は正書の法自ら明なり永字法一法ことに註釋あれとも是をよく解したる人稀なり墨法正宗といふ書書を學ふ益あるへし予曾ていふ書を書は射藝にひとしかたちをかへりみて筆の用もなすへしと執筆を載る書に此說符合せりそ人多は左方斜に書人あり先第一の惡習といふへし筆は天柱を真中として人の鼻通りにて書出すへきなり大字は腕下に毬をふくみ小字は卵を含ておとささる心得あるへしなとみへたるも皆腕力を用る心得にて五指に各掌る職あれは其職を失さる心をつけ腕力手背力かたちとのひたらは其上に布置を學ひ古人の書にならふへし巧拙は人々修練によれり無法にて巧なるは古來よりなき事なりいかにも字形は古法帖たりとも筆力を用る事をしらす形のみにて力なく自然に筆を運る事をしらす皆一々に筆鋒にて作れるは俗書といふへし是を今の世の古法帖學ふ人とす嘆すへし古人の書論書評種々有て執筆の法を説るはなし執筆は最初に童穉學得る事にて其うへの論評なり此方の人執筆の事をしらす古人の論評のみを高論するはおもはざる事也今古法を傳て書法を教る家もあり傳來ありてよろしき事ながら執筆の法有て口傳はとりうしなひけるなけくへし今何事も古と唱ふる事になりて書も古法帖を學ふといふは誰も云事にて實には其本をたねす字形によりて筆勢を得んとおもふは誤りなり把筆の法をよく